熊本県文化財調査報告　第１５３集

西片町遺跡

― 新熊本県八代総合庁舎建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告 ―

付編

柳町遺跡出土の木製短甲資料紹介

１９９６．３

熊本県教育委員会

口絵１　調査Ｃ区木製品等出土状況

口絵２　木製斧柄出土状況

口絵３　木製斧柄、木製柄

口絵４　西片町遺跡主要出土土器

熊本県文化財調査報告　第１５３集

NISI KATA MATI

西　片　町　遺　跡

―新熊本県八代総合庁舎建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書―

付編

柳町遺跡出土の木製短甲資料紹介

１９９６

熊本県教育委員会

序　　文

八代平野には古墳時代を通して多くの古墳が築かれ、固有の古墳文化が営まれてきました。

ここに報告する西片町遺跡は、八代平野北部に所在し、新八代総合庁舎建設事業に伴って、建設予定地内の発掘調査を実施したものです。

調査の結果、古墳時代前期の集落跡の一部が確認され、鋤や斧柄未製品をはじめ多くの木製品が土器とともに出土しました。

県内の低湿地に位置する遺跡の重要性を改めて認識した調査となりました。

この報告書が広く県民の皆様に利用され、郷土や文化財の理解、愛護に活用されることを期待いたします。

なお発掘調査に際しましては、文化財保護の観点から多大な御協力を惜しまれなかった熊本県総務部地方課、県八代事務所ならびに地元の皆様方に心から厚く御礼を申しあげます。

平成８年３月２５日

熊本県教育長　　東　坂　　力

例　　言

1　本書は熊本県八代市西片町に所在する西片町遺跡の調査報告書である。

2　調査は新八代総合庁舎の建設事業に伴う建設予定地内の事前調査として、熊本県総務部地方課の依頼により、熊本県教育庁文化課が平成６年６月から９月まで実施した。

3　出土遺物については次の専門調査員の諸先生に依頼し玉稿を頂いた。記して感謝の意を表したい。

西片町遺跡出土木製品の同定

熊本大学教育学部教授　　大迫　靖雄

西片町遺跡出土種子の同定

大阪市立大学名誉教授　　粉川　昭平

4　遺構、遺物の実測ならびに現地の写真撮影は山田大輔・高谷和生が行った。

5　遺物の実測は高谷・木下春千代・戸田紀美子が行った。

6　遺構遺物の製図は木下・戸田・日置正香・赤坂希が行った。

7　遺物の写真撮影は徳永琢磨が行った。

8　本書の執筆者は本文目次の各項目ごとに執筆者氏名を記した。編集は熊本県教育庁文化課で行い高谷和生が担当した。

9　表紙題字は米村保齢氏の揮毫である。

凡　　例

1　現地での実測作業では、遺構配置図を調査区毎に50分の１で設定し、本書への掲載は各区ごとに縮尺は図頁に示した。またＡ区遺物集中箇所は40分の１、１号杭列は15分の１とした。

2　住居跡の複合地点である土器出土の集中箇所では炭化物の集中箇所を網目で表現した。

3　調査区内の遺物の出土状況では、平面図中に実測略図及び遺物実測番号を記し、実線で示した。また一部２色刷りとしたものでは、土器・木器を青色で表現した。

4　出土遺物は全部通し番号とし、その縮尺では土器は３分の１、石器は４分の１、木器は４分の１とした。

5　出土遺物の解説は本文中に記したが、法量及び出土層位等については、土器・木製品観察表中に一括して掲載した。

本文目次

第１章　調査の概要

第１節　位置と環境 ……（高谷　和生）… 1

第２節　調査の組織 ……（高谷）… 5

第３節　調査経過 ……（高谷）… 5

第２章　調査結果

第１節　遺構

1　層序 ……（高谷）… 8

2　Ａ区の概要 ……（高谷）… 9

3　Ｂ区の概要 ……（高谷）…10

4　Ｃ区の概要 ……（高谷）…21

第２節　遺物

1　土器 ……（高谷）…22

2　石器 ……（高谷）…28

3　木製品 ……（高谷）…31

第３章　分析

第１節　西片町遺跡出土木製品の同定 ……（大迫　靖雄）…45

第２節　西片町遺跡出土種子の同定 ……（粉川　昭平）…52

第４章　考察

1　遺跡の範囲 ……（高谷）…55

2　遺跡出土の土器とその時代 ……（高谷）…55

3　遺物の各期の様子 ……（高谷）…56

4　遺物の特性 ……（高谷）…57

挿図目次

第１図　西片町遺跡位置図…… 2

第２図　西片町遺跡周辺地形図…… 3

第３図　西片町遺跡調査区配置関係図…… 4

第４図　西片町遺跡土層概念図…… 8

第５図　調査Ａ区遺物出土状況図…… 11･12

第６図　調査Ａ区遺物集中箇所実測図…… 13

第７図　調査Ｂ区遺物出土状況図…… 15･16

第８図　調査Ｃ区遺物出土状況図（上・中層）
……17･18

第９図　調査Ｃ区遺物出土状況図（下層）……19･20

第10図　調査Ｃ区内出土杭列実測図…… 21

第11図　試掘トレンチ内出土土器……22

第12図　Ａ区内出土土器……23

第13図　Ｂ区内出土土器……24

第14図　Ｃ区内出土土器（１）……25

第15図　Ｃ区内出土土器（２）……26

第16図　全区内出土石器……29

第17図　Ａ区内出土木製品（１）……30

第18図　Ａ区内出土木製品（２）……31

第19図　Ａ区内出土木製品（３）……32

第20図　Ａ・Ｂ区内出土木製品……33

第21図　Ｃ区内出土木製品（１）……34

第22図　Ｃ区内出土木製品（２）……35

第23図　Ｃ区内出土木製品（３）……36

表 目 次

第１表　西片町遺物　出土土器観察表……38～40
第２表　西片町遺物　出土木製品観察表……41～43

口 絵 目 次

口絵１　調査Ｃ区木製品等出土状況
口絵２　木製斧柄出土状況
口絵３　木製斧柄、木製柄
口絵４　西片町遺跡主要出土土器
中表紙写真　木製斧柄

図 版 目 次

図版１　Ａ区掘り下げ（全景）
遺物集中箇所内出土状況
図版２　Ａ区南側遺物出土状況
集中箇所遺物拡大
図版３　集中箇所遺物拡大
集中箇所遺物検出状況（甕）
遺物検出状況（高坏、カーボン、鉄滓）
図版４　Ａ区下層木製品類出土状況
Ａ区南側木製品出土状況
図版５　Ａ区下層木製品検出状況
Ａ区南側木製品出土状況
Ａ区遺物状況
図版６　Ｂ区遺物検出状況
深掘り部拡大状況
Ｂ区木製品出土状況
図版７　Ｃ区南側遺物出土状況
Ｃ区遺物出土状況（壷）
Ｃ区遺物出土状況（甕）
図版８　Ｃ区遺物出土状況（東より）
Ｃ区東側遺物出土状況（西より）
Ｃ区遺物出土状況
図版９　Ｃ区南側遺物出土状況
図版10　１号杭列状況
１号杭列状況（拡大）
図版11　Ｃ区木製品出土状況（木製柄）
Ｃ区木製品出土状況（木製斧柄）
図版12　Ｃ区内遺物拡大
Ｃ区内木製品出土状況
Ｃ区内遺物出土状況（免田式土器）
図版13　Ａ区内出土土器
図版14　Ｃ区内出土土器（その１）
図版15　Ｃ区内出土土器（その２）
図版16　各区出土土器、石器（上段試掘、中下段Ｂ区）
図版17　Ａ区内出土木製品
図版18　Ａ区・Ｂ区内出土木製品
図版19　Ｃ区内出土木製品（その１）
図版20　Ｃ区内出土木製品（その２）
図版表紙　出土主要土器

第１章　調査の概要

第１節　位置と環境

遺跡の位置

西片町遺跡は熊本県八代市西片町大字小路口及び餅田地内に位置する。八代平野の南部、球磨川下流域の右岸（北側）にあり、国土地理院発行の５万分の１の地図「八代」に位置を求めれば、図幅南から1.9㎝、東から21.1㎝の所にあたり、球磨川からは北側に1,600ｍほどの距離に位置している。

八代平野は、熊本県の南部、八代海の東岸に形成された南北25㎞にわたる沖積平野で、平野西側の大半は近世以降に築かれた干拓によって形成されている。

平野東部は九州山地（球磨山地）の西縁部にあたり、北北東―南南西に日奈久断層と呼ばれる大断層崖が走り、300～500ｍ内外の高さから30度ほどの傾斜を持って落ちる顕著な断層崖である。

八代平野にはこれらの山間から大小多くの河川によって運び出された堆積物により形成された扇状地や、日本三急流のひとつである球磨川をはじめ、古麓川、日置川（水無し川）、氷川、砂川などから大量の土砂を運び出し自然に陸化した複合三角州によって形成された沖積平野である。

八代海は潮の干満の差が大きく広大な干潟ができるため、近世以降は数多くの干拓事業が進められ、現在の八代平野が形成される。

西片町遺跡の位置は第１図に示した通りの状況である。東側の日奈久断崖を構成する山麓から約1,500ｍの距離の平野中央部に位置している。

一方球磨川が下流に向け、蛇行し、大きく屈曲する箇所からは、直線距離にして1,200ｍの距離を保ち、当時の洪水氾濫域として、想定できる十分な地点でもある。

八代平野では水準的には、南北に走る現ＪＲ鹿児島本線の東側までは、経験的に弥生及び古墳時代期の集落を含む多くの遺跡が残存しているとされている。

遺跡の環境

弥生時代では球磨川南岸には環濠を持つ有力な集落遺跡である下堀切遺跡が確認されている。一方球磨川北岸で本遺跡に近隣する弥生時代後期の遺跡としては、次の３遺跡があげられ、その概要は次のとおりである。

西片遺跡（西片町園田）

須玖式、野部田式、須恵器、土師器、土錘

沖片遺跡（西片町辻田）

野部田式、須恵器、土製紡錘車、円面硯

長田遺跡（長田町石原）

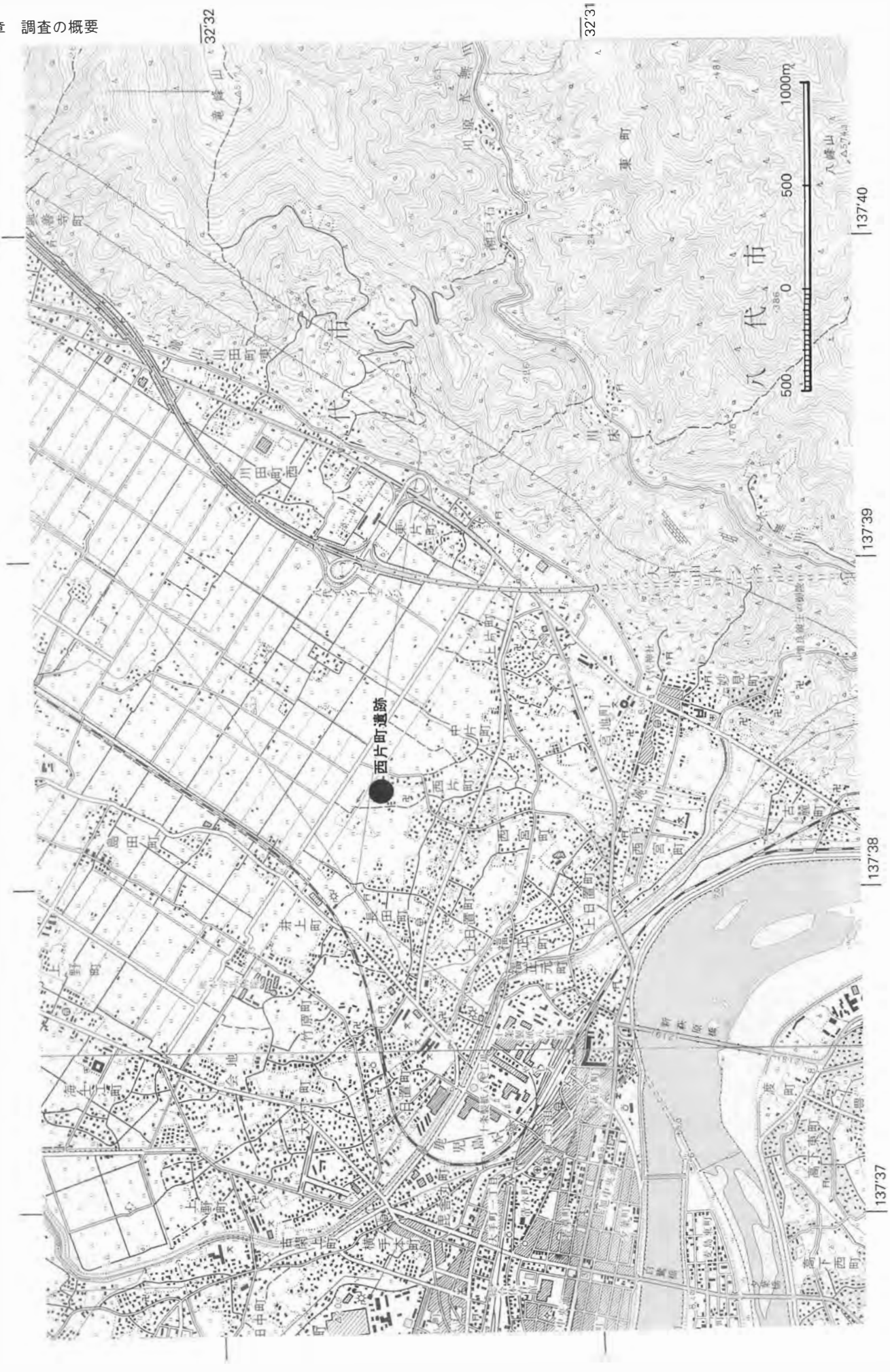
黒髪式、野部田式、須恵器、土師器、軽石製岩偶

これらの遺跡は全て採集資料での遺跡の把握であり、球磨川北岸で発掘調査により遺跡内容が判明する弥生時代後期の調査事例は初めてのこととなる。

古墳時代では本遺跡周辺部に多くの古墳群が形成される。

主なものとして八代平野の最有力者の墳墓群と考えられ、大型の古墳が多く、しかもすべて前方後円墳から成る大塚古墳群は、長塚古墳、八代大塚古墳、茶臼山古墳、高取上の山古墳で構成されている。さらに上片町から東片町にかけては、上片町塊の岩屋古墳群、乙丸古墳群、東片町古墳群等の一連の古墳群へと続く。

現在までに球磨川北岸で、古墳時代集落の調査事例はない。そのなかで約1.5㎞離れた瓢楼堂(ヒョウロウドウ)遺跡では住居跡が確認され、八代大塚古墳付近からは甑取手が採集されているのみである。

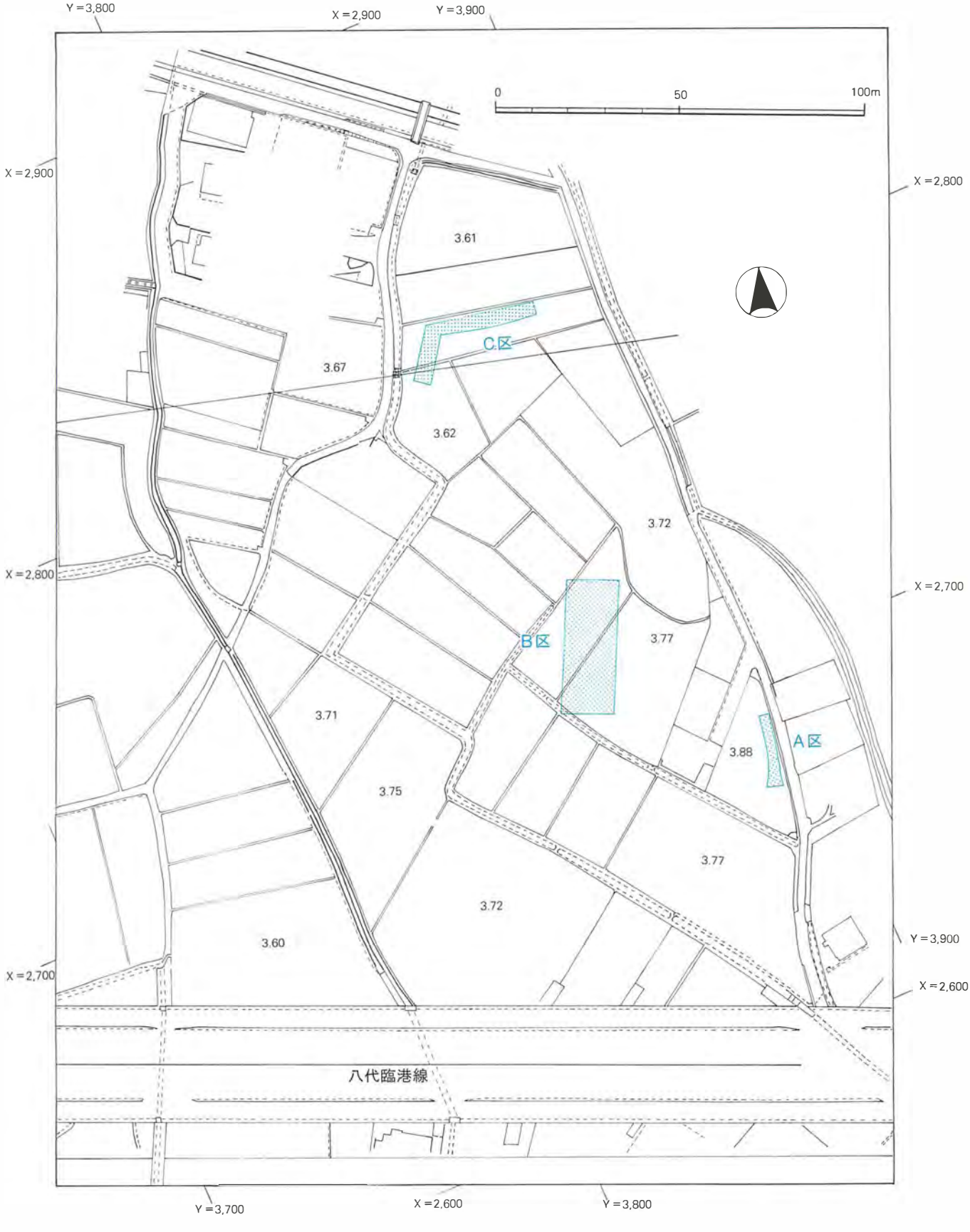


第１図　西片町遺跡位置図

第２図西片町遺跡周辺地形図に示すように、遺跡の周辺部においては、現況地形は水準差が20㎝前後と殆ど平坦であり、多くの旧起伏は隠されている。

水田面には近年の重機による開田は見られないが、伝承では田に隣接する微高地を昭和20年代までは畜力等で改良し、水準化していたと聞き取りを行った。

旧地形の残存は近年までは、思ったより良好であったようだ。



第２図　西片町遺跡周辺地形図

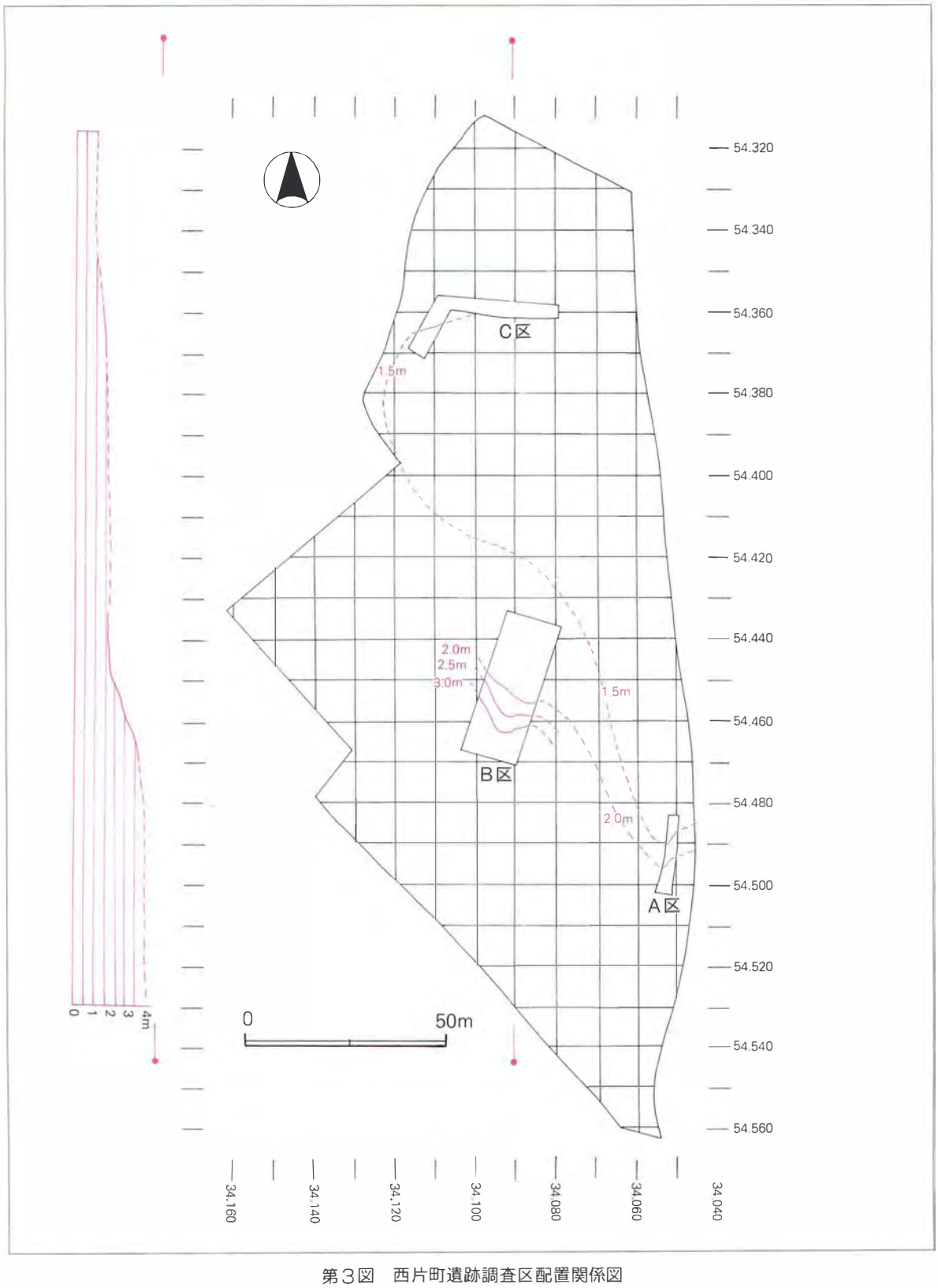
詳細な旧地形の復原を行うには、今回は調査範囲が狭く、試掘調査時のデータを含めて検討しても、微高地の状況が判明しない。

当時の旧地形は周辺部の大小の微高地に左右され、かなり複雑であったことが想定される。

調査区第３図の調査区配置図に一部示すように、等高線ラインは調査地区内水準レベルを、机上で繋げ復原したものである。本格的な現地での復原作業は実施できなかった。

旧地形の基本動向としては、南から北方向に傾斜し、調査区中央部で顕著な落ちを有している。

ＡＢＣの各調査区は、箇所によっては最大で60m程度離れているため、調査区の相互の位置関係を示すため、基本となる10m規格のグリッドを調査区全



第３図　西片町遺跡調査区配置関係図

域に設定した。

第２図の本地点座標系に対して、第３図の任意で設定したグリット長軸の振れは、Ｎ－６度48分20秒－Ｓである。

第２節　調査の組織

平成６年度発掘調査および、平成７年度の整理作業・報告書作成の組織は下記のとおりである。

平成６年度

調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　桑山　裕好
（熊本県教育庁文化課長）
丸山　秀人
（熊本県教育庁文化課長補佐）

調査総括　松本　健郎
（熊本県教育庁文化課主幹
文化財調査第二係長）

調査事務局　白井　哲哉
（熊本県教育庁文化課長補佐）
木下　英治（主幹・経理係長）
高濱　保子（参事）
中村　幸弘（参事）
高宮　優美（主任主事）

調査担当者　高谷　和生（文化財保護主事）
山田　大輔（嘱託）

発掘作業員

稲葉こずえ	稲葉貴子	上野アヤ子
梅田美春	沖田ハル	坂井あけみ
白木昌代	田中ミツエ	谷川徳丸
浜田　忠	浜田富子	引地ミツル
前田久子	前田ヤスエ	松田　正
宮崎りえ	宮本真里代	宮村正行
持田正利	山本きみよ	山本博隆
山本優香里		（５０音順）

平成７年度

調査責任者　桑山　裕好
（熊本県教育庁文化課長）
丸山　秀人
（熊本県教育庁文化課長補佐）

調査総括　松本　健郎
（熊本県教育庁文化課主幹
文化財調査第二係長）

調査事務局　白井　哲哉
（教育審議員）
藤本　和夫
（主幹・総務係長）
高濱　保子（参事）
高宮　優美（主任主事）

整理担当者　高谷　和生（文化財保護主事）
木下春千代（嘱託）

整理作業員

塩田喜美子	大塚磯子	宇野玲子
益田久子	境美恵子	

報告書作成員

戸田紀美子	児玉晶子

専門調査員

熊本大学教育学部教授　大迫　靖雄
大阪市立大学名誉教授　粉川　昭平

調査協力者

三島　格（肥後考古学会長）
吉永　明（八代市教育委員会文化課）
澤田宗順（八代市教育委員会文化課）

第３節　調査経過

調査に至る経過

熊本県総務部地方課では、戦前に建築された旧制八代中学校の校舎を昭和45年に改築し、26年間にわたり、利用していた熊本県八代総合庁舎の老朽化が著しく、庁舎機能の充実がこれ以上は計れないため、新庁舎の建設に向けて計画を策定した。

新庁舎は現在の庁舎機能を更に充実させ、県八代保健所等の施設を併用した多機能施設とし、さらには県民及び利用者の利便を図るため、市北部に位置する臨港線沿いの本箇所を平成３年６月に選地した。

その後地方課の依頼を受け、本課では当該地区に埋蔵文化財の包蔵が見られないかどうかの試掘調査を、平成５年７月２６日～２７日まで実施した。

その結果、当該地区には弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての遺物が採取された。特に遺跡の広がりは敷地内の東南側と北西側に大きく分かれることが判明した。

ただし試掘調査が、豪雨後の調査区全域が水没し、冠水するという悪条件の中での調査であったため、遺物を含む文化層の状況等については、不十分な把握のままでの調査着手となった。

調査地区の設定では、遺跡の範囲内にできるだけ構築物を設けないよう数度にわたり、地方課と協議を重ね、可能な範囲内で設計変更を依頼し、文化財保護の立場から遺跡の保存に努めた。

そこで最終的に東側の水路掘削部分150㎡、北側と一部西側の水路及び浄化槽設置箇所の掘削部分250㎡、調査区中央部の庁舎建物本体及び基礎部分の掘削範囲600㎡がその調査の対象範囲となった。

調査の総対象面積は1,000㎡、調査期間は当初予定で３ヶ月間である。

調査の経過

西片町遺跡での調査区配置では、調査を実施する地区ごとに北からＡ区、Ｂ区、Ｃ区と仮称した。

即ち東側の水路掘削部分の150㎡をＡ区、調査区中央部の庁舎建物本体及び基礎部分の掘削範囲600㎡をＢ区、北側と一部西側の水路及び浄化槽設置箇所の掘削部分250㎡をＣ区とした。

各調査区間は最大で60m程度離れているため、調査区の相互の位置関係を示すため、大グリッドを設定した。詳細は第２・３図に示し詳述した。

当初Ａ区から調査に着手した。Ａ区は市道に隣接しているため、すぐ横を常時通行する車両に安全面での配慮を行いながらの調査となった。特に車両の徐行がなされなかったり、調査最終場面では、数度の水没により調査区の壁面が崩れ落ちることが度々起き、調査に関わる安全面での課題を提示した。

また通行車両については、毎日多くの車両が通行するため、県八代事務所から調査最終段階で警告看板の掲示を頂いたが、調査当初からの設置が望ましかった。今後同様の場面においては、抜本的に通行規制等措置の事前協議が必要であろう。

Ｂ地区では、水中ポンプで排水する側溝が隣接して設置されていなかったため、排水に困難をきたした。またポンプが最下層の砂を吸い込み、停止し、排水が困難になることも多かったため、臨時にドラム缶に網を溶接しての釜場の作成設置を行った。

Ｃ地区では特に西側に隣接し、現在も利用されている生活用水から降雨時には水が流れだし、調査区が全て冠水することが度重なった。今後は調査着手前に事業者側に依頼し、止水の土盛りを設けるなどして、事前準備に関わる工事の必要性を痛感した。

また調査を通して降雨後の排土移動は困難を極め、そこでの一輪車での排土は不可能であった。土砂は水気を含み重量があり、通常の運搬では困難な作業内容であった。利用した小型のベルトコンベヤーでは土砂の重量から作動停止を繰り返した。

調査区の土の特性として乾燥時の調査では、粘質土が乾燥すると、移植ゴテでは歯が立たぬ程の強度を持ち調査用具の破損も著しかった。

僅か３ヶ月の調査であったが、低湿地に位置する遺跡の調査の手だて、方法や利用する器材の選択等多くの課題を示す調査となった。

以下調査日誌から調査の流れを追っていく。

４月２８日

県八代事務所総務振興課にて、県事務所側は総務課長、成富守参事、西山喜博主任主事が、県文化課側は丸山秀人課長補佐、松本健郎主幹、高谷和生の３名で調査計画についての打ち合わせを行う。

この席上で調査期間と全体の計画について合意を得る。

６月６日

旧地権者と現場事務所等の設置場所について検討を行い、総務振興課の了解を得る。なお県八代事務所成富参事と現地で縄張りを行い、調査区の最終確認を行う。

６月７日～１０日

調査区内の３箇所の表土剥ぎを行う。併せて現場事務所等の設置を行うとともに、水中ポンプ、ベルトコンベヤー等のリース機械、調査器材の搬入設置を行う。

全調査区に立ち入り規制の看板やロープ等を設置し、安全確保と事故防止に努める。

６月１５日～３０日

Ａ区の調査を先行して実施する。排水用に深掘りした箇所からカーボン層が確認される。周辺の状況からこの地区に住居跡の重複が見られる。また小鍛冶に用いた高坏転用のふいご羽口やスラッグが出土する。

６月２７日～７月１２日

Ｂ区の調査をＡ区と併行して行う。洪水後の砂混じりの堆積土が見られ、旧地形の追い込みや落差が顕著であるのが確認された。。

ここでは出土遺物が旧傾斜ラインに添って小量散布するのみであるため、平板に出土箇所を記載しての取り上げ後は、一端この地区の作業を止め、他区の調査を優先させる。

７月１日～２２日

Ａ区では中層から木片の出土が相次ぐ。多くは木器作成時の加工片（チップ）と考えられ、破砕面は鋭く、規格も小さい。この箇所での製作工房跡とも考えられる。

７月１３日～８月５日

Ｃ区でも小量の遺物が出土するが、Ａ区との層序が異なり、サブトレンチを入れて、下層の状況の把握に努める。

当初遺構面と考えていた面には遺物の散布が僅少であるため、人力により間層をはぎ取り、一気に最下層で遺構の検出に努める事とした。酷暑の時期であるが、スコップを用い掘り下げ作業を行う。

７月２６日～８月８日

Ａ区ではいよいよ最下層の調査となる。泥炭層からは古墳時代に堆積した葉が重なり出土する。その色は鮮明で落葉樹の葉が多く、色彩も艶やかである。しかし空気に触れると、瞬く間に色を失い黒色がかり、朽ち果てる。

さらに洪水で流されたと思われる流木が多数重なりあい、その中から木製品や土師器が出土する。

８月８日～８月１９日

Ｃ区での土量が多く調査区全域の掘り下げが困難であるため、西側に的を絞って調査を進める。

１２日には木製斧の柄部未製品や柄握り部があいついて出土し、古墳時代の集落の外縁にあたると思われる杭列が２列確認される。

８月２２日～２７日

Ａ区の調査では純粋砂層までいきつき、下からの湧水でこれ以上の下層への調査はできない。Ａ区調査完了。

８月２２日～３１日

Ｃ区では度重なる周囲からの水の流入で、排水が間に合わず、１日をかけ水中ポンプ数台を用いての排水作業を行うことが度重なる。最下層には河床礫が広がり、その実測に手間取る。一部写真を用いての復原作業を行うなどして、最後は１号杭列の杭の取り上げを完了する。

９月１日

本遺跡の調査が完了する。リース物件の返却並びに調査資材の玉名バイパス柳町遺跡への転送を行う。高谷は引き続き低湿地に位置する柳町遺跡の調査に合流し、山田は一部整理作業後に西廻り自動車道の調査へと転戦する。

第２章　調査結果

第１節　遺構

１　層序

調査箇所の平均した水準レベルは、旧地目が水田であることから、東側箇所が一部分は高いものの、一筆毎に平準化され、3.61～3.88mと殆ど平坦である。

地元からの聞き込み等では、小微高地を個人で開墾し、現水準近くまでに落とし込む作業を、昭和20年代に実施したと聞きとった。旧地表の形状が、かなり近年まで現存していたことが理解できるが、その後の削平も著しい。

第４図の西片町遺跡土層概念図を基に基本層序を説明する。

第Ⅰ層　表土（水田耕作土）

現況での水田耕作土と休耕田土。

第Ⅱ層　橙褐色土層（水田床土）

水田の鉄分が集積した床土。

第Ⅲ層　黄褐色粘質土層。

弱い粘性を有し、径5mm前後の小粒石を含む箇所も見られる。

第Ⅳ層　黄褐色粘質土＋茶色微粒混入土層。

強い粘性で、固く締まっている。胎土中に茶色の鉄分を集積した微粒が混入している。

古墳時代前期の遺物を多く含む文化層である。

第Ⅴ層　黄灰色砂質土層。

粘性が非常に強く、砂質を含む層。

弥生時代後期の遺物を多く含む文化層。

第Ⅵ層　黄色砂質土層。

ざらざらで締まりがなく、粒子があらい。

第Ⅶ層　茶褐色泥炭層。

泥炭と互層状態で第Ⅷ層の砂層が入り込むことが多い。流木や枝葉等の堆積が多量に見られ、この層では特に腐食せず残りが良好である。

第Ⅷ層　黒灰色砂層。

木製品を含む層で薄い。Ⅶ層と混じり込む事が多い。

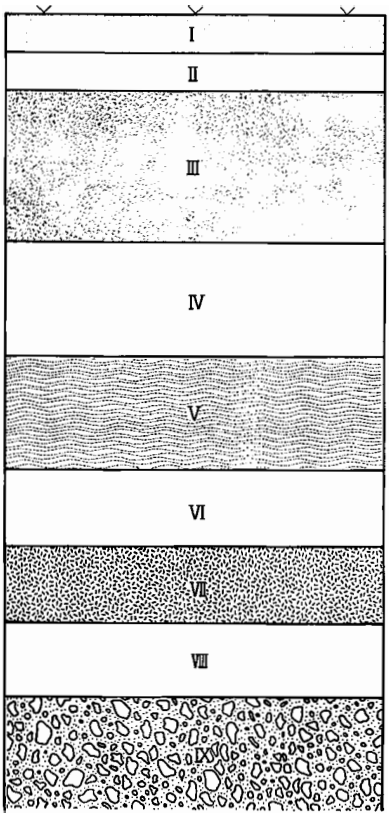
第Ⅸ層　砂層及び砂利礫層。

この遺跡でのいわゆる「地山」であり、場所によりその分布地点が分かれる。砂層では、純粋層で微細粒子の堆積が見られる。

Ａ区では海抜１m程度まで掘り下げたため、砂層を通して清水が湧き出る。

Ｃ区の砂利礫層では、径15～30cm程度の河原石状の礫が全面に見られる。

なお、各調査区断面図には、この土層概念図の層序を基にし、さらに枝番号を付して関連する土層の説明を行う。



第４図　西片町遺跡土層概念図

２　Ａ区の概要

Ａ区概観

Ａ区は調査区の東側に位置し、4mの調査区幅で南北に細長く、調査面積は約150㎡である。

スクリントーン張り部は、湧水汲み上げの為の釜場であり、攪乱地点である。この攪乱地点では砂礫層が掘り下げ後、2.1m下で確認され急激な地形の上りで、流木類は存在していない。

市道の隣接箇所であるので、土砂の崩落を防ぎ安全面を配慮し、当初長軸側は安定勾配を設け、斜めに切り落として調査を進める。

第Ⅲ層まで機械で表土剥ぎ後に、順次遺構の確認を行う。最終レベルでは、最下層の黒灰色砂層までとしたが、自然湧水のため遺物は所在するものの、さらに下層までの掘り下げは中断する。

上層からの出土遺物は小片のみであり、図化は行っていない。

なお同区南側上層のカーボン集積及び遺物集中箇所については、この図中から除き、後述する。

カーボン集積及び遺物集中箇所

第６図に示したように、調査区南側には顕著に遺物が集中する箇所が見られた。

このカーボン層の集積が広範囲にわたり、ほぼ同一レベルから、２ヶ所見られたことから、切り合いの竪穴式住居跡が２軒分存在することが想定される。炉は検出されなかった。

出土遺物からいずれも古墳時代中期前半時期の遺構と考える。

しかしここでも調査範囲が狭く、全面に広げることが工法上不可能で遺構の切り合い重複状況は不明。柱穴についても湧水等のため確認ができなかった。

第１号カーボン集積箇所

１号カーボン集積箇所は長軸180cm×短軸90cmで厚は薄く10cmを測る。炉は確認されなかった。

土師器高坏17はふいご羽口に転用し外面に不純物が多く付着したもので、その使用の際の屑である径10㎜スラッグ５点がカーボン層内から確認されている。また周囲の同一レベルからは完形の土師器壷9、叩き石60、高坏脚部14･17が出土する。ここからの木製品の出土は見られない。

この１号集積箇所は２号集積箇所より、水準としては、わずか上位に位置しているが、遺構どうしの新旧関係は判明しない。

第２号カーボン集積箇所

２号カーボン集積箇所は長軸が320cm、短軸はさらに調査区外に延びるが120cm、最大厚はやや厚く30cmとなる。炉は確認されなかった。

１号集積箇所とほぼ同様の機種内容の遺物類が出土する。土師器高坏16もふいご羽口に転用した資料である。周辺からはやや大型の甕8、椀20、叩き石56が出土する。木製品の出土は見られない。

Ａ区下層

第５図に示すとおり２箇所のカーボン集積箇所から北東側へは、複雑な落ちを有しながら、緩やかな傾斜で下がっていく。最下層の流木等の堆積層へと、部分的に継続する。

下層からは図化できる資料として土師器の甕7、長頸壷10が土器として出土する。また弥生土器の小片も出土する。

第５図の調査Ａ区遺物出土状況図に示したように、出土した木製品等遺物の多くは、第Ⅶ～Ⅸ層からのまとまった出土である。但し調査面積が狭小であり、確認作業を進めたが、まとまった遺構として同定しうる要件を満たしていない。

出土した木製品の多くは、図化で示したように両端が加工され、しかもやや偏平で、あたかも製品製作中に派生した木片もしくはチップとも判断される。（資料番号71･72･73･76･77･78･80･81･82･83･84）その他のも、さらに小片で図化できない木片が数多く出土する。

但し組合式鋤先61については、破損の状況から使用された後に、欠損し廃棄された資料と考えられる。

また大型杭69、両端の加工を有する杭64･68、全長が28.5cmと長杭65を含めて全ての杭は、垂直に打ち込んだものではなく、ほぼ水平方向での検出であ

り、遺構に伴う現位置での出土ではない。

さらに最下層には、径40cmを越す大型木材が調査区の長軸方向に直行し東西を主軸方向として２本出土し、その周辺には積み重なるように大小の木材が確認された。（土層断面中の第Ⅷ層内の大型木材等）また小破片の弥生土器もその中から出土する。

この状態からして南から北方向にかけての、洪水等の大規模な流れ込みとも推測される。その時期は古墳時代前期前半と考えられる。

３　Ｂ区の概要

Ｂ区概観

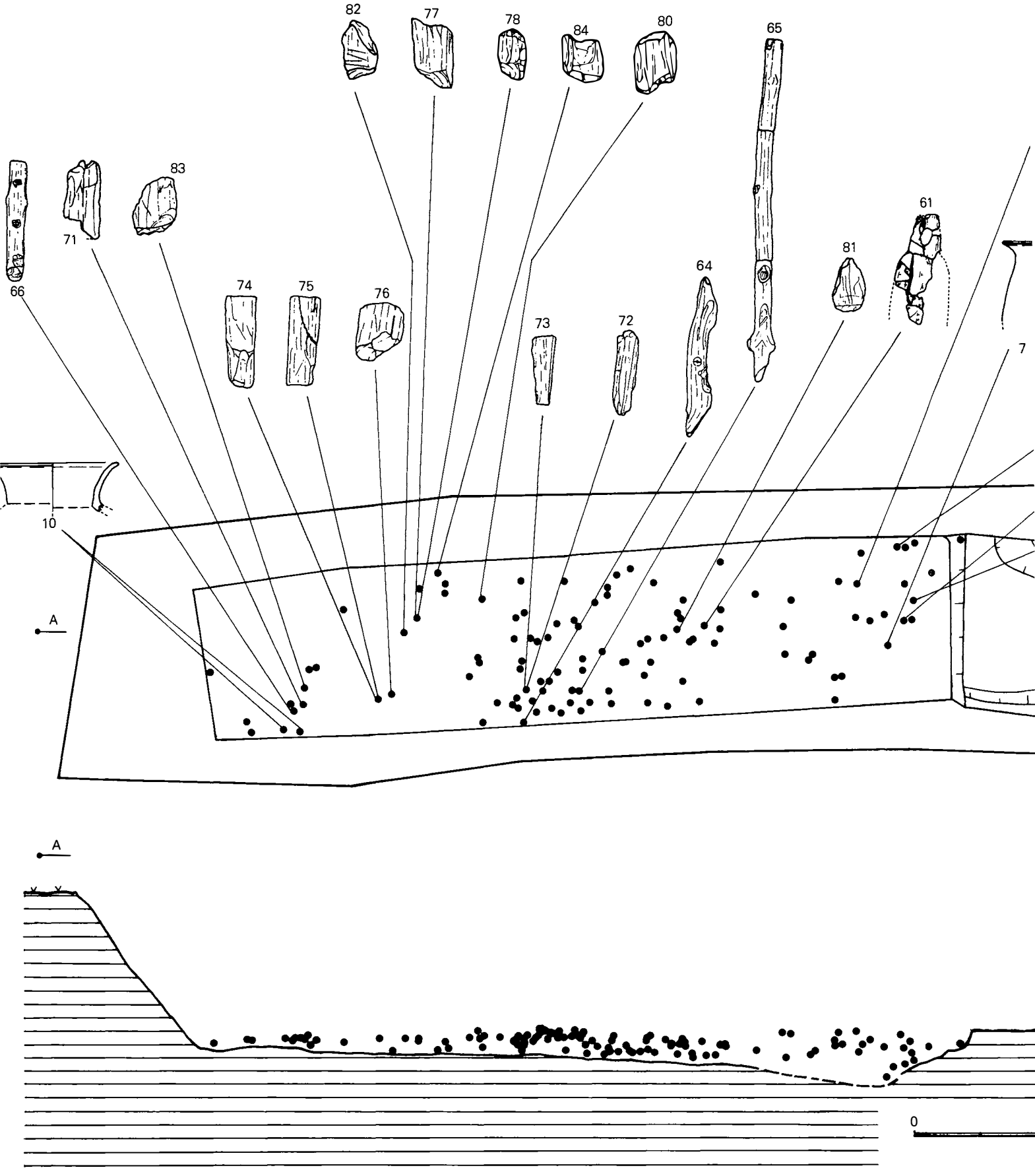
調査区Ｂ区の調査面積は600㎡である。建物本体及び基礎部分東側が遺跡範囲にかかったため、この部分の調査を実施した。

調査区南側には表土剥ぎ後に、直に砂礫層が現れ、旧地形の上層への強い削平が伺えた。また最北部の釜場には、継続した同様の砂礫が見られ、北側に向かって緩やかな傾斜を保っていたことが伺える。

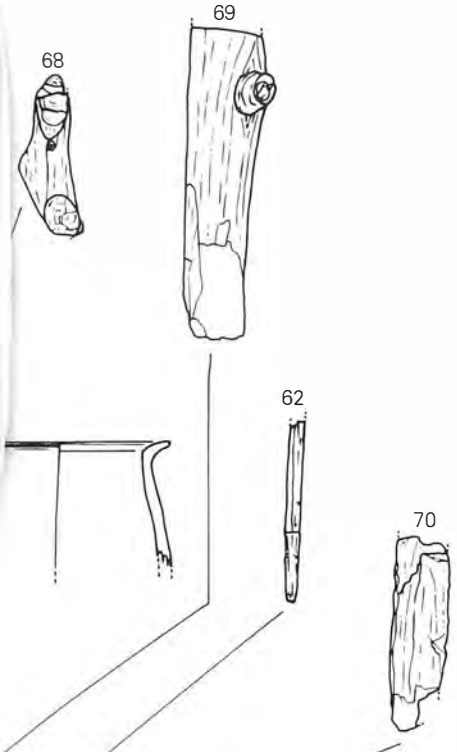
なお遺物の出土状況が希薄であること及び調査期間の関係で、調査区中央部から北側にかけては全面での掘り下げは行わず、サブトレンチでの確認にとどめた。

南側部の全域掘り下げからは、第７図調査Ｂ区遺物出土状況に示すとおり、一部まとまって土師器甕21･22や高坏25、砥石59、叩き石58が出土する。出土状況では遺物は散布しており、周囲には焦土、炉、硬化面、ピット等が見られないことから、これらは流れ込みの層遺物とも判断した。

東側の深掘りサブトレンチ内の緩傾斜地点からは、木片86が単独で１点出土する。この地点でも周辺の旧地形は急激な傾斜を持っており、微妙で複雑な地形の様相が想定される。

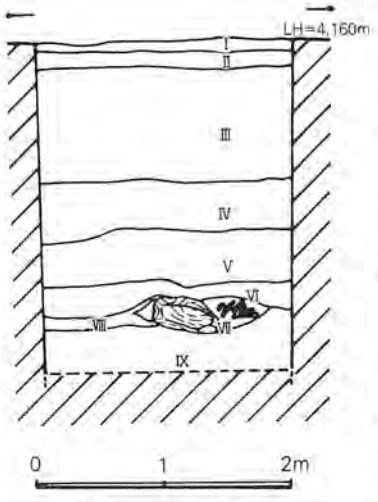


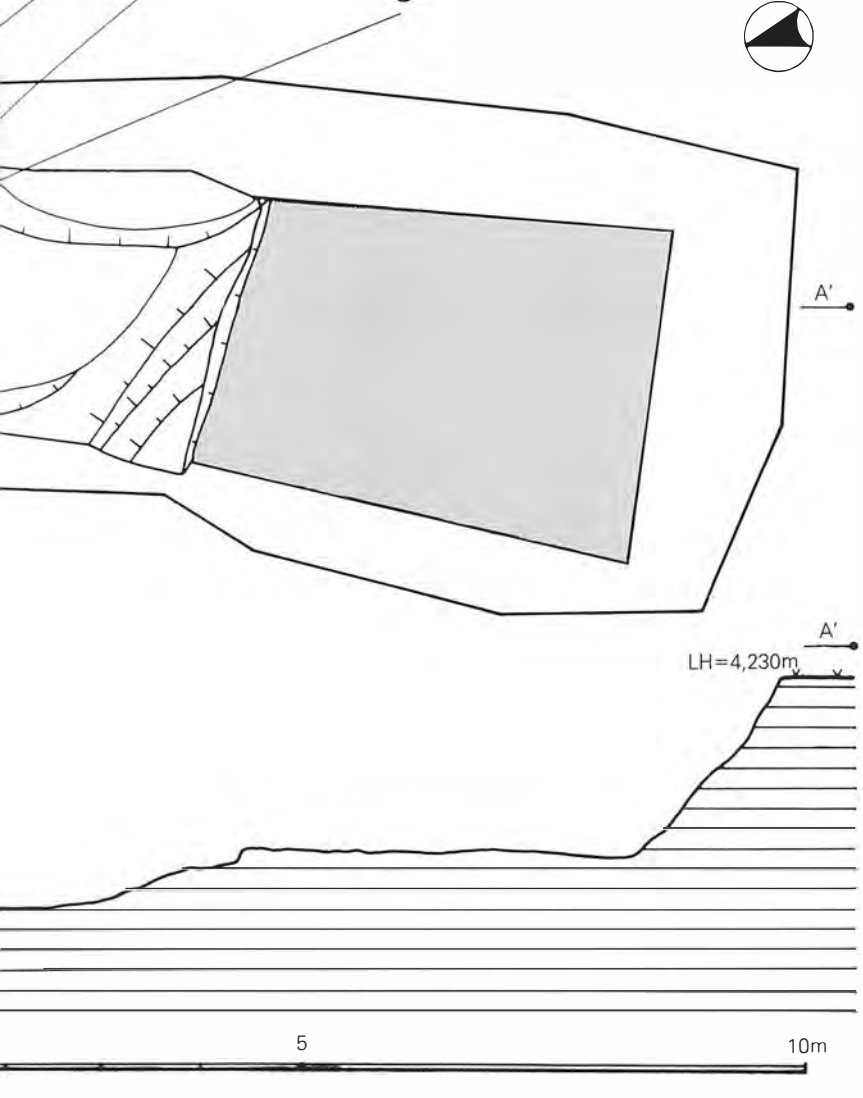
第５図　調査Ａ区遺物出土状況図



A区内　土層断面図土色一覧

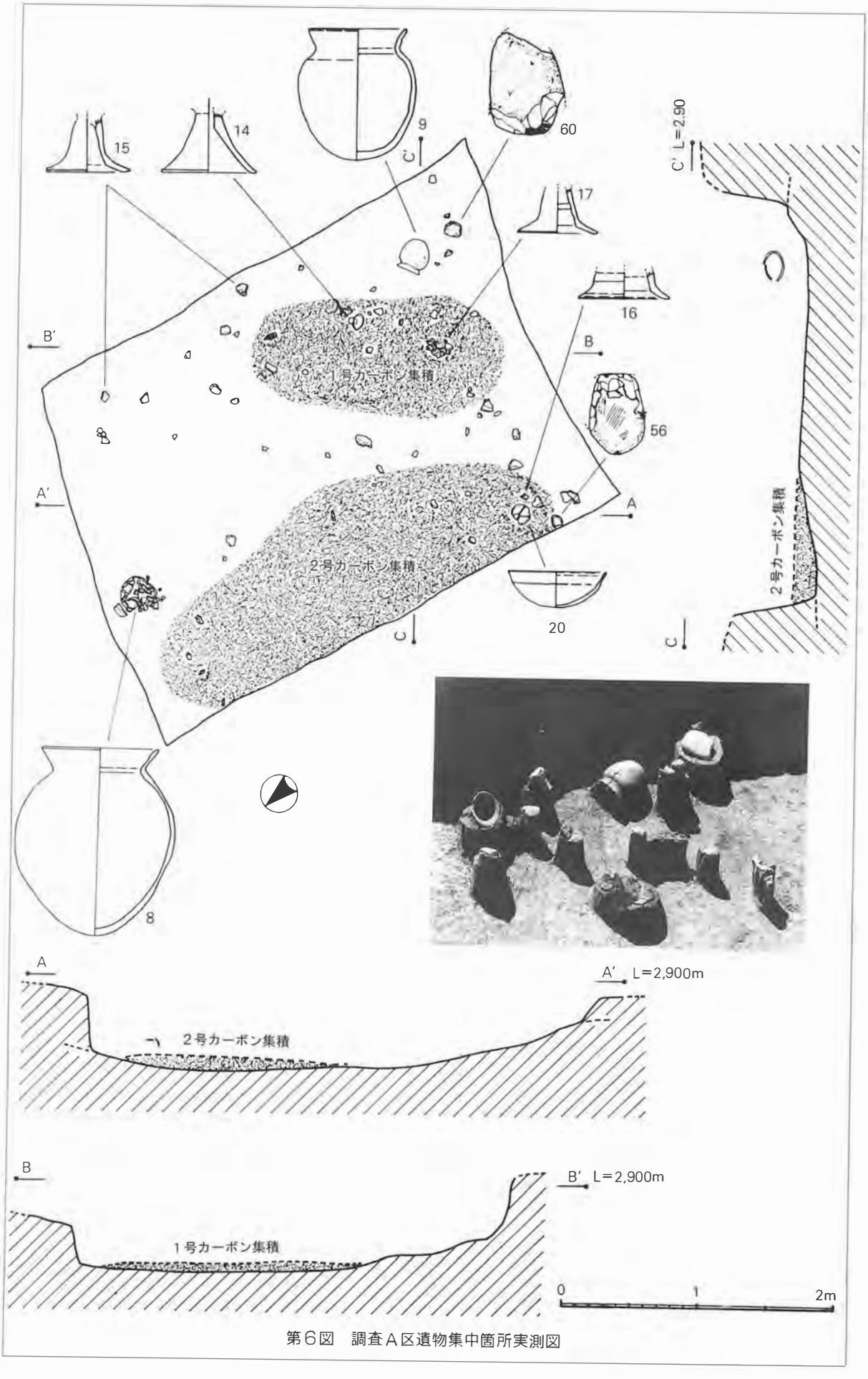
Ⅰ層　表土耕作土層
Ⅱ層　橙褐色土層
Ⅲ層　茶褐色粘質土
Ⅳ層　黄褐色粘質土（茶色微砂粒混入）
Ⅴ層　黄灰色砂質層
Ⅵ層　黄色砂質層
Ⅶ層　茶褐色泥炭層
Ⅷ層　黄褐色相互状砂層
Ⅸ層　黒灰色砂層



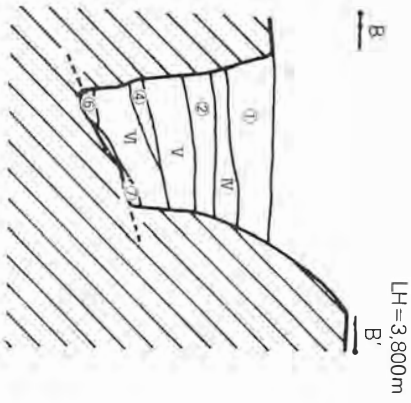


大型木杭等の出土状況

調査A区　全景

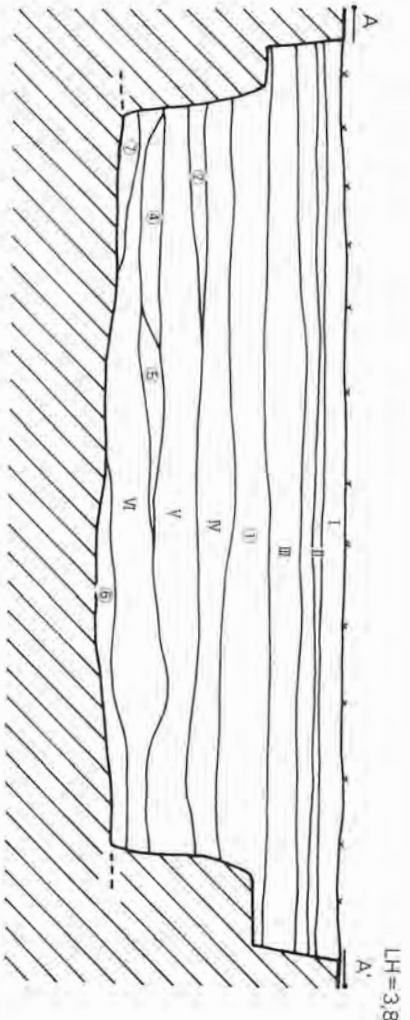


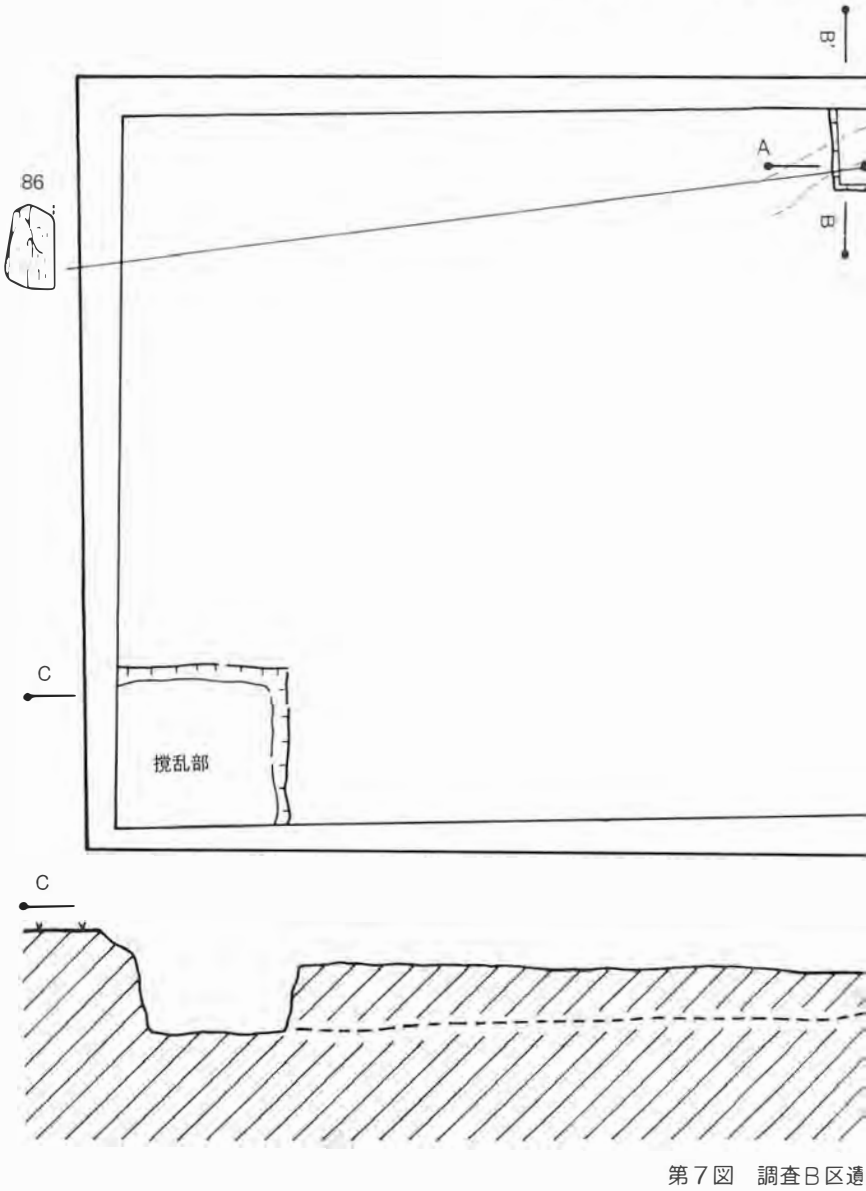
第６図　調査Ａ区遺物集中箇所実測図



B区内　土層断面図土色一覧

Ⅰ層	耕作土	①	黄褐色粘質層
Ⅱ層	水田床土	②	灰色粘質層
Ⅲ層	暗黄褐色粘質層	④	黄橙色砂層
Ⅳ層	黄色粘質層	⑤	黄灰色砂層
Ⅴ層	黄灰色砂層	⑥	青灰色砂層
Ⅵ層	黄色砂層	⑦	黄橙色礫混入層
Ⅹ層	砂層		



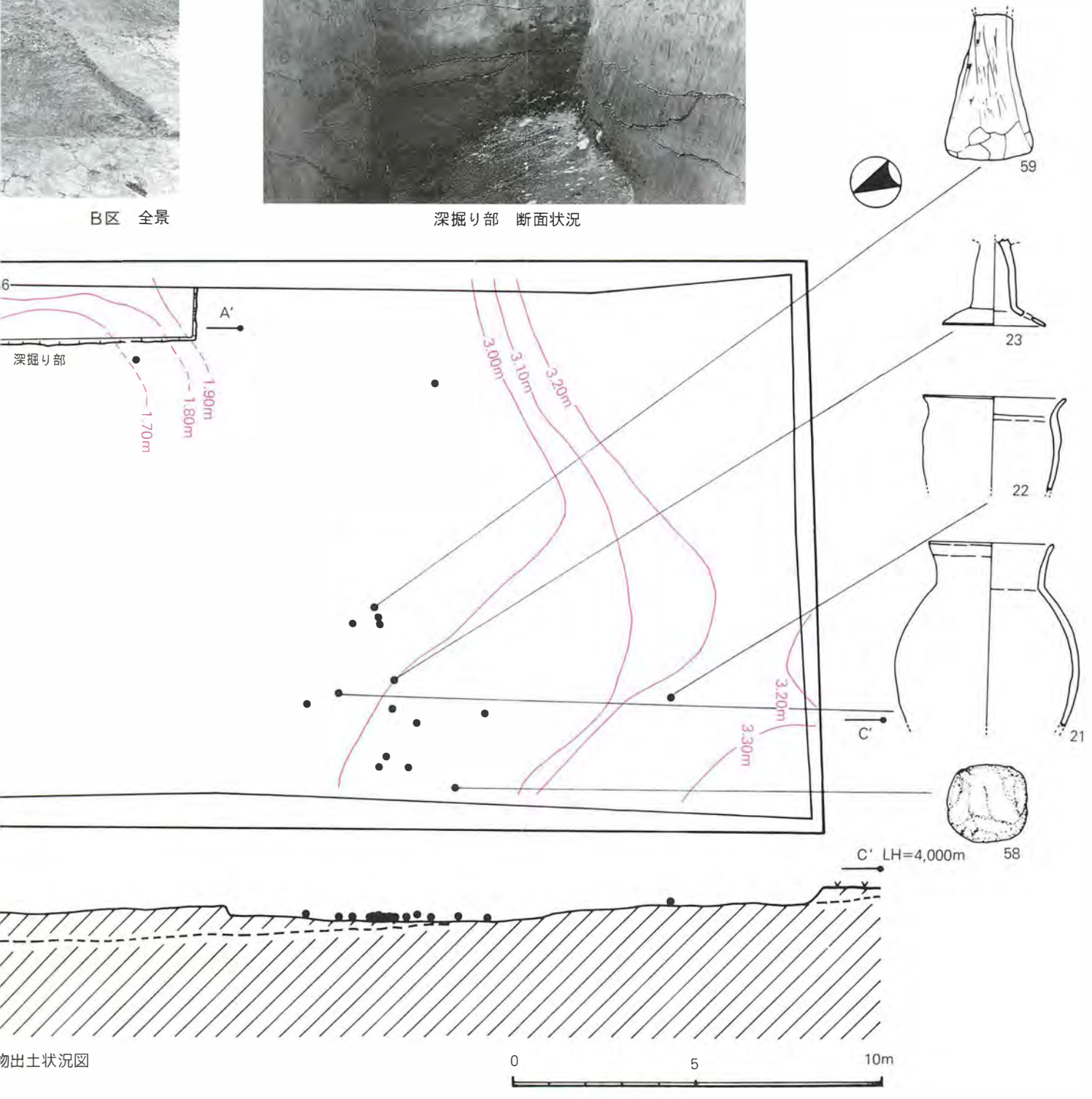


0　1　2m

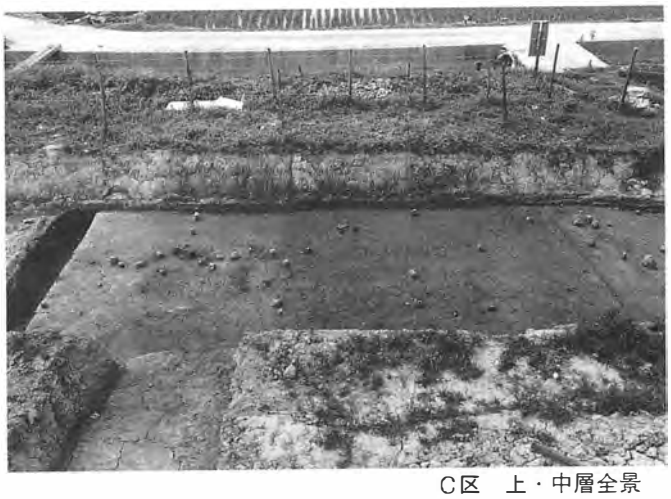
第７図　調査Ｂ区遺

B区　全景

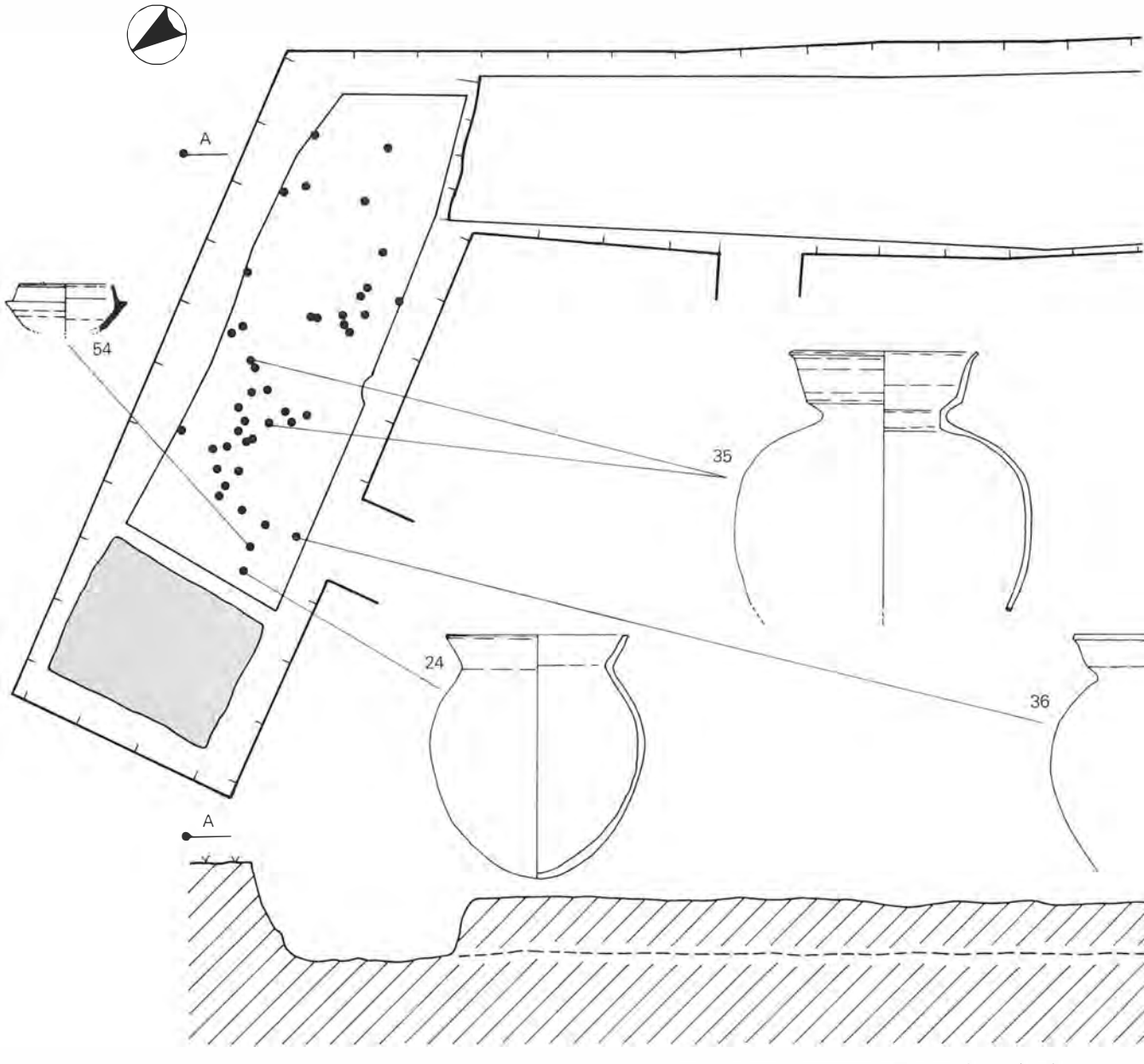
深掘り部　断面状況



物出土状況図

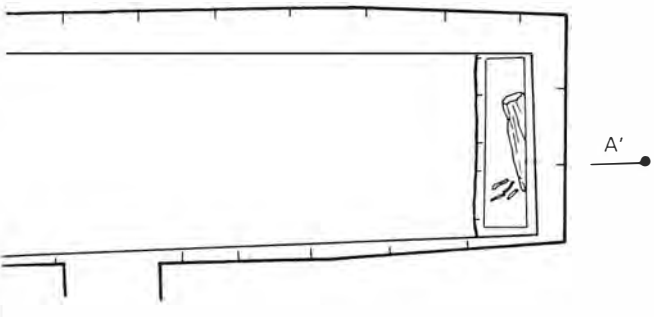


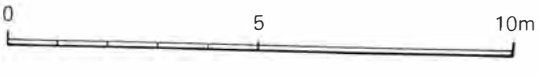
C区　上・中層全景

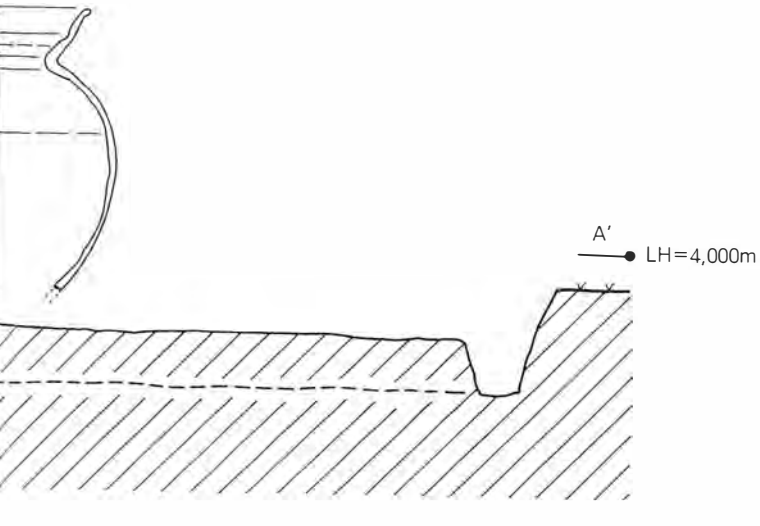


第8図　調査C区遺物出土状況図（上・中層）

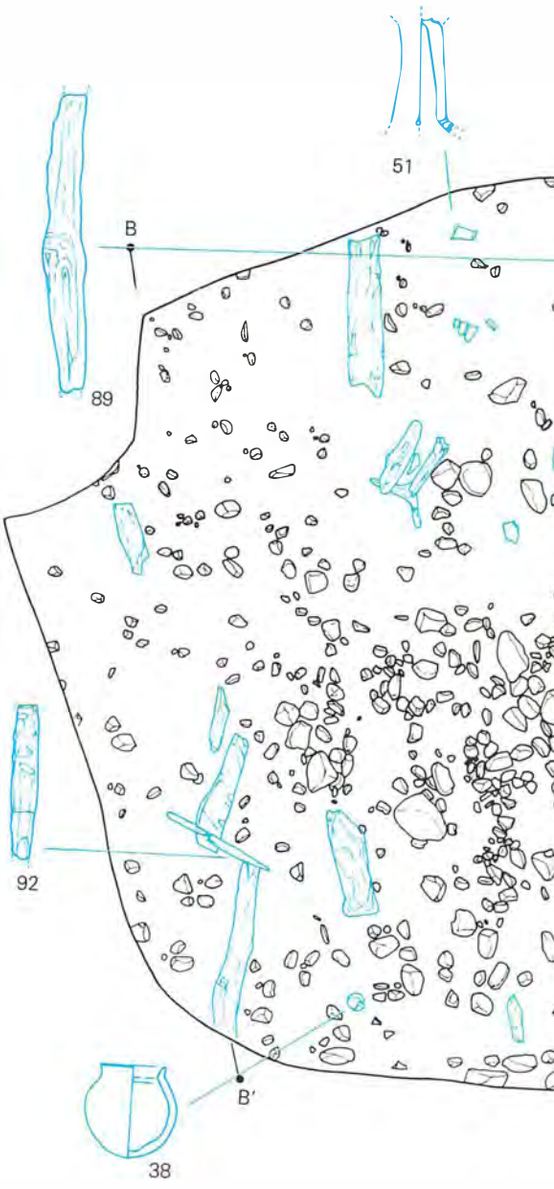
遺物出土状況

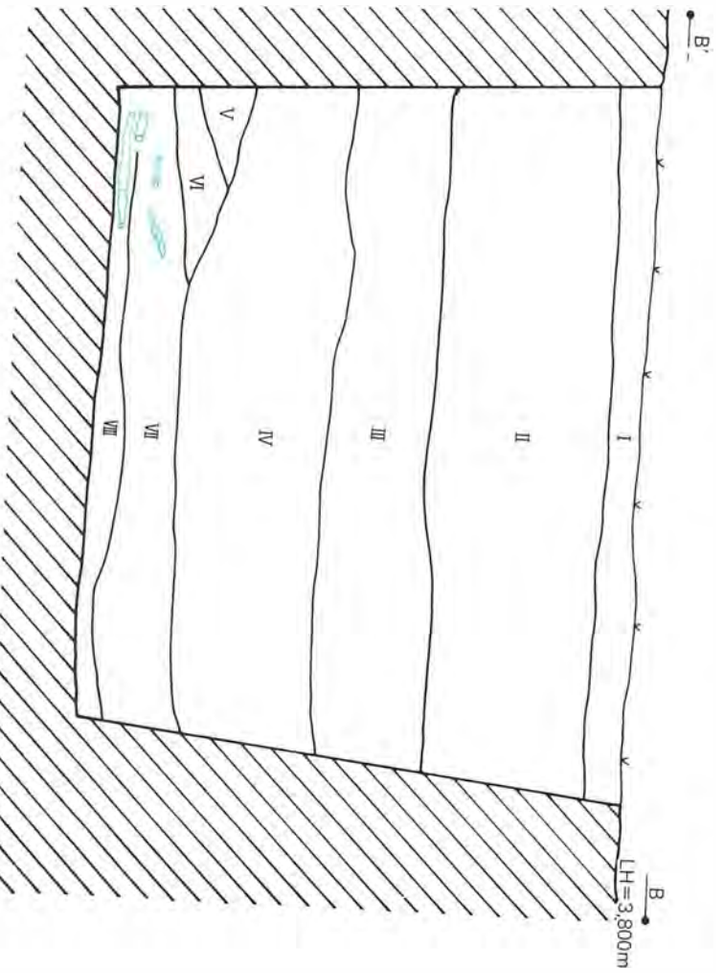






遺物出土状況

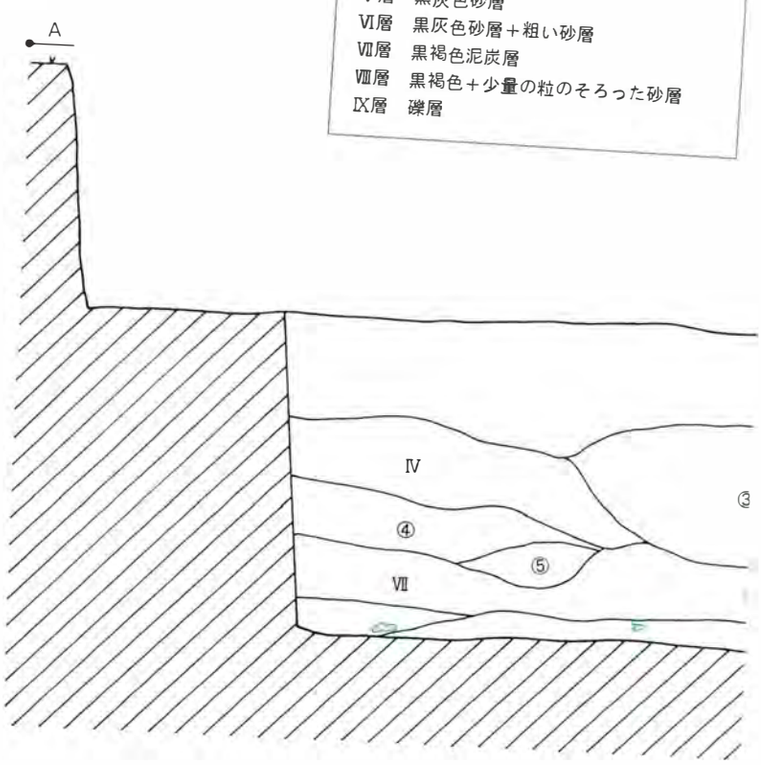


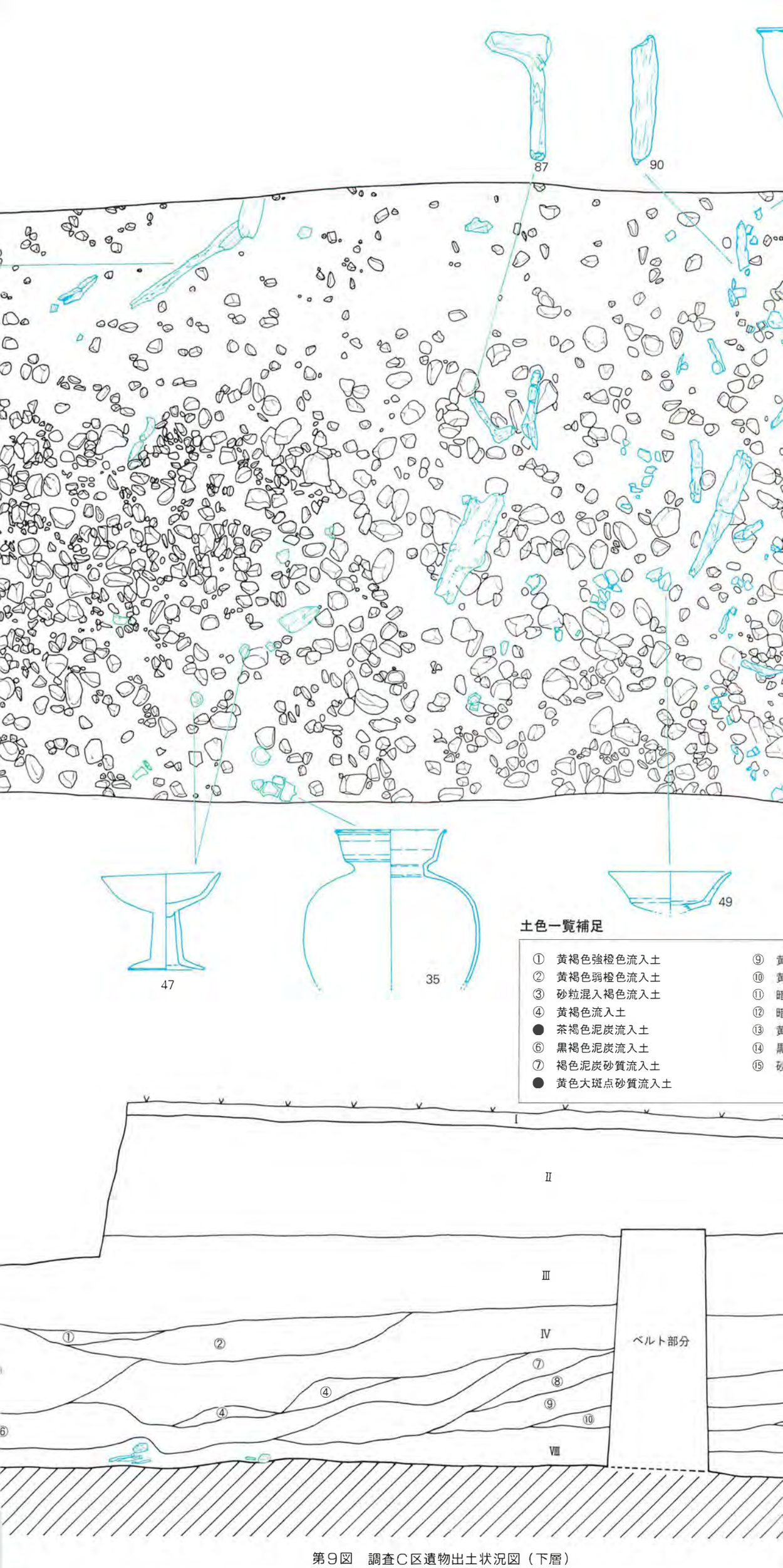


C区内　土層断面図土色一覧

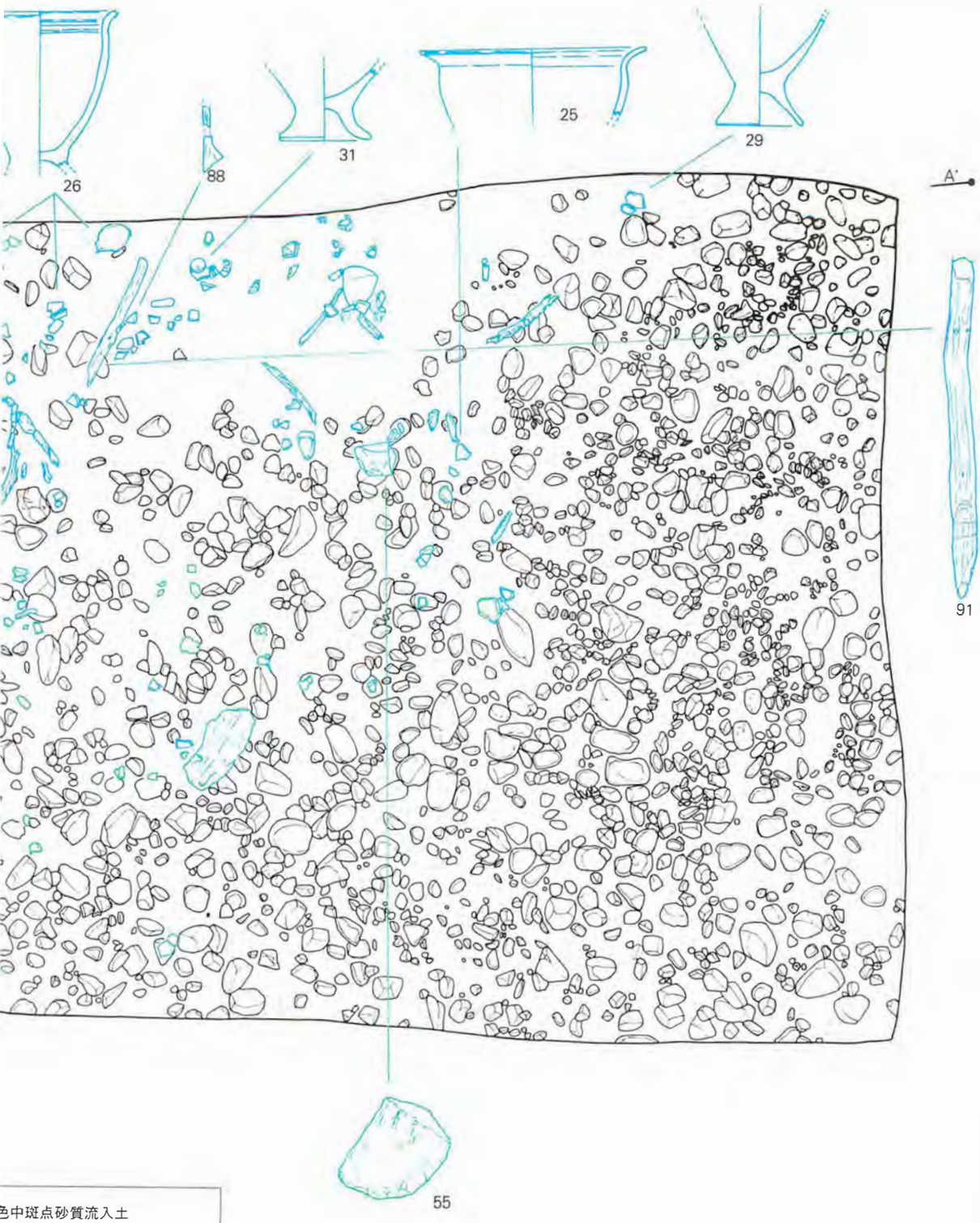
Ⅰ層	耕作土・表土
Ⅱ層	茶褐色粘質土層
Ⅲ層	黄褐色粘質土・茶色微少粒混入土層
Ⅳ層	黄褐色砂質土層
Ⅴ層	黒灰色砂層
Ⅵ層	黒灰色砂層＋粗い砂層
Ⅶ層	黒褐色泥炭層
Ⅷ層	黒褐色＋少量の粒のそろった砂層
Ⅸ層	礫層

C区　全景



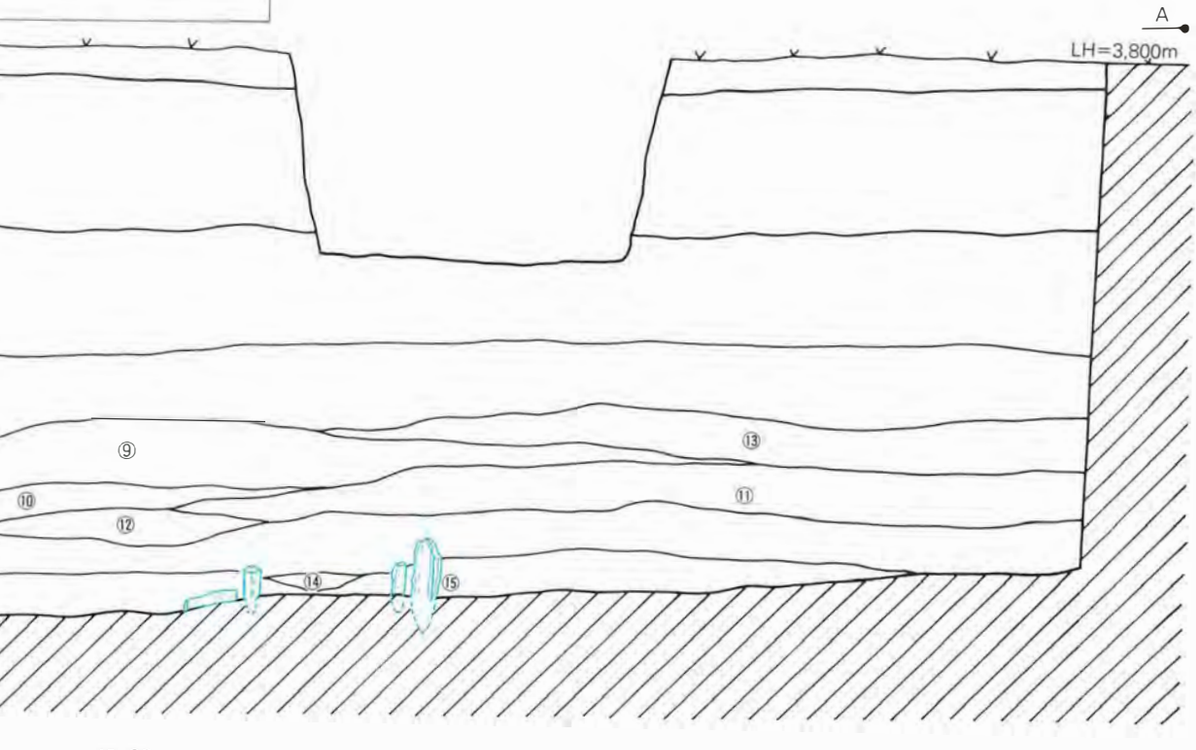


第９図　調査Ｃ区遺物出土状況図（下層）



色中斑点砂質流入土
色微細砂質流入土
黒色流入土
黒色粘性流入土
褐土黒色斑点流入土
い炉粘質土層（水路内堆積土）
層混入黒色粘質土（〃）

0 1 2 3m



４　Ｃ区の概要

Ｃ区概観

調査区Ｃ区の調査面積は250㎡である。

建物周囲の用水路掘削部分及び浄化槽埋設部の調査である。スクリントーン張り部は、隣接家屋の建築資材の投棄のための掘削地点で攪乱である。最下層には砂礫層が確認された。

調査区をＬ型に配置した箇所では、遺物の出土状況等から全域の調査は行わず、サブトレンチで層の確認を行い、調査の精査箇所をさらに絞り込んだ。

Ｃ区上層

第８図の調査Ｃ区遺物出土状況に上・中層での状況を示した。西側部の中層からはかなりまとまって遺物が出土する。大型の土師器二重口縁壷35の一部、口縁内部に独特の屈曲部を有する壷36、大型甕24である。54は須恵器坏身片である。全て古墳時代中期のまとまった資料と考える。

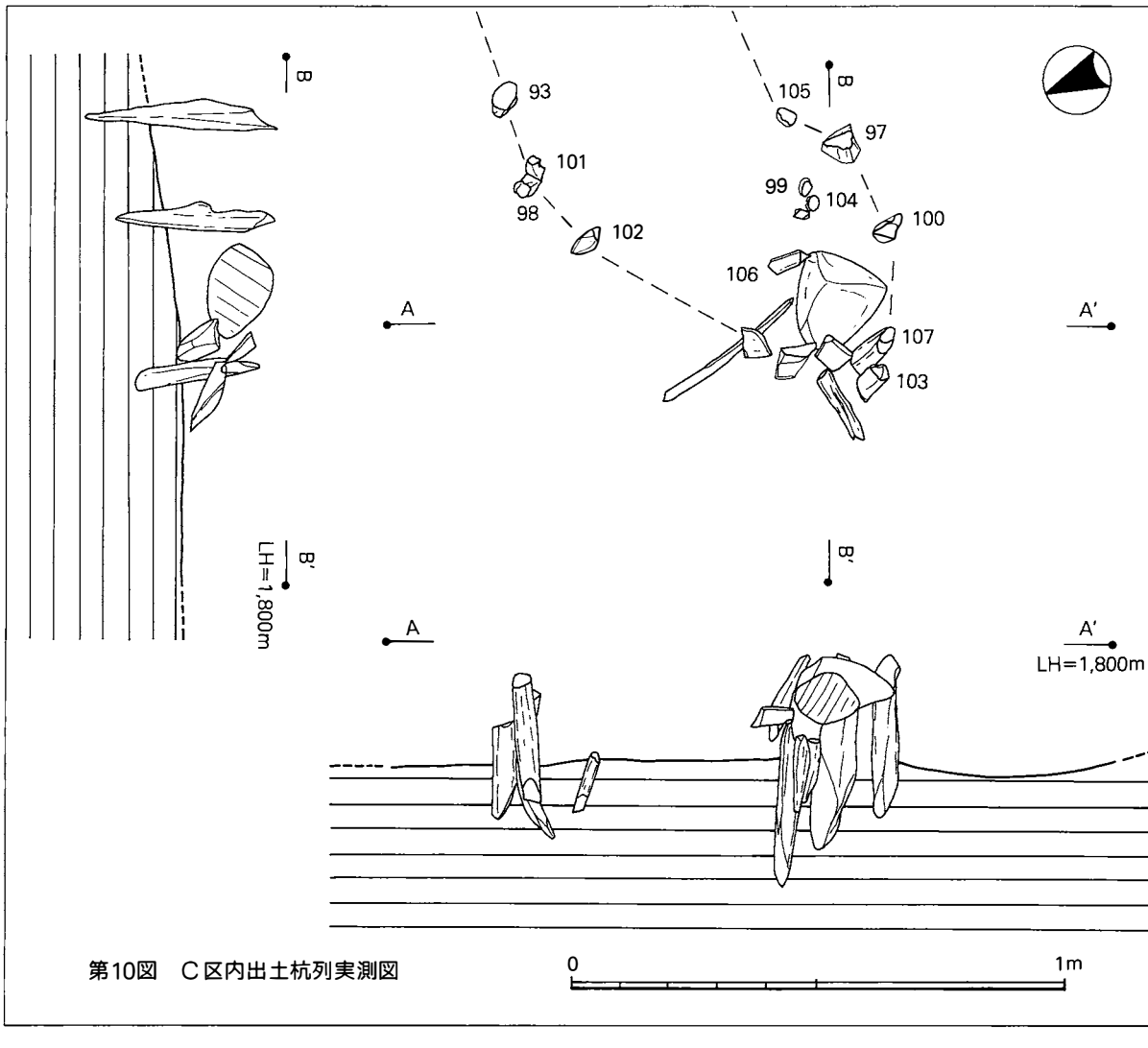
出土遺物は大形で残りも良好ではあるが、トレンチ内上層の調査範囲内では、遺構は確認できなかった。

Ｃ区下層

調査Ｃ区の下層での遺物出土の状況は第９図に示す通りである。

最下層一面に散布する河原石大の礫層に混じり込むようにして、多くの木製品及び土師器、弥生土器が出土する。

主な遺物として土器では、高坏45･47･51、鉢25、弥生土器の脚付鉢26、甕脚台部29が同一レベルから出土し、上位に位置する集落からの流れ込みが時期差を有する資料を一気に動かし再堆積させたことが推察させる。



第10図　Ｃ区内出土杭列実測図

また55のように全面を利用した大型の砥石も見られる。ここでは擦った面が上面に位置し出土する。

木製品としては斧柄未製品87、木製柄握部88、大型杭89･91、板材90･92があげられ、これらは他の多数の木片、流木かと思われる材木とともに出土している。

大型杭は２点ともに、打ち込みの状態ではなく水平位置での流れで、原位置を保っていない。

南北方向の土層断面図にも示すとおり、層的な流れ込みは力強く、顕著であり、短時間に行われたことが理解できる。遺跡の基本層序に枝番号を付けた層が前後して複雑に入り込む。

また上層で確認された大型の二重口縁壷35はこのレベル地点での資料と接合することから、ほぼ時期を逸にしての大がかりな流れ込みであることが、遺物の上からも判断される。

調査区東側端にはサブトレンチを設定し、そこからは地表下２ｍで、径50cmの大型木材が土師器の小片とともに確認された。大型木材の長軸方向は南北である。

この状況は西側の最下層の様子と近似している。

第１号杭列

第10図に示すとおり、調査区の東側端部に位置する。調査区内に残存した杭列は、杭列の突端部及び終縁部であり、杭列の幅は20cm内外を基準としているが、希には40cmｽﾊﾟﾝも見られる。

杭間の水路部分の堆積状況は、最下１層が黒色粘質土層、２層が砂層混入黒色粘質土である。多量に水が流路として流れた様子は、現況では見られない。

終縁部には20cm大の河原石を据え、杭列４本を廻し、その留めとする人工の施設が確認された。ただし杭間には畦板やしがらみ等の用材は、腐敗の為か確認できなかった。

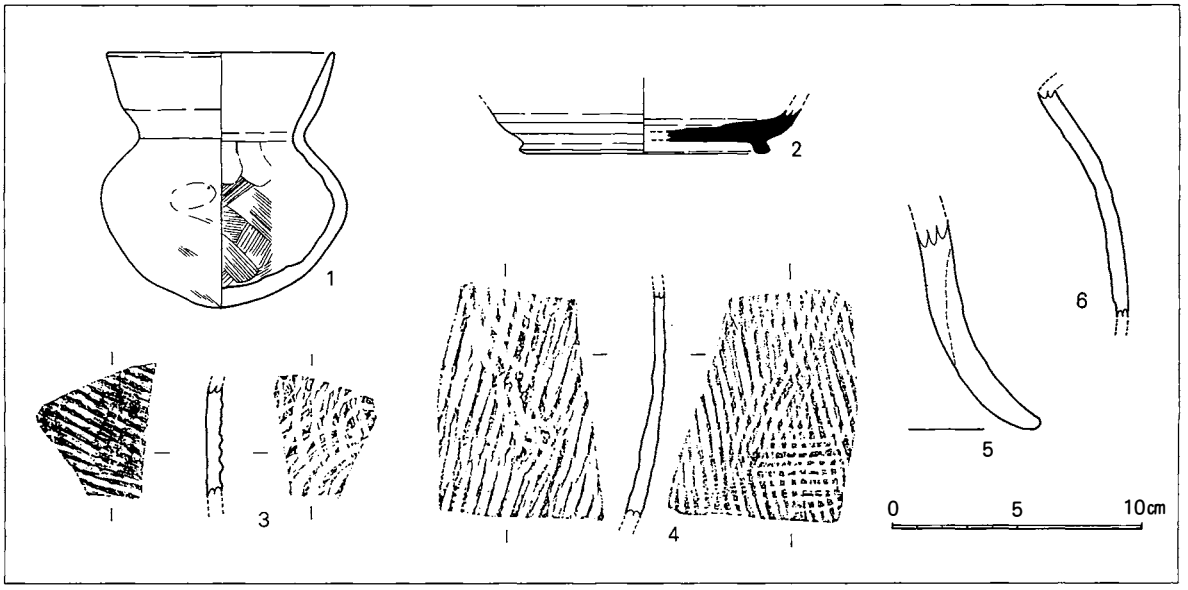
利用した杭は第22･23図の実測番号93～107までに示すように、残存長は13～36cmまでと比較的に小型の規格のものである。確認レベルでは砂礫層へはいずれも10cm程度と浅く打ち込んである。

この杭列はここから出土した弥生土器甕31の出土状況や杭間の縦断面での堆積土の状態等から、地形的にみても、集落の縁辺部に位置する１条の水路遺構と考えられる。但しその時代は、弥生時代後期前半の時期と判断される。

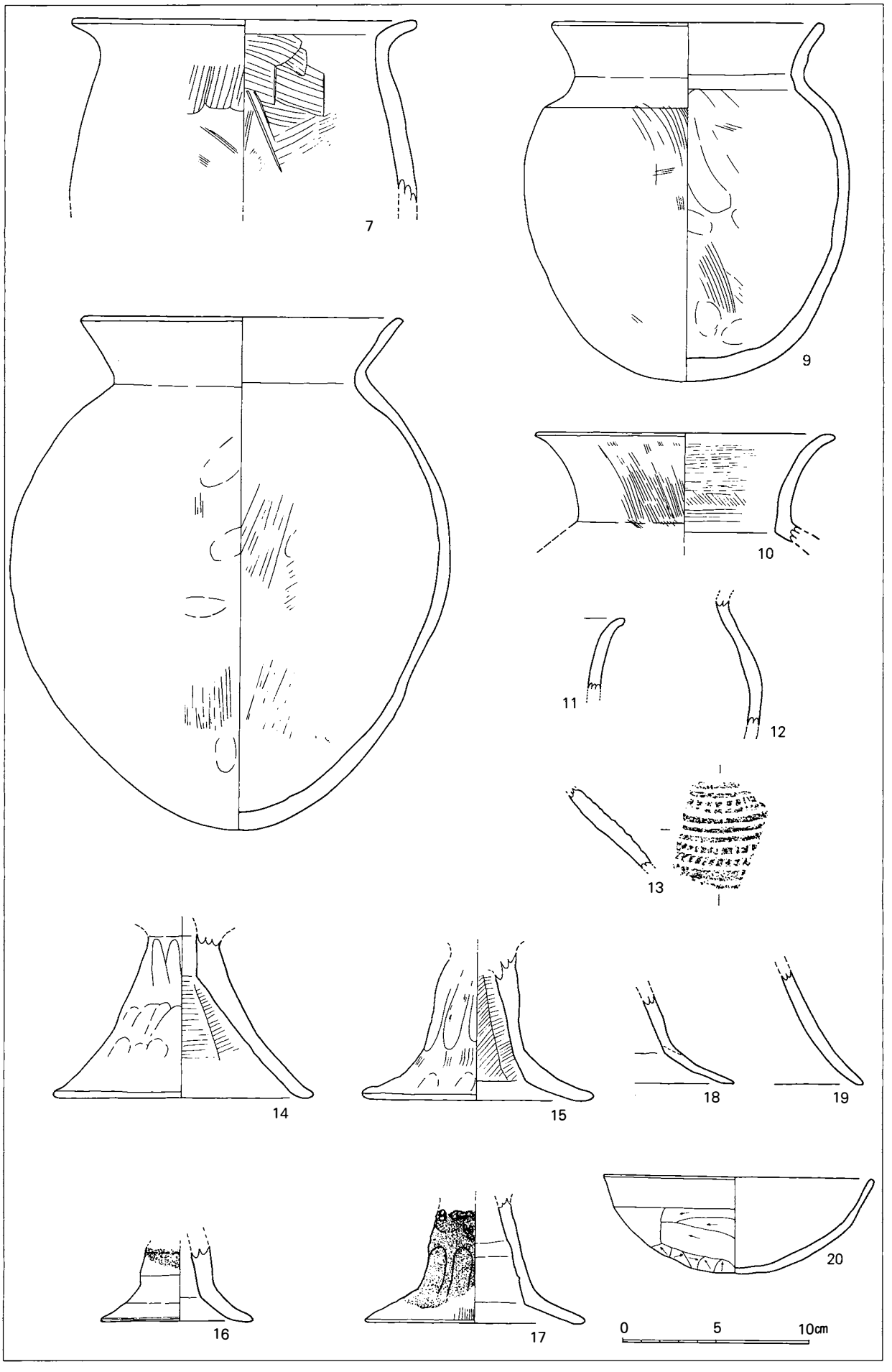
第２節　遺物

１　土器

調査区内より出土した土器は、パンコンテナで総量40箱となる。その中で実測紹介資料は54点である。ここでは各トレンチ毎に土器を解説する。



第11図　試掘トレンチ内出土土器



第12図　Ａ区内出土土器

詳細は38頁～40頁までの第１表西片町遺跡出土土器観察表に記述したので、参照されたい。

試掘トレンチ内出土土器（第11図）

試掘調査時18本のトレンチ内よりの資料である。

1は土師器の小型丸底壷であり、住居跡と思われる遺構内よりの出土である。口縁部は外傾し3.5cm立ち上がり、途中に綾を持つ特徴を有し、ラッパ状に広がる。外面は指圧が一部残存するがナデ調整、内面はハケ目調整で、頸部内側には指圧が明瞭に残る。

2は高台付須恵器杯で上層よりの出土。高台は外側縁辺側に張り付き、径が10cmとやや大型で、外面は回転水びき調整。この資料は本遺跡では最も新しい資料で、平安時代初頭の資料と考える。

3･4は須恵器甕片。双方ともに外面格子目文、内面車輪文のあて具痕跡を有する。5は土師器の器台片、6は甕胴部片であり、径の復原はできない。

いずれも一括で出土レベルは不明。

Ａ区内出土土器（第12図）

Ａ区出土遺物の内、13点を紹介する。

7･10を除きほとんどは２箇所のカーボン集積箇所及び遺物集中箇所からの出土である。

7･8･12は甕、9･10･11･13は壷、14～19は高杯、20は碗である。

7は口径18.8cmの甕である。口縁の屈曲は強いが、体部の膨らみは弱い。内外面ともに刷毛目調整を施す。

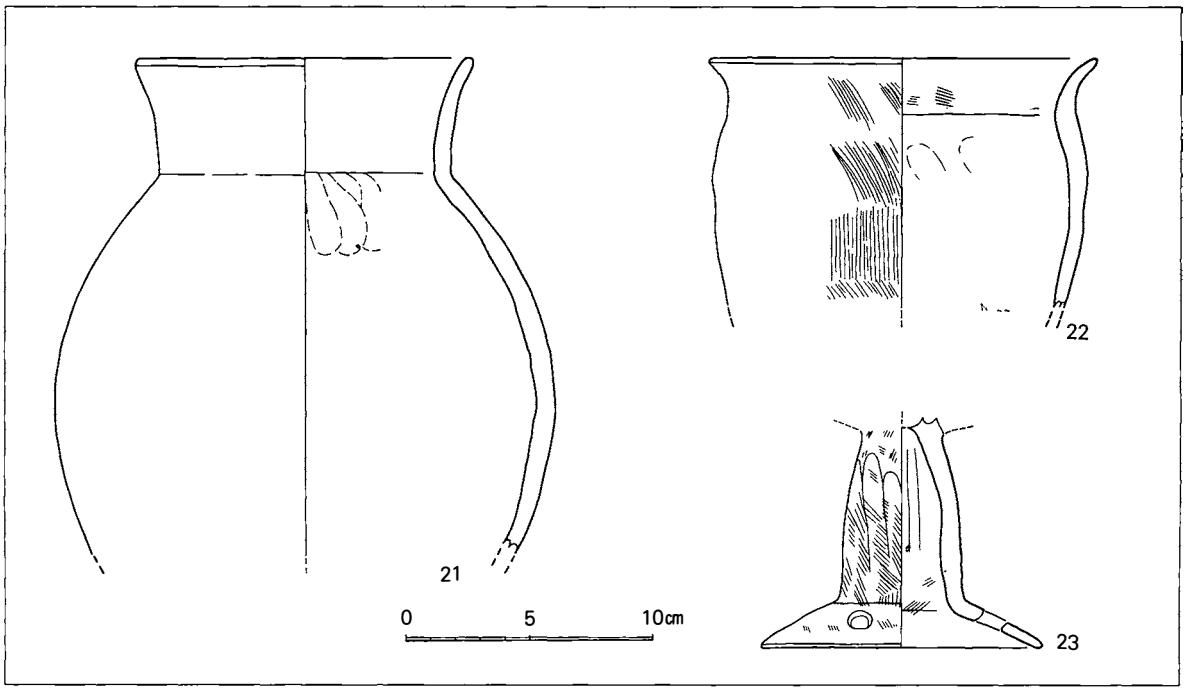
8は体部倒卵形の完形の土師器甕である。口径17.5cm、器高27.5cm、胴部最大径23.8cmで、口頸部が「く」の字状に大きく外反する。底部は丸底である。器面が粗く、調整の残りは良くないが、内外面ともに刷毛目調整を施す、一部指圧痕跡が残る。

9は完形の土師器短頸壷である。口径14.6cm、器高19.2cm、最大胴部径17.8cmを測りそれはほぼ中位に位置する。体部の肩の張りが強く、底部は厚く13mmを保ち、丸底である。内外面ともに刷毛目調整を基本とし、指頭圧痕、指ナデで調整を行う。

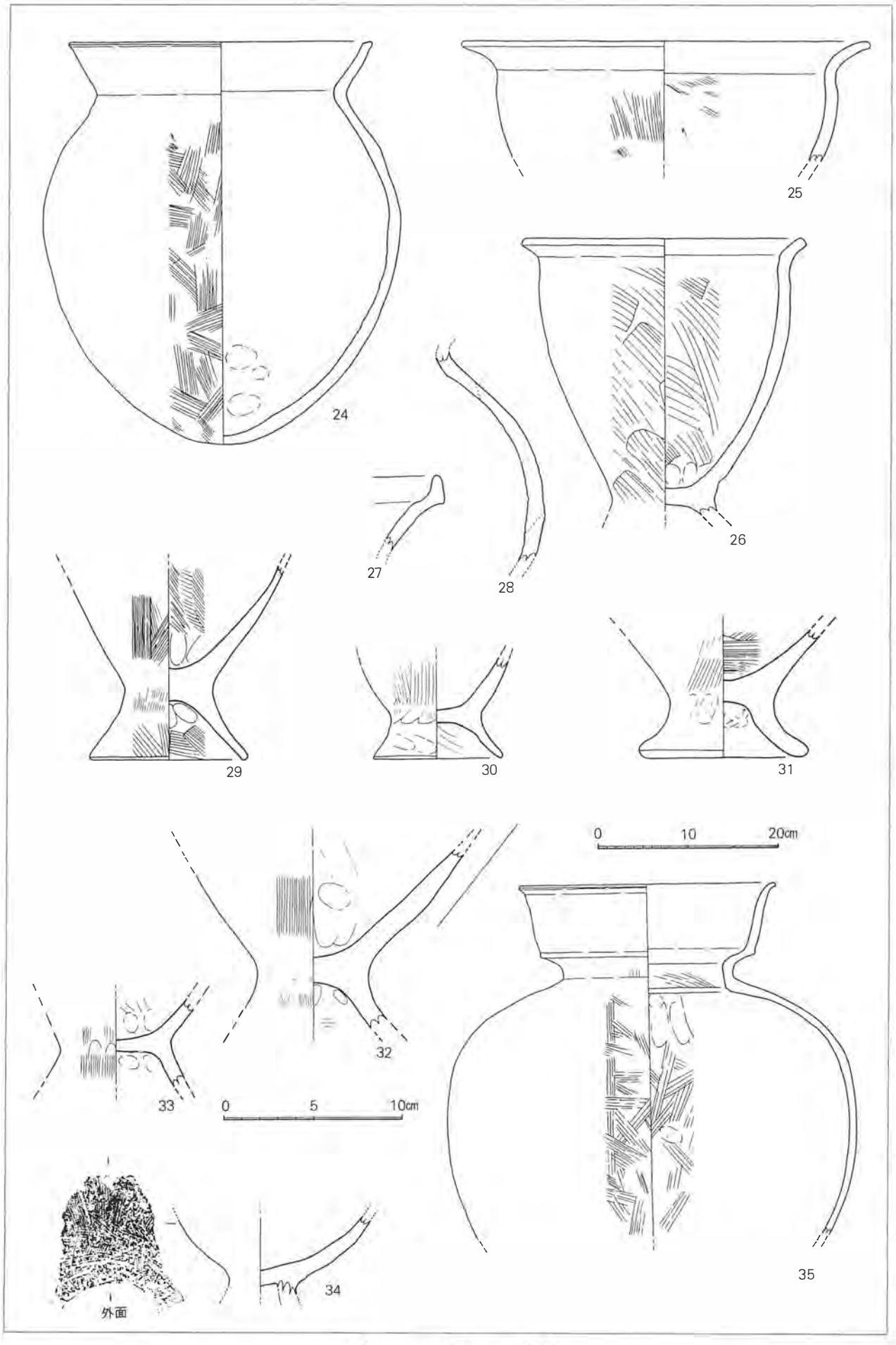
10は長頸壷の頸部である。内外面ともに刷毛目調整を施す。

13は頸部から肩部にかけての弥生の免田式土器片であり、壷と思われる。10条の沈線を１本づつ横方位に引き、その内２箇所には縦方位で短い沈線を刻みこむ。

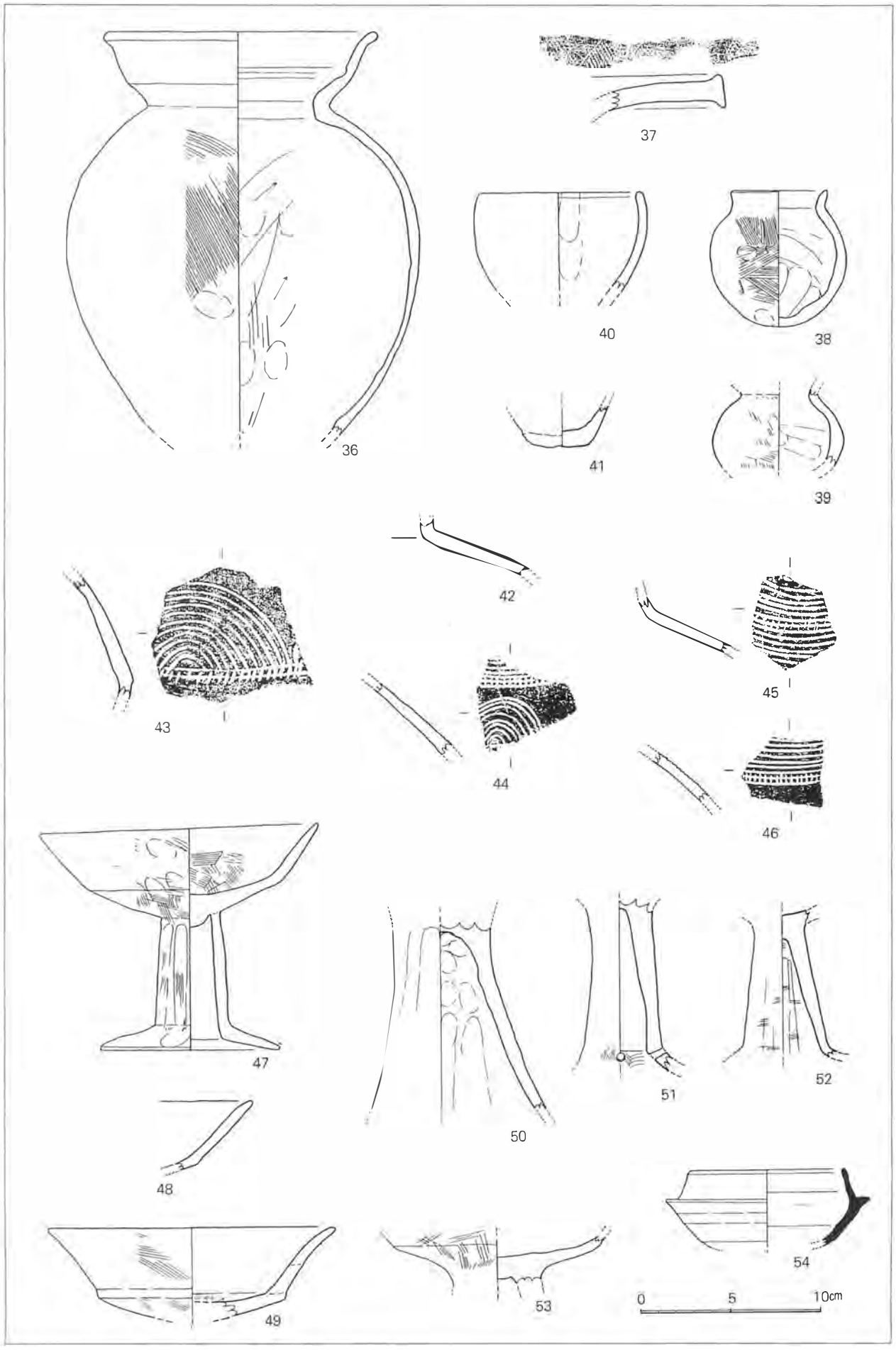
14･15は高杯脚部である。ともに内面は刷毛目、外面は指ナデによる丁寧な調整を施す。14は脚部上端に穿孔し、転用した高杯である。15は頸部の締まりが弱く、緩やかな膨らみを有する。



第13図　Ｂ区内出土土器



第14図　C区内出土土器（１）



第15図　Ｃ区内出土土器（２）

16はふいごの羽口に転用した高杯である。外側には二次焼成による赤変した部位が明瞭に残る。

17もふいごの羽口に転用の高坏である。断面脚部から裾部にかけては、二段に開く。16よりも形式からは古い様相を持つ。外側が赤変し、そこには小ｽﾗｯｸﾞ片が多数付着している。また内面にはさらに円筒状のものを、挿入した痕跡が残る。18･19は高杯脚部小片である。

20は椀である。口径14.5cm、器高5.1cmを測り、体部から口縁部にかけて内反し、口縁が大きく広がる。外面では中位は横方向に、低部位は全方向へのヘラ削りを施す。

Ｂ区内出土土器（第13図）

Ｂ区からは土師器３点のみの出土である。

21は壷である。頸部の屈曲が弱く、口縁部が直に立ち上がる。器壁の荒れのため調整は分かりにくく、内面には指圧によるナデ調整が施される。

22は甕である。外面は刷毛目を内面は刷毛目後のナデ調整を行う。

23は残器高8.6cmを測る高杯である。裾部に径9mmの穿孔が３箇所見られ、外面には指圧によるナデ調整後に刷毛目で仕上げる。

Ｃ区内出土土器（第14･15図）

Ｃ区内出土土器の内、30点を紹介する。

出土した26･29･30･31･32･33は甕、24･35･36･37は壷、25･34･40･41は鉢、38･39小型丸底壷、47･48･49･50･51･52･53は高杯である。

24は完形の土師器の壷で上層よりの出土である。口径17.2cm、器高22.4cmを測り、内外面ともに刷毛目調整を基本としてのナデ仕上げである。

26は弥生土器の脚台付甕である。径15.8cm、残存高20.3cmと器高は低く、口縁内面に弱い沈線を有する特徴がある。最大胴部径が体部中位で、胴部の膨らみが弱いあり、胴の内外面ともにヘラでのナデ調整、そして横ナデ調整を施す。

29･30から33までは甕脚部の弥生土器である。

29は脚台高はやや高く3.8cmを測り、内外面ともに刷毛目調整を施す。30の径は7.3cmで脚台高も低く2.5mmである。くびれ部の締まりが弱く、5.8cmを測る。

31は第１号杭列から出土した資料である。器壁が全体に厚く、内外面ともに刷毛目調整を、特に指圧で中央内面をまとめる。32･33は小片で脚部の径は判明しない。

34は土師器の高杯片で、外面の刷毛目調整が非常に丁寧である。

25は鉢である。径は22.5cmと大型で、頸部のくびれは顕著で、内外面ともに刷毛目調整を施す。27は口縁部片で内面に強いくぼみを有する鉢と思われる。34は脚附き鉢のくびれ部である。外面は特に丁寧に刷毛目を中央部側に重ねる。40は小型鉢の口縁部である。器壁が荒れて調整は判明しない。

35は二重口縁の土師器大型壷で、上・中層と下層からの出土で両層の接合資料である。口径28.8cm、残存高39.5cmを測り、体部は上位に弱い肩を有し、胴部は樽形に膨らむ。頸部より屈曲し立ち上がり、反転部で外傾ぎみに直立し、口縁最端部はさらに外反する。頸部内面下位には明瞭な綾を有し、内外面ともに丁寧な刷毛目調整を基本とする。

36はほぼ完形の土師器二重口縁壷であり、上層よりの出土である。口径15.2cm、残存高22.2cmを測り、体部は球形で最大胴径はほぼ中央部に位置する。頸部より強く屈曲し外傾し、反転部からは外傾気味に直立し、端部は外反する。反転部内面には深い沈線を有する。外面は刷毛目調整を、内面には斜方向のへらけずり調整、指頭圧痕が見られる。

37は弥生土器で大型壷の口縁である。口径は判明しないが口縁端部は1.8cmと厚く、細い沈線を刻み、鋸歯状の文様を巡らしている。

38は完形の小型丸底壷である。口径5.3cm、器高7.5cmを測り、体部は球形で、口縁部の立ち上がりは0.9cmと短い。外面は刷毛目調整を、内面は指なでによる仕上げを行う。

39は小型丸底壷の胴部片である。外面は刷毛目調整、内面は指なで調整を施す。

41は平底の壷か鉢の底部である。

42は下層からの一括資料である。内面にヘラ調整を有する。43は免田式長頸壷胴部片である。胴の最

も膨らんだ箇所に２条の沈線を巡らし、大型の同心円文11条を彫り込む。44は免田式壺の上部胴部片である。上部には同心円文を９条、横沈線を５条彫り込む。45･46も免田式壺胴部片である。

47は完形の高杯である。杯部は弱く屈曲し外傾し、脚はまっすぐ延び屈強して開く。杯部内外面ともに刷毛目調整、脚部外面は指圧でのナデ後に刷毛目調整を施す。

49は高杯の杯部である。杯部中位で大きく外反し、屈曲が強く明確な綾線を有する。内外面ともに刷毛目調整である。

50は高杯であり、内面の指頭圧痕が明瞭に残る。51の高杯には４箇所の脚部付け根への穿孔が見られる。

54は須恵器杯身部である。立ち上がりが1.8cmと長くやや内傾し、口唇部内側には緩やかな段を有する。内外面ともに回転横ナデ調整である。上層よりの出土で、本遺跡の下限を示す資料である。

２　石器

全区試掘及び各区出土石器

出土数6点すべてを紹介する。

55はＣ区下層より出土した砥石である。現位置は保っていないが、据えて利用されたと考えられ、使用面はともに中央に屈部を設け、側面に近い側に擦った痕や条線の使用痕が観察される。２面とも利用されている。

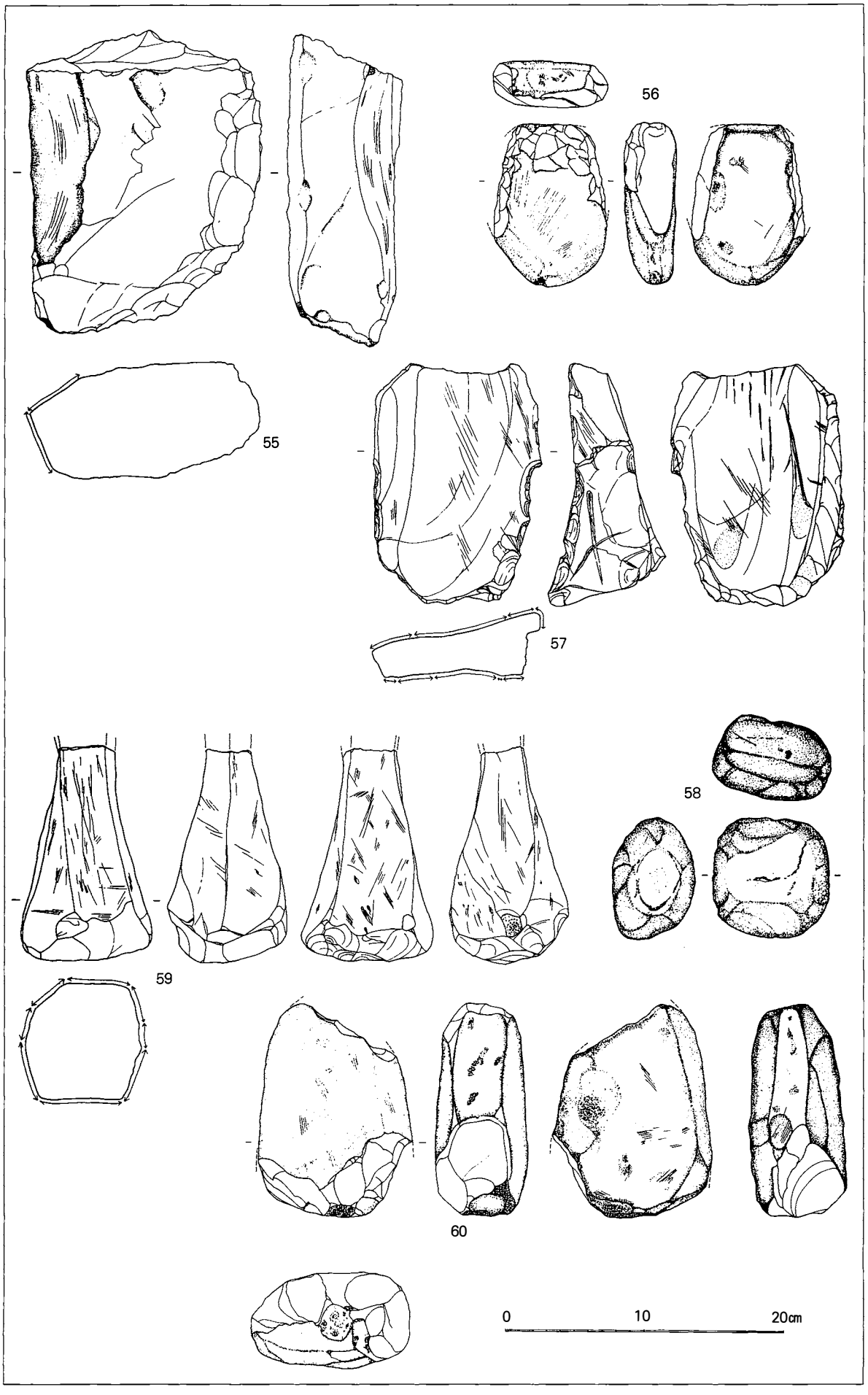
56はＡ区内カーボン集積層中から出土した叩き石である。上端と両側を掌の握り部に合わせて敲打による加工調整を行う。先端部には敲打痕が明瞭に残る。

57は砥石である。これも据置型であるが第６号試掘トレンチ内からの出土であるが、その状況は判明しない。中央部が極端に窪むほど研ぎ出して利用している。鉄器の刃部等を砥いだ跡の条線が多数残存する。

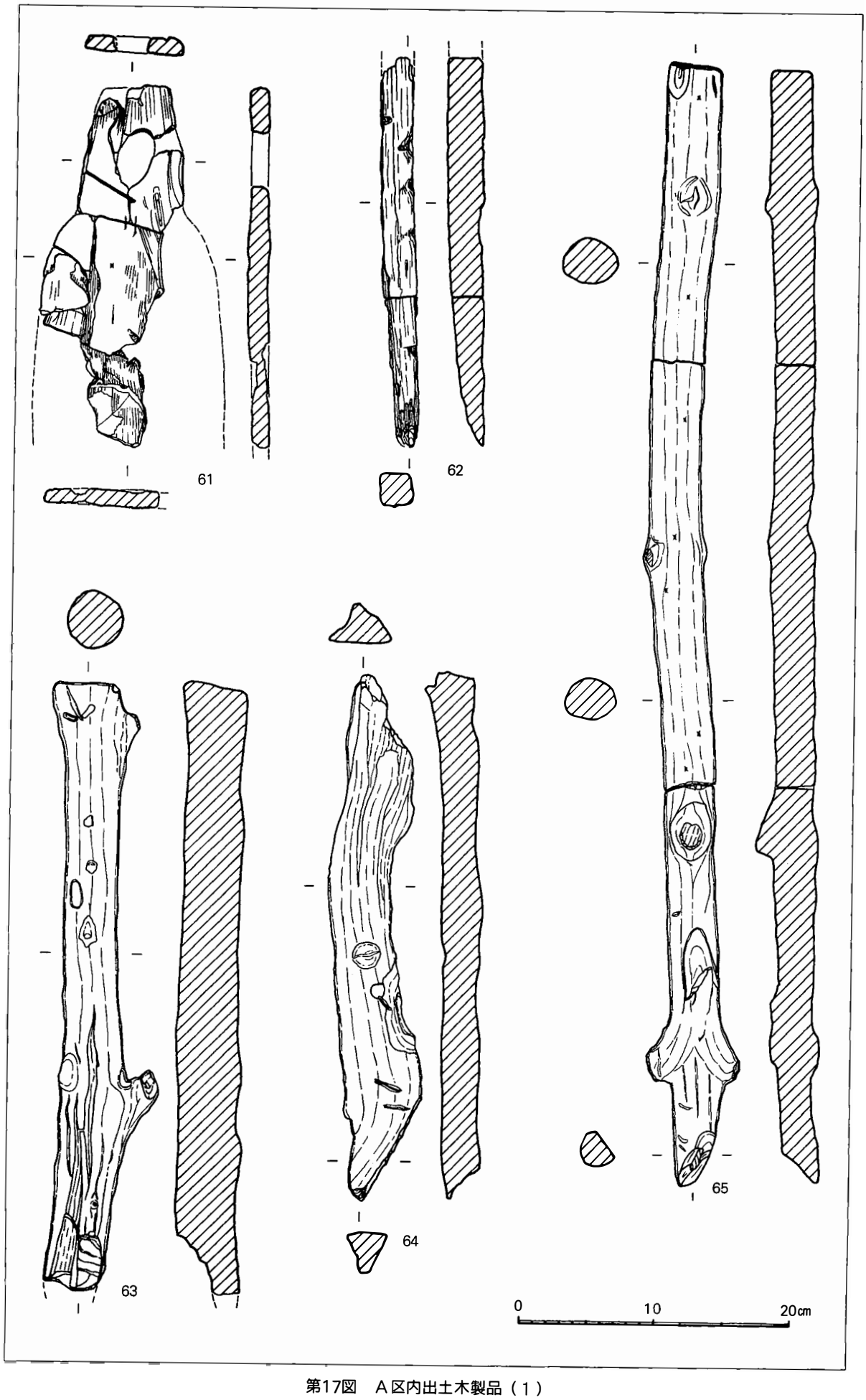
58はＣ区下層から出土した磨石である。表面中央部はほぼ平坦で磨きの痕跡が残る。

59はＢ区内から出土した砥石である。中央から半分に折れている。使用面は８面で中央部が細くなるほど頻繁に利用されている。

60は叩き石である。Ａ区内カーボン集積層中から出土した。56に比べ大型で、上部右側が欠損しているものの、敲打部は明瞭に残る。



第16図　全区内出土石器

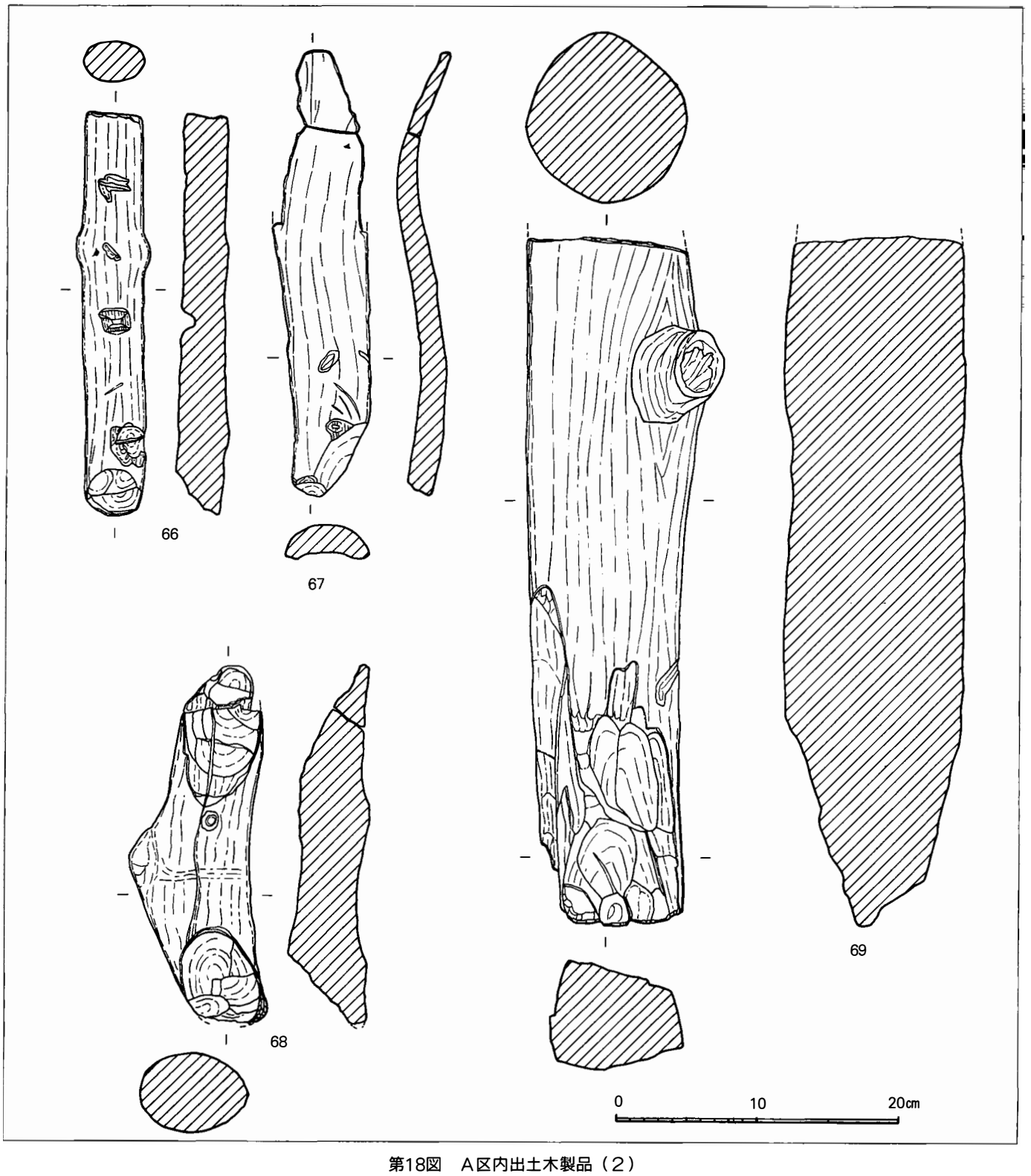


第17図　Ａ区内出土木製品（１）

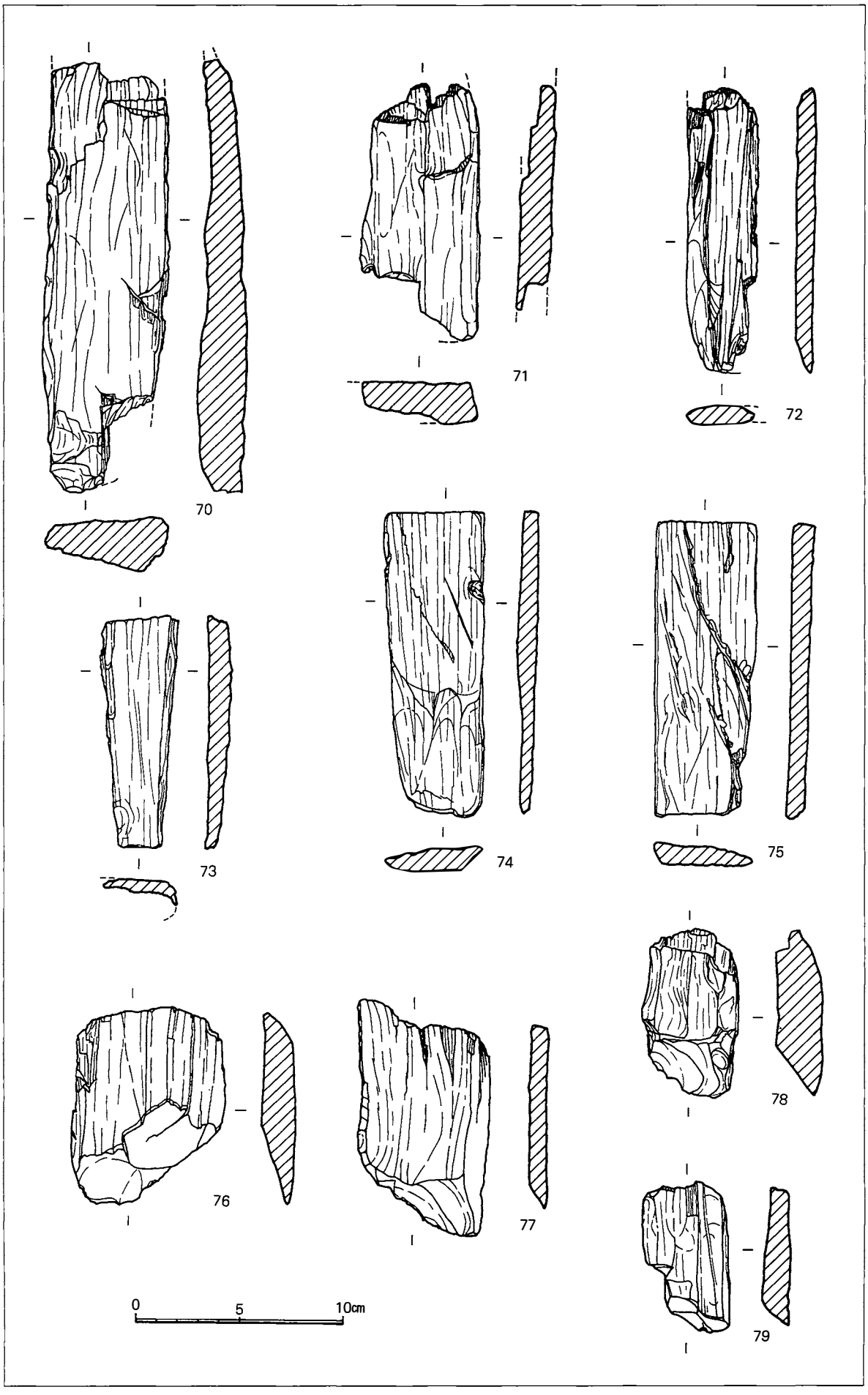
３　木製品

調査区内より出土した木製品は、サンプル資料を含めて総量200点となる。サンプルや小木片を除き、実測紹介は46資料にとどめた。ここでは各トレンチ毎に、木製品の用途の類似したものをまとめて解説する。

詳細は41頁～43頁までの第２表西片町遺跡出土木製品観察表に記述したので参照されたい。また一部の木製品についての樹種同定の結果については、45頁～51頁までの自然分析結果を併せて参照されたい。



第18図　Ａ区内出土木製品（２）



第19図　Ａ区内出土木製品（３）

Ａ区内出土木製品（第17･18･19･20図）

Ａ区内からは25点の資料を紹介する。

61は組合式鍬片である。柄装着部は長楕円形であり、4cmと径はやや狭い。樹種は判明しないが、硬質の材である。

62～69は先端を加工した杭類である。

62は小型杭、63は径4.0cmの丸杭である。64は材を8分の1程度に分割した杭である。65は全長81.4cm、径4.1cmの長杭である。

66は全長28.5cm、径4.3cmの短杭である。中位には方形の凹みを施すが、組み合せの状況は判明しない。

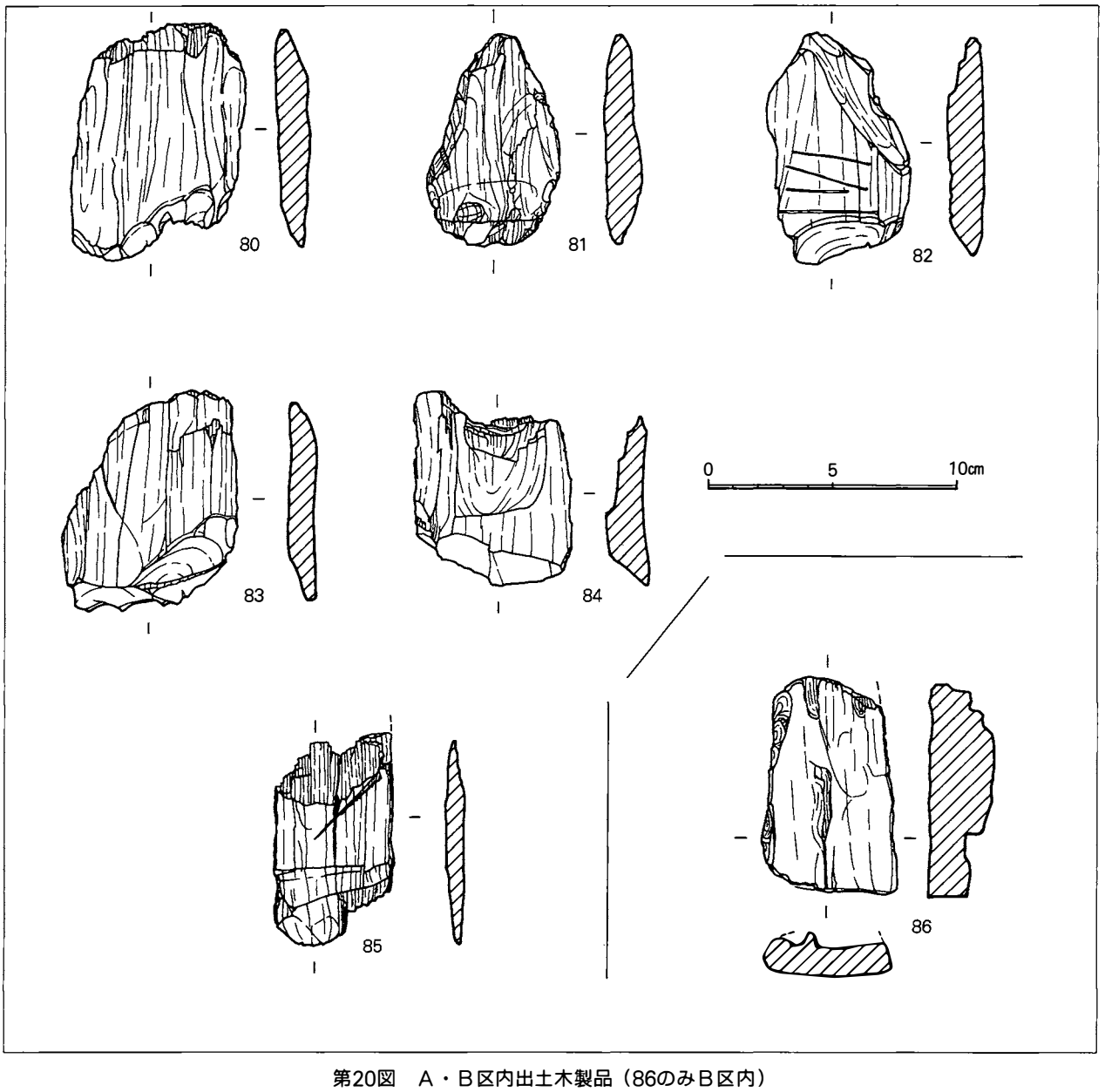
67は主用材から剥離した材を利用しての杭である。下側のみの加工である。

68は「ヤマモモ」の杭である。上下両端ともの鋭利に加工して利用している。径は7.7cmと中型である。

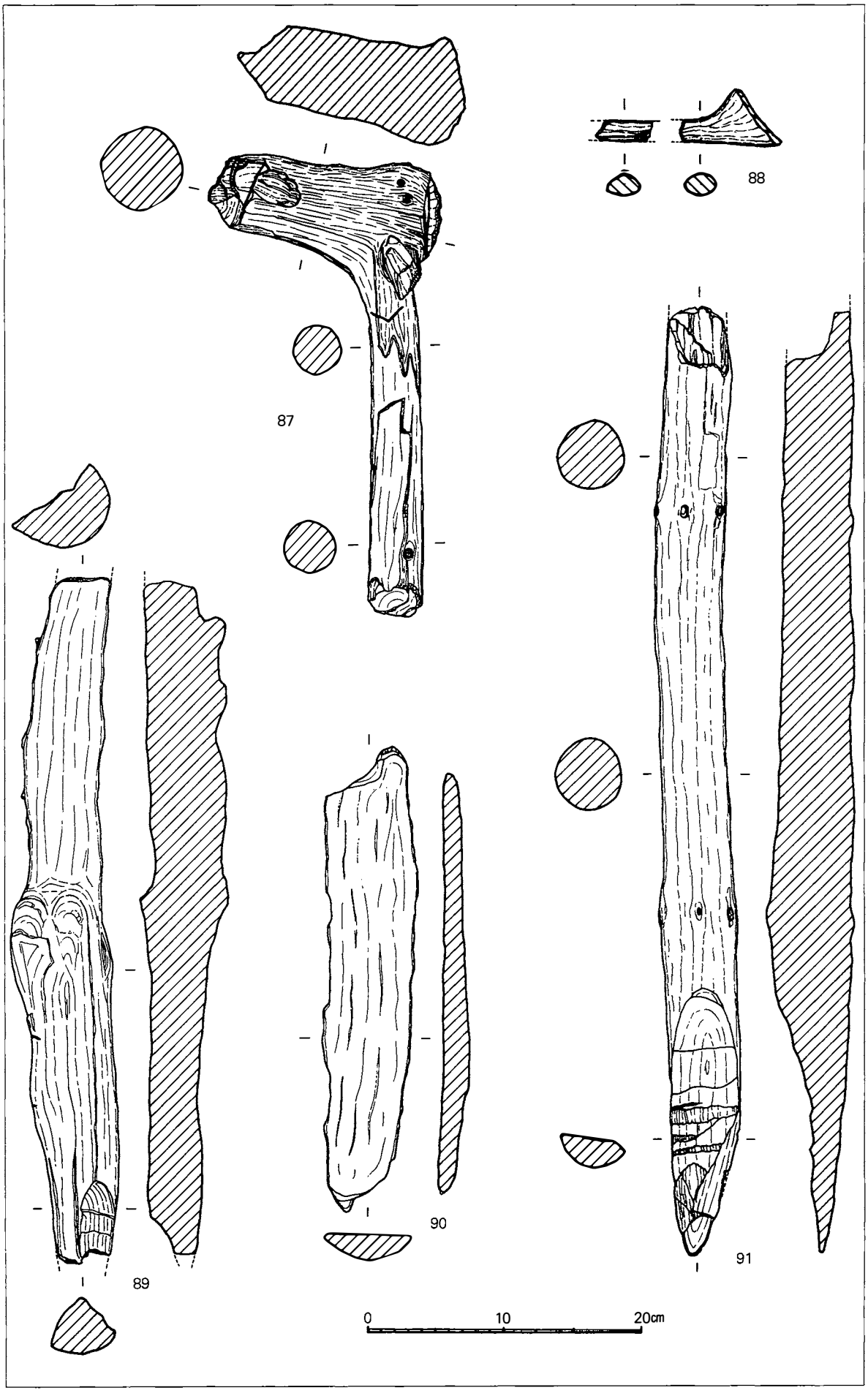
69は径11.4cmの「ケヤキ」の大型杭である。調査区外まで本体部分が続いていたため、調査区内分のみ切断し持ち帰った。用材は外皮も剥がずそのままで利用し、一部には節部も残る。大きなカットを一方向から数度にわたり施し、先端を鋭利に加工する。

70～75は平坦に加工した板材である。

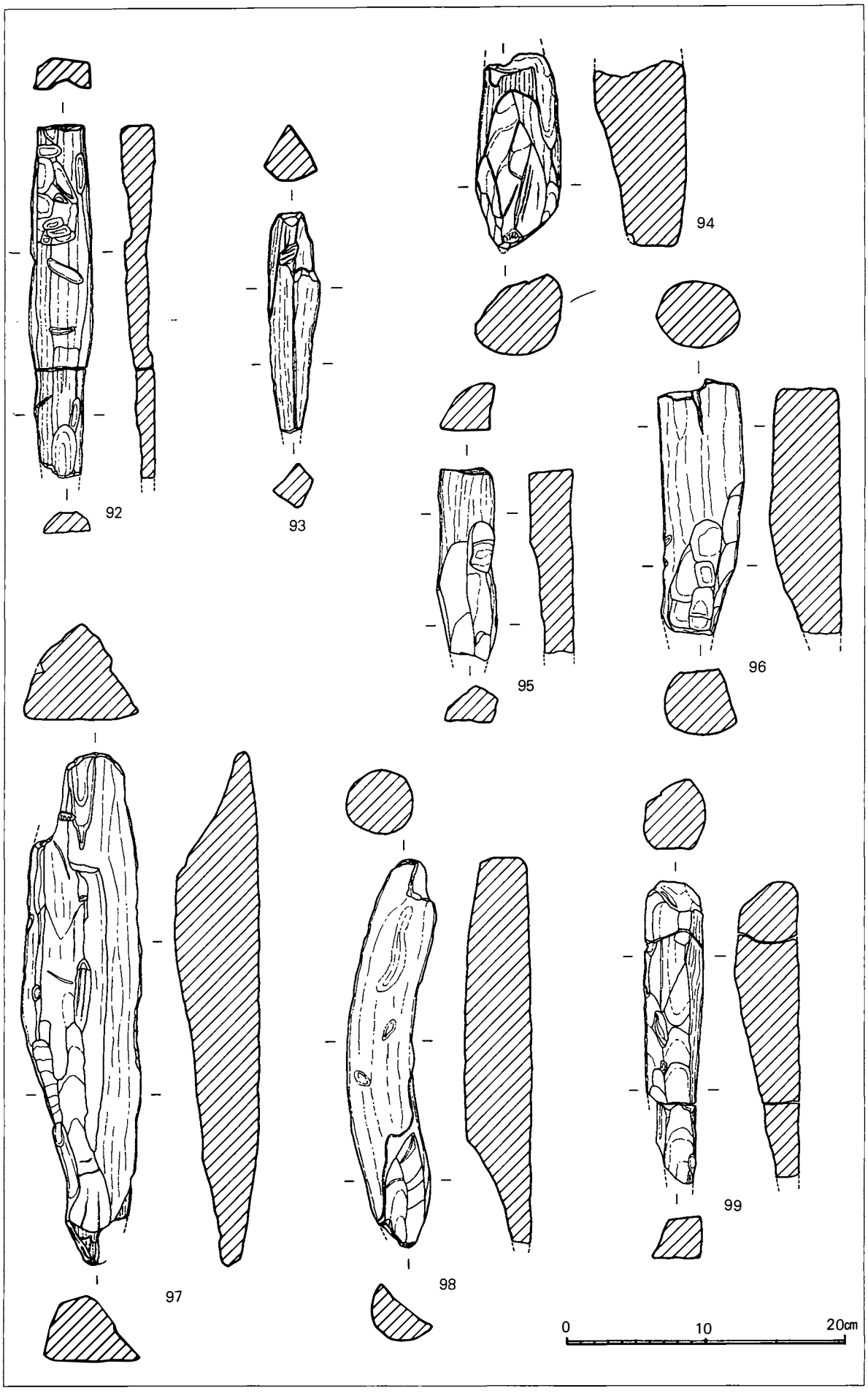
70は残存長22.9cmの板材片である。表面は一部分腐食して平坦面が残っていないところがあるが、全面に焼きいれ炭化した痕跡がある。71は材の厚が22



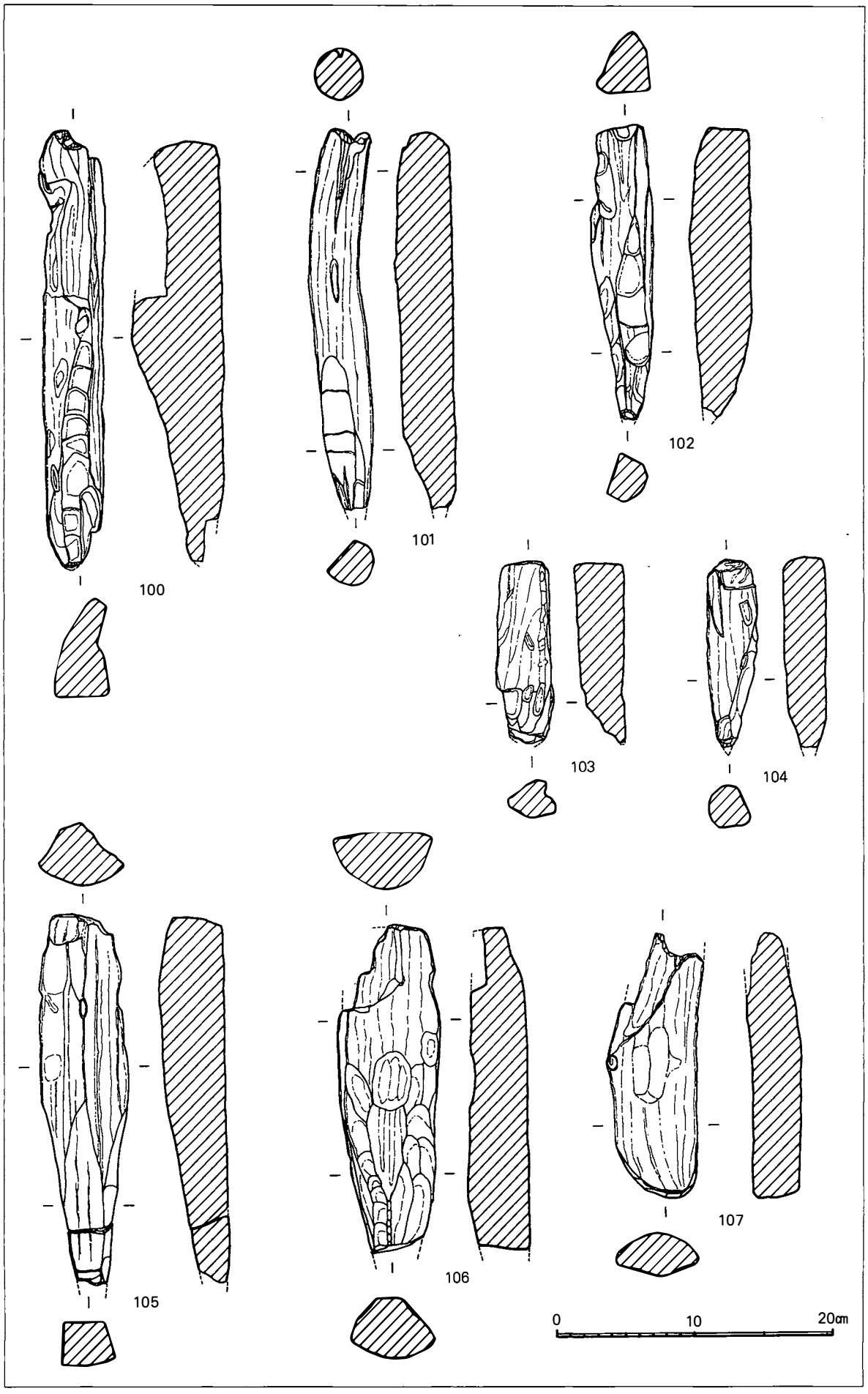
第20図　Ａ・Ｂ区内出土木製品（86のみＢ区内）



第21図　Ｃ区内出土木製品（１）



第22図　Ｃ区内出土木製品（２）



第23図　Ｃ区内出土木製品（３）

㎜を保つ用材で、72は先端加工した板材である。

73･74･75は上部端及び側面を明瞭にカットした板材片である。74はその先端をさらにカットする。75の表面には２本の不明瞭ではあるが条線が残存する。

76～85は用材を加工した後のチップである。

76は上下両端を加工し厚は最大で1.9㎝を測る。77は下側に特に鋭利な加工を残す。78は先端部の強い調整を２回行う。79も同様に３回にわたるカットを先端部に行う。80は上下端に加工部が残される。81は下側のみでなく側面にも加工調整を残す。82は先端に数回の強いカットを施すが、用材の中央部に４条の浅い条線を刻みこむ。

83･84･85は供に上下端にカットを施し、用材の加工に関わる廃棄の様子が伺える。

Ｂ区内出土木製品（第20図）

Ｂ区からは、サブトレンチ内より86のチップが１点のみ出土している。残存は9.7㎝の小片で裏面には平坦な用材面を残す。

Ｃ区内出土木製品（第21･22･23図）

Ｃ区内からは21点の木製品を紹介する。内訳は斧柄未製品、柄握り部が各１点で、他は全て杭類である。なお93～107については全て１号杭列に伴う遺構資料である。

87は斧柄未製品で樹種は「カヤ」である。両端部及び枝部は切断し加工してあるものの、製作途上の資料である。外皮はほぼ全面に残り、小枝も一部は残存している。

88は柄握り部である。握りは5㎝とやや大型で縁辺部は丁寧に面取りを施している。柄部の断面形は楕円で小振りなため、匙等の小型の製品の部材と考えられる。

89は径の２分の１に分割された杭である。90は分割後の残材を用いた厚さ1.9㎝の杭。

91は残存長67.7㎝「ヒノキ」の長杭であり、径は4.8㎝。先端は一方向から７回カットされ丁寧に仕上げられている。92は厚が2.4㎝と薄手の板材を利用した杭で、材の中位には更に加工の痕跡がある。

93は径の６分の１に分割された杭。94は「エゴノキ」の杭で、径は6.5㎝である。95･96ともに小型杭であり、96の杭の樹種は「クリ」と同定されている。

97は１号杭列中では最も大型で、径６分の１に分割された杭である。上下端の加工が特に丁寧になされている。98･99ともに小型杭であり、外皮が一部残る。100は径6.5㎝の杭であり、先端部の加工は８回カット調整を行う。101は径が4.3㎝の丸材をそのまま利用した杭である。

102･103･104はともに小型の杭で丸材を分割して利用している。105は５方向から丁寧に先端を尖らせて作成した杭。106･107ともに径の２分の１に分割された杭である。

第１表　西片町遺跡出土土器観察表

出土地区・遺構名	遺物番号	種別	器種	法量（cm）				胎土	焼成	色調	形態・手法の特徴	備考
				口径	器高（残存高）	胴径	底径					
試掘 T－18	No.1	土師器	小型壷	9.0	10.0	－	－	小石を含む砂粒の中に長石・石英・角内石・雲母	良	褐色（内面胴～底部黒）	口縁ナデ　口縁部をのぞく内面全体に指頭痕とハケ目 外面　ハケの後をナデ	
試掘 T－11	No.2	須恵器	須恵器椀高台付杯	－	(1.8)	－	10.1	長石がみられる	良好	灰色	ヘラ切り	
試掘 T－11	No.3	須恵器	甕	－	(4.5)	－	－	白い粉を含むきめ細かい胎土	良好	灰色一部暗灰色	内面は車輪文のタタキ文 外面は格子文のタタキ文	
試掘 T－11	No.4	須恵器	甕	－	(9.0)	－	－	きめ細かい	良好	白褐色	内、外面にタタキ目	
試掘 T－3	No.5	土師器	器台	－	(8.4)	－	－	角内石・長石・雲母と砂粒がみられる	やや良	褐色	分厚く、傾斜がややきつい	
試掘 T－18	No.6	土師器	甕	－	(8.9)	－	－	砂粒と長石がみられる	良	褐色	内面　ヘラ削り 外面　ハケ目は1.2cmに10本の細いハケ目	
A区下層	No.7	土師器	甕	18.8	(9.8)	－	－	長石・砂粒を含む	良	灰褐色		
A区集中箇所	No.8	土師器	甕	17.5	27.5	23.8	－	長石・石英・金雲母・砂粒が混入	やや良	褐色	内面　ハケによるナデ 外面　ハケ目の後、指調整 口縁　指ナデ　内外面に指跡、特に外面に多く見られ内面にはハケ目がみられる	
A区集中箇所	No.9	土師器	短頸壷	14.6	19.2	7.8	－	金雲母・長石・砂粒子を含む	やや良	暗褐色	内面　ハケ目の後指ナデ 底部　指頭圧痕 外面　ハケ目の後ナデ 口縁　指ナデ	
A区下層	No.10	土師器	長頸壷	16.1	(5.1)	－	－	長石・砂粒を含む	やや良	褐色	内　面　ハケ目調整 外　面　ハケ目調整	
A区	No.11	－	壷口縁部	－	(3.8)	－	－	長石・雲母・砂粒がみられる	やや良	淡褐色	内面　ハケ目 外面　縦荒ハケ目	
A区	No.12	－	甕	－	(6.7)	－	－	長石・砂粒を含む	良	褐色	内面　ヘラ削り調整 外面　ハケ目1.5cmに８本の荒いハケ目外面にスス	
A区	No.13	弥生土器	壷頚部	－	(1.8)	－	－	砂粒と長石を含む	やや不良	灰褐色	外面　10条の横方向の沈線、内２箇所に縦方向の短沈線で刻み	
A区集中箇所	No.14	土師器	高杯脚部	－	(9.3)	－	14.0	砂粒と白い粒（長石と石英）を多く含む 雲母を少量含む	良	褐色	指頭圧痕の後にナデ 表面に指頭圧痕 内面　ヘラ押の後指ナデ 下の方は指によるナデ	
A区集中箇所	No.15	土師器	高杯脚部	－	(8.0)	－	12.5	砂粒を多く含みその中に長石・石英がみられる	良	褐色	内面　ヘラ押えの後ナデ 外面　ハケ目の上を指で調整 底部指によるナデ、調整 表面に指頭圧痕	
A区集中箇所	No.16	土師器	高杯脚部	－	(4.0)	－	8.2	長石・角内石を含む砂粒がみられ雲母も多少混入	やや良	淡赤褐色	脚部にくびれ部がみられる 火にあったのか器面に、ザラツキがみられる	フイゴ羽口の転用品
A区集中箇所	No.17	土師器	高杯脚部	－	(6.4)	－	12.0	砂粒と長石を含む ２～６㎜の小石もみられる	良	内面褐色 外面灰褐色～褐色	内面　ヘラによる押調整 表面　ハケ目の後指ナデ 外面　指による調整	フイゴ羽口として転用
A区	No.18	土師器	高杯脚部	－	(4.9)	－	－	砂粒・長石と雲母少量がみられる	良	褐色	黒斑がみられる	

出土地区・遺構名	遺物番号	種別	器種	法量（cm）				胎土	焼成	色調	形態・手法の特徴	備考
				口径	器高（残存高）	胴径	底径					
A区	No.19	土師器	高杯脚部	－	(6.2)	－	－	金雲母・長石と小石(3m/m位)を含む砂粒	良好	褐色	一部に黒斑がみられる 外面　荒れている	
A区集中箇所	No.20	土師器	椀	14.5	(5.1)	－	－	砂粒を多く含む	良	淡褐色	内面　指調整、ヨ 外面　ヘラ削 一部黒斑有り	
B区	No.21	土師器	壷	13.5	(19.7)	－	－	長石と石英・雲母と砂粒を含む	やや良	褐色	内面　頚部指頭痕 胴部　指頭圧痕 外面　ハケ調整指によるナデ 口縁　指によるナデ	
B区	No.22	土師器	甕	口縁15.6	(9.9)	－	－	砂粒と長石・石英を含む	やや良	褐色	内面　頚部ハケ目 胴部　ナデ指頭痕 外面　ハケ目 口縁　指ナデ	
B区	No.23	土師器	高杯脚部	－	(8.6)	－	11.2	長石と砂粒が多少みられる	良	褐色	内面　ヘラ押し指による調整 外面　指圧によるナデ調整後にハケ目調整を施す	裾部に穿孔が３ヶ所 裾部にハケ目を指ナデ調整してある。
C区	No.24	土師器	壷	17.2	22.4	－	1.0	長石と雲母・砂粒を含む	良	褐色	内面　頚部横にナデ　底部から胴デ、 胴部　底部荒目のハケ目　底部に指頭圧による調整	
C区	No.25	土師器	鉢	22.5	(6.3)	－	－	長石・砂粒・雲母混入	良好	褐色	外面に黒斑がみられる ハケ目が調整粗細	
C区	No.26	弥生土器	甕脚台部	15.8	(20.3)	－	－	砂粒に石英と雲母が混入小石で３～４m/mも含む	良	淡褐色	内面　全体に荒目のヘラナデ、 外面　ヘラ　調整　口縁　ヨコナデ	
C区下層一括	No.27	土師器	鉢口縁部	－	(4.3)	－	－	長石を含む砂粒	やや良	暗褐色	外面　ハケ目	
C区	No.28	土師器	頚部～胴部	－	(11.5)	－	－	長石・砂粒を含む雲母が多少みられる	やや良	褐色	黒斑がみられる 器面は粗	
C区	No.29	弥生土器	甕脚付	－	(10.5)	－	8.8	砂粒と石英・長石を含み角内石を少量含む	良	淡暗褐色	内面　ハケ目、指頭圧痕 外面　ハケ目	
C区下層一括	No.30	弥生土器	甕脚付	－	(5.5)	－	7.3	砂粒を多く含み雲母らしき物がみられる	良好	淡褐色	坏部内面　ナデ 坏部外面　ハケ目 脚部　両面、	
C区	No.31	弥生土器	甕脚付	－	(6.8)	－	9.4	砂粒の中に角内石及び雲母がみられる	良	淡褐色	坏部内面ハケ目、中 脚部両面指調整、ナ	外面脚部は、目の後指調整（所々にハケ目痕がみられる）
C区	No.32	弥生土器	甕脚付	－	(9.2)	－	－	長石・石英・雲母を含む・砂粒	良	褐色	内面　指頭圧痕と指頭ナデ 外面　ハケ目	脚のくびれの部分はハケ目の上を指でナデたと思われる
C区	No.33	弥生土器	甕脚付	－	(3.9)	－	－	砂粒の中に石英・長石が多くみられる少量の金雲母らしき物も含まれている	荒い	内面暗褐色 外面茶褐色	内面　荒いハケ目、 外面　ハケ目	
C区	No.34	土師器	高杯脚部	－	(4.1)	－	－	金雲母・長石を多く含む	良	内面黒 外面濃灰褐色	内面　指頭圧痕と指調整 外面　ハケ目は１cmに８本	
C区	No.35	土師器	壷	28.8	(39.5)	－	－	長石・石英・金雲母・角内石を含む砂粒	良	褐色	内面　スス付着・頚部　指調整 外面　頚部ハケ目の後　ナデ	
C区上・中層	No.36	土師器	壷	15.2	(22.2)	－	－	砂粒の中に長石・石英・金雲母・雲母等が含まれている	良	褐色	内面　ヘラ削り 所々に指頭圧痕 外面　ハケ目 口縁　指ナデ調整	

出土地区・遺構名	遺物番号	種別	器種	法量（cm）				胎土	焼成	色調	形態・手法の特徴	備考
				口径	器高（残存高）	胴径	底径					
C区1号列跡	No.37	弥生土器	壷口縁部	－	(1.8)	－	－	長石・石英・細い砂粒・雲母等が混入	良	白褐色	口縁の帯部分、線刻がみられる	
C区	No.38	土師器	小型壷	5.3	7.5	－	－	金雲母・石英・長石・砂粒を含む	やや良	暗茶褐色	内面指により右にナデ上げ 外面　ハケ目　口縁　指ナデ 内外面　黒斑	
C区下層	No.39	土師器	小型壷	－	(4.0)	－	－	金雲母・長石混入	良	灰褐色	内面　指調整 外面　ハケ目のあと、ナデ調整	
C区	No.40	土師器	鉢	8.0	(5.4)	－	－	砂粒・長石を含む	良	褐色	内面　指頭ナデがみられる	
C区下層	No.41	土師器	鉢・壷底部	－	(2.2)	－	2.9	長石・砂粒と雲母少量がみられる	やや不良	褐色	黒斑がみられる 内面　指頭ナデ調整 少し変型	
C区下層	No.42	弥生土器	壷頚部	－	(3.0)	－	－	金雲母・長石と砂粒がみられる	やや良	内面褐色 外面暗灰褐色	内面　ヘラ調整	
C区	No.43	弥生土器	長頸壷（免田式）	－	(6.6)	－	－	長石・砂粒を含む	良	褐色	内面　指調整	
C区	No.44	弥生土器	壷（免田式）	－	(3.2)	－	－	長石・石英・角内石・雲母を含む砂粒	良	暗褐色	内面　ハケ目	
C区	No.45	弥生土器	壷（免田式）	－	(3.3)	－	－	長石・雲母と砂粒を含む	良	暗褐色	黒斑がみられる	
C区	No.46	弥生土器	壷（免田式）	－	(1.8)	－	－	長石と砂粒を含む	良	暗淡褐色	内面　ハケ目	
C区	No.47	土師器	高杯	15.5	12.5	－	10.0	長石・石英がみられ金雲母を含む	良	淡暗褐色	口縁内面ナデ、坏部内面にハケ目 坏部外面ハケ目の後ナデ　脚部内面ヘラ押調整、脚部外面ハケ目の後指によるナデ。 脚裾内面ハケ目の後ナデ。脚裾外面指によるナデ	
C区	No.48	土師器	高杯皿部	－	(4.5)	－	－	金雲母・長石・砂粒混入	良	濃褐色		
C区	No.49	土師器	高杯杯部	16.0	(5.0)	－	－	砂粒に長石・石英も含み雲母も多少みられる	良	淡褐色	内面　ナデ 外面　ハケ目の後ナデ調整	
C区	No.50	土師器	高杯脚部	－	(10.0)	－	－	砂粒・長石が多くみられる	やや不良	褐色	内面に指頭圧痕がみられる	
C区	No.51	土師器	高杯脚部	－	(8.0)	－	－	長石・雲母・砂粒を含む	良	濃褐色	穿孔が４ヶ所	
C区	No.52	土師器	高杯脚部	－	(7.0)	－	－	金雲母・長石と砂粒を含む	良好	淡褐色	内面はヘラ調整のあとナデ	
C区	No.53	土師器	高杯	－	(2.1)	－	－	金雲母・長石・石英を含む砂粒	良	暗褐色	内面　ハケ目ナデ 外面　ハケ目	
C区	No.54	須恵器	杯身	8.6	(4.3)	－	－	長石がみられる	やや良	内面暗灰色 外面灰色		

第２表　西片町遺跡出土木製品観察表

出土地区・遺構名	遺物番号	種別	樹種	法量（cm）				木取り・加工の特徴	備考
				全長（残存長）	横	厚さ	径		
A区 下層	No.61	組合式 鍬	－	(26.2)	(9.1)	1.4 ～ 1.6	－	表　平面での調整 裏　外壁に近い用材 両面に釘の跡 木面の剥離・欠損が激しく調整がはっきりしない	
A区 下層	No.62	杭 小型	－	(28.2)	2.5	2.2 ～ 2.7	2.5	表　平面調整　先端　ゆるやかなカット 裏　剥離面　先端　カット面を残す 全周囲での４面のカット	
A区	No.63	杭	－	(44.4)	7.3	3.8 ～ 4.7	4.0	先端部の欠損は新しい 先端　カット面は４回程度であるが、その後破砕している。弱いカットの打ちかけ有	
A区 下層	No.64	杭	－	38.4	5.9	2.5 ～ 3.7	－	先端　一部欠損　一方向からで６回カットを施す。 上部　自然剥離でかなり荒い面を残す。 側面　弱いカット面を有する。 表　ベーク側だが樹皮は残されていない	
A区 下層	No.65	杭 長寸	－	81.4	6.8	2.7 ～ 4.5	4.1	先端　強い一方向からの継続的なカット。中央部は朽ちはてて穿孔される。左右の枝部はカットするが削りの状況は磨耗している。逆台形状の刺突痕跡有。金属の錐状の物で刺し。	
A区 下層	No.66	杭	－	28.5	5.3	2.2 ～ 3.6	4.3	先端　一方向からのカットを５回施す 先端近く上下方向からの継続的なカット 中央　四方からの強いカットを有する	
A区 泥炭下層一括	No.67	杭	－	31.3	(6.7)	1.7 ～ 2.2	－	先端　強い一面のカット、弱い二面でのカット 表　外皮バーク側であるが樹皮は残らない。カーボン付着。 裏　強い一回の破砕を行なう	
A区 下層	No.68	杭	ヤマモモ	(25.2)	8.5	4.2 ～ 5.5	7.7	先端部は新しく欠損する。ケズレ部分は新しい。一方向からのカットであるが、７回程度の小刻みな調整を施す。上部６回にわけてケズリの調整を行なう。外皮樹皮が多く残存する	
A区 下層	No.69	杭 大型	ケヤキ	(48.4)	13.9	11.8 ～ 12.7	11.4	先端　削りについては比較的に新しい 表　強く新しい削り、外皮側生きのまま、大きなカットを施す１回分のみ	
A区 下層	No.70	板材	－	(22.9)	6.5	1.0 ～ 3.1	－	先端　鋭いカット、欠損 風化による抉り 両面　平面調整、全面に焼面を付けたか。	
A区 下層	No.71	板材	－	13.6	6.5	1.3 ～ 2.2	－	表　強いカット　平面剥離 裏　強いカット 側面調整剥離面	
A区 下層	No.72	板材	－	12.3	4.2	1.0 ～ 1.2	－	表　平面調整 裏　剥離	
A区 下層	No.73	板材	－	(15.1)	3.8	0.7 ～ 1.0	－	表　平面調整　先端カットか剥離かハッキリしない 裏　用材面を残す 上部　ゆるやかなカット、欠損	
A区 下層	No.74	板材	－	16.2	5.5	0.6 ～ 1.3	－	先端　小さなくぼみ単位でのケズリを 両面平面での調整面 中央　細い条線が走る	
A区 下層	No.75	板材	－	15.8	5.4	1.0 ～ 1.2	－	両面　平面調整　側面剥離 表面に数ヶ所切れ目が見られる	
A区 下層	No.76	チップ	－	10.5	8.2	1.5 ～ 1.9	－	表　先端　数回による強いカット 裏　用材の外面を残す	

出土地区・遺構名	遺物番号	種別	樹種	法量（cm） 全長（残存長）	横	厚さ	径	木取り・加工の特徴	備考
A区 下層	No.77	チップ	－	12.8	7.4	0.8 ～ 1.0	－	表　先端三回強いカット 裏　角を持った平面調整か	
A区 下層	No.78	チップ	－	9.1	5.2	0.7 ～ 2.5	－	先端　強い調整は２面 側面　強いカット一面残す	
A区	No.79	チップ	－	8.2	4.7	0.9 ～ 1.5	－	先端近く強いカット調整 表　先端強い三回カット 裏　中心に近い内輪	
A区 下層	No.80	チップ	－	10.7	7.6	1.2 ～ 1.5	－	表　先端数回強いカット、上部ゆるやかな三回カット 裏　用材面残す 上部　強く一回カット	
A区 下層	No.81	チップ	－	9.5	6.1	1.2 ～ 1.7	－	表　平面調整　先端　２～３回のカット 裏　用材を残す、先端摩めつしたのでは 側面　上部欠損、中央　カット調整	
A区 下層	No.82	チップ	－	10.3	6.4	0.6 ～ 1.6	－	表　先端数回強いカット 裏　剥離 中央　浅い条線を描く	
A区 下層	No.83	チップ	－	9.8	7.8	0.6 ～ 1.2	－	表　剥離調整、先端数回の強いカット 裏　用材面を残す 上部　ゆるやかなカット面	
A区 下層	No.84	チップ	－	8.9	7.2	0.8 ～ 1.7	－	表　上部欠損　中央　強いカット、先端近く用材面を残す 先端　強い三回カット 裏　剥離面、上部カット	
A区	No.85	チップ	－	(9.5)	5.4	0.4 ～ 0.9	－	表　上部剥離 中央　平面調整　先端にかけてゆるやかなカット 裏　加工剥離　上部ゆるやかなカット	
B区 深掘部	No.86	チップ	－	(9.7)	6.1	1.0 ～ 2.9	－	表　用材面を残す 裏　自然剥離面　剥離調整	
C区 下層	No.87	斧柄未製品	カヤ	32.2	14.4～16.7 3.4～3.9	－	6.1 3.5	外皮全面　残存 先端部　二方向からの強いカット 柄部　二方向からの４回のカット 頭部　四方からのきめ細かいカット調整	未製品
C区 下層	No.88	匙柄柄部	－	(4.1 ＋ 7.1)	1.4 ～ 4.3	－	1.6	グリップのエンド部に丁寧な加工を施す 全体をエンドで小さくカットして部分的に研磨 内面に向けて小さなカットで調整	出土状況から見て同一個体
C区 下層	No.89	杭	－	(48.8)	7.3	3.4 ～ 6.4	－	先端部は新しい欠損、小さな加工を３段にわたって削る。外面側そのままの位置、１次加工の強い調整、カットで加工。 中央　二マタの用材を大きく半裁して杭として利用、１次調整の強い割れ	
C区 下層	No.90	杭	－	33.2	6.6	1.0 ～ 1.9	－	先端　弱いカット 上部　裁断の痕跡有、先端部近く一回の強いカット	
C区 下層	No.91	杭長寸	ヒノキ	(67.7)	5.6	4.8 ～ 6.3	4.8	先端　強い一方向からの重なりのカット（７回） 当初の強いカット、最後は引き裂きで仕上げ	
C区 下層	No.92	杭	－	(25.3)	4.6	1.0 ～ 2.4	－	先端部を欠損 表　小さな打ち込みが見られる 中央　古い時期のカットを有する、表面は黒色がかる 一部内側が腐食	

出土地区・遺構名	遺物番号	種別	樹種	法量（cm）				木取り・加工の特徴	備考
				全長（残存長）	横	厚さ	径		
C区 1号杭列	No.93	杭	－	(15.9)	3.8	－	－	先端部は欠損、全方位で先端部に向って尖がす様にして６面でのカット 上部　強いカットと剥ぎ、先端をとがしてバーク部位は全くない。１本の丸木の外周囲をカットして削り込む	
C区 1号杭列	No.94	杭	エゴノキ	(14.1)	6.1	4.0 ～ 6.5	－	先端　新しい欠損、強い３方向からのカットを施す、上部側面　分厚いバーク貼り付き 裏　樹皮を有する	
C区 1号杭列	No.95	杭	－	(13.7)	4.3	2.0 ～ 3.1	－	先端は欠損新しい　４面からのカット、１面のみ当初のカット中央新しい欠損 上部　外皮部のままで利用、丸木の1/4裁でカット	
C区 1号杭列	No.96	杭	クリ	(18.3)	5.9	2.6 ～ 5.2	5.9	先端部は欠損、丸杭を２面からのカット。調整は丁寧。中央から先端にかけての側面２面でのカット痕、上部　外側外皮のままで未調整	
C区 1号杭列	No.97	杭	－	(36.6)	8.6	4.5 ～ 6.1	－	先端　新しい欠損　断続的な小さなカット 先端近く強いカットを施す 中央　大きな半裁でカットする。外皮面バークはなし	
C区 1号杭列	No.98	杭	－	(27.6)	6.8	3.6 ～ 4.9	4.9	先端　新しい欠損、一方向のみからの大きなカット。外皮側残り 中央全周囲外皮(薄いもの)が残る。バークの残存があり一部焼成	
C区 1号杭列	No.99	杭	－	(21.5)	(4.2)	2.6 ～ 4.6	－	先端部は欠損見つからず、中央部で1/2裁、まわりで５面のカット。外皮が一部分残る 上部５面でのカットを施す。外面での外皮部分残る	
C区 1号杭列	No.100	杭	－	(31.1)	(4.8)	3.8 ～ 6.5	－	先端部は大きな一方を基本として、他の二面の小さなカットを含める。中央から先端にかけて８回にわたり小さいカットを重ねる	
C区 1号杭列	No.101	杭	－	(27.2)	4.4	3.5 ～ 4.3	－	先端　大きく一面のみカットで、周囲３面を小さくカットで調整、外皮面であるがベークはつかず、上部外面のみで調整なし	
C区 1号杭列	No.102	杭	－	(21.1)	4.5	3.0 ～ 4.4	－	先端部は新しい欠損、６面にわたるカットでの調整を行なう 上部先端部は生き　カット面は平坦	
C区 1号杭列	No.103	杭	－	(13.0)	4.1	2.6 ～ 3.6	－	先端　強いカットを行なう　小さく４面程度のカットを施す 表　外皮面ベークは無いが面調整	
C区 1号杭列	No.104	杭	－	(13.3)	3.6	2.6 ～ 3.1	－	先端　欠損は新しい４方向で小さく先端部分のみをカット。表皮はつかないが、外面のまま。カット面は２面で調整を行なう。 上部　新しいカットきず	
C区 1号杭列	No.105	杭	－	(26.5)	6.3	3.1 ～ 4.7	－	上面は敲打により打面のクズレ有、旧形成面まで残る。上部　新しい打面 中央　５回にわたりカットを行なう。外面側一部にバーク貼り付き状況、先端近く外面側バーク一部に残る	
C区 1号杭列	No.106	杭	－	(23.5)	(7.5)	3.8 ～ 4.4	－	先端部は新しい欠損。両サイドからの基本的な加工 最初半裁後に逐次小さな加工を加えて進めていく 上部　当初の一面での大きな裁断を行なう。外面のままで未調整	
C区 1号杭列	No.107	杭	－	(18.9)	(7.0)	3.2 ～ 3.6	－	先端　左側より右側にかけてカットする。最後に縁辺部の調整、刃部形成 中央　一部弱い剥離面が残る	

第３章　　分　析

第１節　西片町遺跡出土木製品の同定

熊本大学教育学部教授　　大迫　靖雄

第２節　西片町遺跡出土種子の同定

大阪市立大学名誉教授　　粉川　昭平

西片町遺跡出土木製品の同定

熊本大学教育学部教授　　大迫　靖雄

今回、同定を依頼された出土木材には劣化が進み、顕微鏡切片作成が困難なものが多い。さらに、資料が微小なため、切片作成が不可能なものもあった。しかしながら、出来る限り顕微鏡検眼用の切片作成を行って、以下の同定を行った。

資料番号 No.１(遺物番号 68)

大型の杭としてあるが、依頼された資料の寸法が小さいため、資料の作成が困難であった。

木口面（写真番号 1-1、2）

道管の形状は小さく、試片全面にまんべんなく分布しており散孔材といえる。道管は単独または２～３個複合したものが見られる。放射組織は１～４列程度で、木繊維が占める割合が高い。また、接線状柔細胞が見られる。

まさ目面（写真番号 1-3、4）

道管のせん孔は階段せん孔を示し、barの数は６～８個程度であることが示されている。放射組織は、平伏および直立細胞からなる異性放射組織を示し、放射組織には、結晶を含む多室結晶細胞が多数見られる。

板目面（写真番号 1-5）

道管の階段せん孔が示されているが、barの数は６～８個程度で比較的少ない。また、放射組織（１～４列）と柔細胞が見られるが、他は木繊維となっている。

以上の結果から、本樹種はヤマモモ（*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.）と鑑定される。

資料番号 No.２(遺物番号 69)

本資料は、柱材を転用した大型の杭とされている。同定用に依頼された資料はごくわずかであったため、その全体像は明確でないが、外部（樹皮側と思われる）は瘤状となっており、かなり劣化が進み、細胞組織も破壊している状態であったが、内部にやや劣化の少ない部分が存在していた。

木口面（写真番号 2-1、2）

写真はいずれも上側が樹皮側、下側が髄側を示している。いずれの写真も、年輪界に沿って大道管が１列に並んでいる環孔材であることが示されている。また、孔圏外の道管径は極端に小さくなり、多数が集合して、円状もしくは接線状などの集合管孔が形成されている。孔圏部の個々の道管は鞘状の周囲柔細胞に囲まれている。放射組織は、１ないし数列のものがほぼ均等に並んでいる。

まさ目面（写真番号 2-3、4）

いずれの写真にも、大道管が一本見られるが、その周囲を軸方向柔細胞のストランドが囲んでいる状態が示されている。道管は単せん孔であることが示されている。放射組織は概ね平伏細胞で上下の縁辺に方形細胞が見られる異性放射組織を示している。その他の組織の大部分は、木繊維で占められているが、小道管の周辺のところどころに柔細胞ストランドが見られる。

板目面（写真番号 2-5）

孔圏外の切片であるため、大道管は見られないが柔細胞ストランドが見られている。他の大部分の細胞は木繊維であることが示されている。放射組織は、大部分が４～６細胞幅のほぼ同じような紡錘状の放射組織が顕著で、各々の放射組織とも上下にやや大きな細胞が含まれている。そのほか、１、２列幅の放射組織が点在しているのが見られる。外周部は、瘤状となっており、異形細胞が形成されている（写真番号 2-6）。特に、放射組織の形状に注目すると、紡錘形というより円形となっており、杢が形成されていることが見られる。

以上の結果から、本樹種はケヤキ（*Zelkova serrata* Makino）と鑑定される。また、杢が形成されていたことから、根の部分もしくは枝の部分が含まれていたことが推定される。

資料番号 №.３（遺物番号 87）

木製斧未製品とされるものであるが、依頼された資料の劣化が激しく、しかも形状が極めて小さいため、切片の作成が極めて困難であった。特に、幅の狭いまさ目面の切片作成が困難であった。また、樹皮が同封されていた。

木口面（写真番号 3-1）

厚さ２㎜若という小さな資料のため、資料の作成が困難であったが、大部分が仮道管からなり、道管を有さないことから針葉樹であることが明らかである。また、年輪界は極めてゆるやかで、早材部から晩材部への移行が緩やかであることが示されている。放射組織はすべて放射組織となっており、軸方向柔細胞は存在しない。

まさ目面（写真番号 3-2）

資料の形状が小さく、劣化も激しいため、切片も作成が極めて困難であった。そのため、切片の状態も悪いが、仮道管に多くの有縁壁孔が見られ、その形状は凸レンズ状となっている。また、仮道管壁にらせん肥厚が見られ、２本のらせんが対になる傾向が示されている。放射組織は放射柔細胞のみからなることが示されている。分野壁孔はヒノキ型であるが、切片の状態は悪いため、１分野内の数は明確でない。

板目面（写真番号 3-3）

仮道管の放射壁に有縁壁孔の断面が多数見られる。また、らせん肥厚が著しい。放射組織は単列であることが示されている。

以上の結果ならびに樹皮の状態から、本樹種はカヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）と鑑定される。

資料番号 №.４（遺物番号 91）

大型杭と記載されているが、依頼された資料は極めて僅か（厚さ３㎜，半径７～８㎜）のため、完全１年輪が含まれていない。すなわち、本資料には、晩材部が含まれておらず、早、晩材の移行状況等は不明である。

木口面（写真番号 4-1）

資料に晩材が存在しないため、年輪の移行は不明であるが、晩材幅は狭いと思われる。組織の状態は、僅かな放射組織以外はすべて仮道管からなっており、針葉樹であることが表されている。

まさ目面（写真番号 4-2）

早材部の仮道管を示しているが、壁面に大型の有縁壁孔が多数見られる。また、一本の放射組織が示されるが、放射組織はすべて放射柔細胞からなり、分野壁孔は一分野２個で形状は、ヒノキ型を示している。

板目面（写真番号 4-3）

早材部の板目切片であるため、仮道管の接線壁に有縁壁孔の横断面が多数見られる。放射組織はすべて単列で１～５細胞高のものが見られるが、樹脂細胞や樹脂道は見られない。

以上の結果から、本樹種はヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* Endl.）と鑑定される。ただし、ヒノキの特徴である樹脂細胞は見られない。これは、本資料寸法が小さなため、晩材部が含まれていない。したがって、晩材部に存在する樹脂細胞が出現しなかったものと思われる。

資料番号 №.５（遺物番号 94）

杭と記載されるが、その形状や寸法は不明である。ただし、依頼された資料は極めて少量であった。

木口面（写真番号 5-1、2）

年輪は明確で、早材部にやや大きな道管の管孔が密集し、晩材部では、道管径は小さくなり、その数も疎となる、やや環孔的散孔材を示している。また、管孔の大きさは、比較的小さい。管孔は単独もしくは半径方向に複合したものが存在している。放射組織は明瞭ではない。接線方向に連なった柔細胞が点在しているが、他の多くの細胞は木繊維を示している。

まさ目面（写真番号 5-3、4）

道管のせん孔は階段状を示している。また、軸方向柔細胞が点在している。放射組織は、平伏、方形あるいは直立細胞からなる異性放射組織を示している。

板目面（写真番号 5-5、6）

写真番号5-5の中央部に２個複合した道管が見られ、せん孔が階段状であることを示している。この場合の階段せん孔のbarの数は８、９個であることが示されている。放射組織は異性で、１～３列を示し、多列部と単列部が連結しているものが見られる。

以上の結果から、本樹種はエゴノキ（*Styrax japoica* Sieb. et Zucc.）と鑑定できる。

資料番号 №.６（遺物番号 96）

本資料は平板材と記載されているが、劣化が激しく、切片作成は極めて困難であった。特に、木口面の切片の作成は困難であった。

木口面（写真番号 6-1、2）

年輪界に沿って大型の道管がやや火炎状に幅広く並び、孔圏を形成する環孔材であることが示されいる。孔圏外の道管は急激に小形になり、集合した状態で存在することが示されている。また孔圏内の道管にチロースが認められる。孔圏部の道管の周りには仮道管、柔細胞が見られ、木繊維はほとんど存在していない。放射組織は単列で多数走向している。

まさ目面（写真番号 6-3、4）

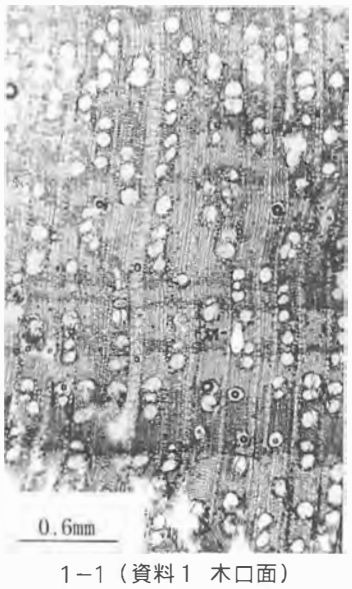
写真番号 6-3の中央部に単せん孔を有する直径の大きな道管とそれを取りまいて、多くの有縁壁孔を有する周囲仮道管が見られる。また、それらの仮道管に混在して柔細胞が見られる。小道管は単せん孔

を示している。他の大部分は木繊維であるが、ところどころに柔細胞ストランドが見られる。放射組織はすべて平伏細胞からなる同性放射組織であることが示されている。

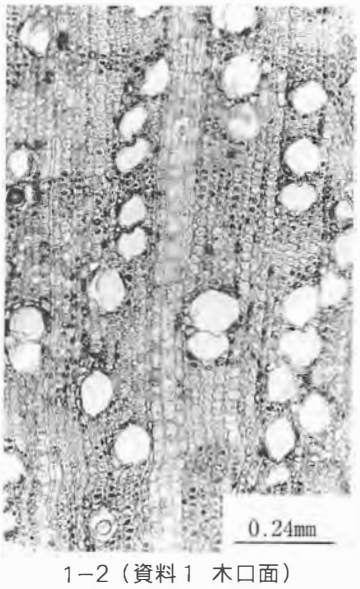
板目面（写真番号 6-5）

右に大道管が見られ、単せん孔であることが示され、道管内腔にチロースの存在が見られる。左側に小道管が見られ、大部分は単せん孔であるが、一部に階段せん孔が見られる。その他の軸方向要素は大部分が木繊維であるが、ところどころに柔細胞ストランドが点在している。放射組織はすべて単列を示し、全体にまんべんなく分布している。

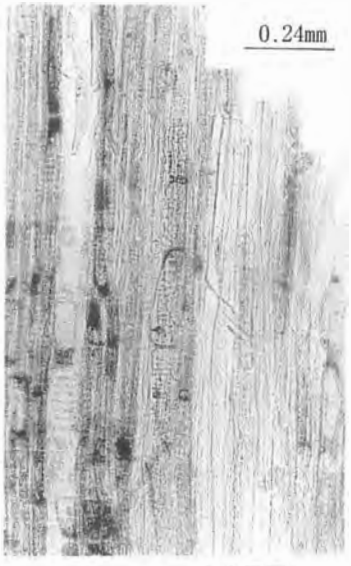
以上の結果から、本樹種はクリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）と鑑定される。



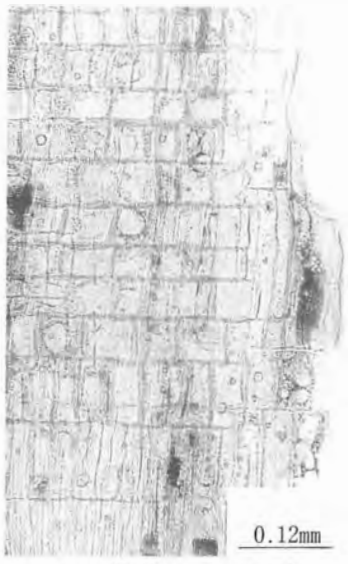
1−1（資料1　木口面）



1−2（資料1　木口面）

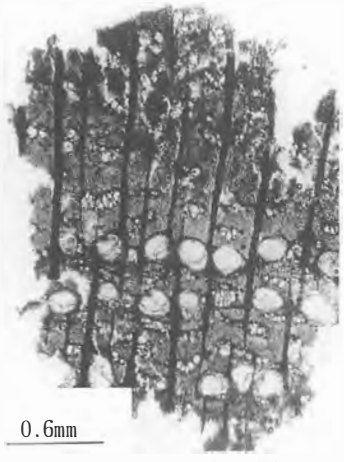


1−3（資料１　まさ目面）



1−4（資料１　まさ目面）

1−5（資料１　板目面）



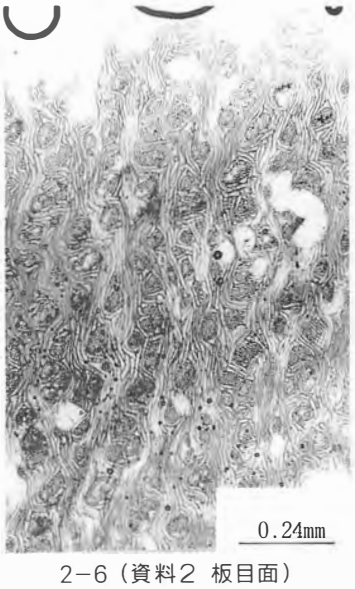
2−1（資料２　木口面）

2−2（資料２　まさ目面）

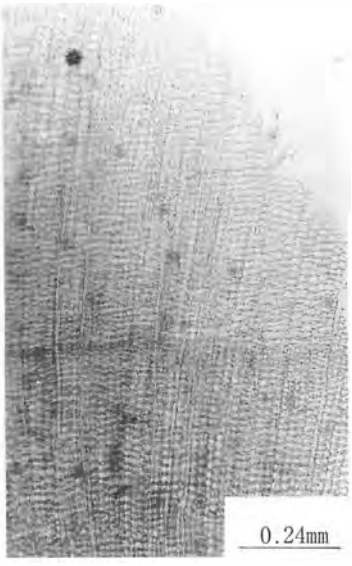
2−3（資料２　まさ目面）

2−4（資料２　まさ目面）

2−5（資料２　板目面）



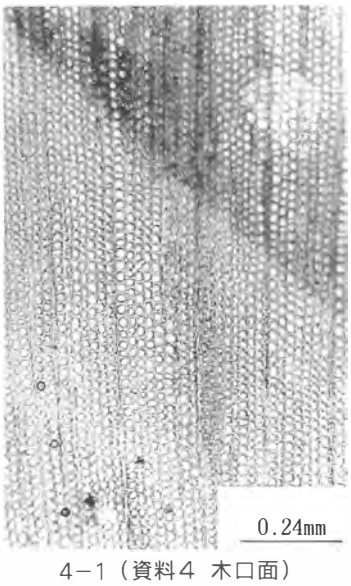
2−6（資料２　板目面）



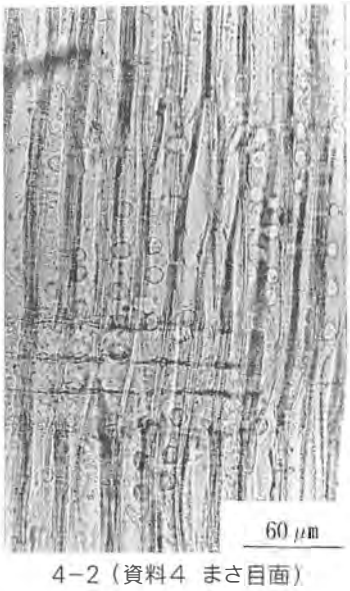
3−1（資料3　木口面）

3−2（資料3　まさ目面）

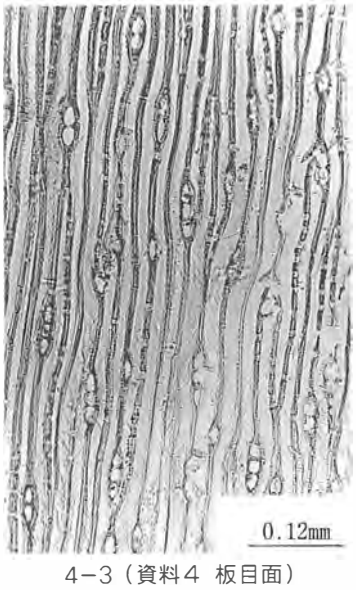
3−3（資料3　板目面）



4−1（資料4　木口面）



4−2（資料4　まさ目面）



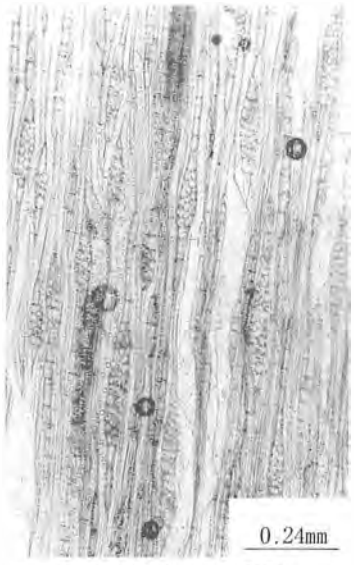
4−3（資料4　板目面）

5−1（資料5　木口面）

5−2（資料5　木口面）

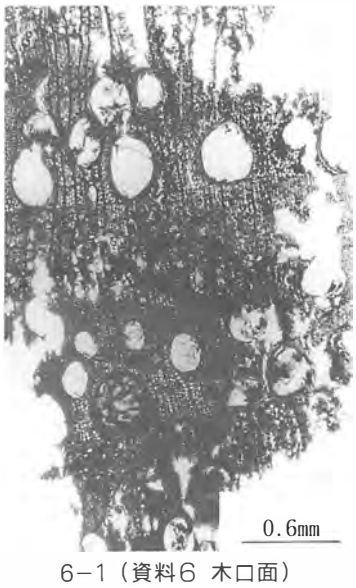
5−3（資料5　まさ目面）

5−4（資料５　まさ面目）

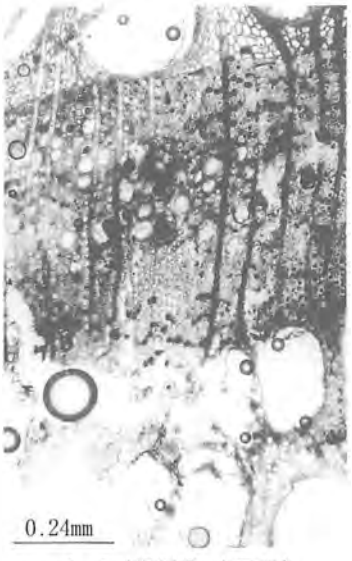


5−5（資料５　板目面）

5−6（資料５　板目面）



6−1（資料６　木口面）

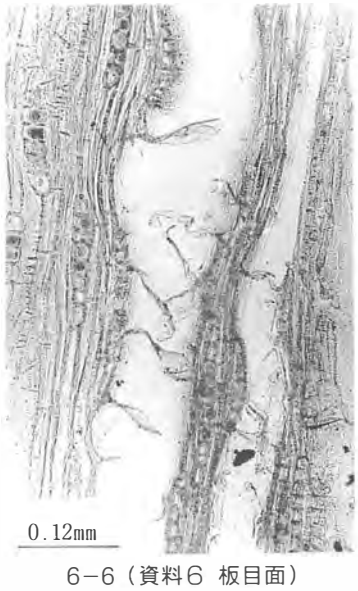


6−2（資料６　木口面）

6−3（資料６　まさ目面）

6−4（資料６　まさ目面）

6−5（資料６　板目面）



6−6（資料６　板目面）

西片町遺跡出土種子の同定

大阪市立大学名誉教授　　粉川　昭平

八代市西片町字小路口及び餅田地内の西片町遺跡から出土した果実・種子類２２点を同定した。これらは硼酸水中に保存されており、非常に良好な状態であった。

A区下層の弥生時代後期の木質遺体や木製品を多く含む層からは、次の１４点を同定した。

No.1－－－－－－オニグルミ（１個）
No.2－－－－－－イチイガシ（１個）
No.3－－－－－－マツ属の球果（１個）
　　表面がすりきれている。
No.4－－－－－－ムクロジの完全な果実（１個）
No.5－－－－－－ムクロジの完全な種子（１個）
No.6－－－－－－イチイガシ（１個）
No.7－－－－－－イチイガシ（１個）
No.8－－－－－－イチイガシ？（１個）
　　未熟で上下に圧縮される。
No.9－－－－－－イチイガシ？（１個）
　　未熟で前後に圧縮される。
No.10－－－－－－エゴノキ（１個）
No.11－－－－－－エゴノキ（１個）
No.12－－－－－－エゴノキ（１個）
No.13－－－－－－クスノキ（１個）
No.14－－－－－－クスノキ（１個）

C区最下層では、弥生時代後期の水路に関すると思われる杭列が確認されているが、次の８点を同定した。

No.15－－－－－－エゴノキ（１個）
No.16－－－－－－イチイガシ（１個）
No.17－－－－－－イチイガシ？（１個）
　　先端が欠失している。
No.18－－－－－－ムクロジの完全な種子（１個）
No.19－－－－－－イチイガシ？（１個）
　　先端が欠失している。
No.20－－－－－－モモ（１個）
No.21－－－－－－オニグルミ（１個）
No.22－－－－－－モモ（１個）

大体において、九州の弥生時代に普通の種である。次のようなことが指摘できる。

オニグルミは、No.1とNo.21の２個で、No.1は長さが3.1cm、No.21は3.4cmとかなり大形で、九州の弥生時代のものとしては意外な感がある。

モモは、No.20とNo.22の２個で、No.20は、長さ・巾・厚さが、2.7×2.1×1.6cm。No.22は3.1×1.9×1.8cmで、これも大形で立派なものである。

イチイガシも大きい立派なものが多い。食用にしたと思われるオニグルミ・モモ・イチイガシの三つが、ともに大きく立派であることは選別の結果であろうか？

エゴノキ・ムクロジなどは流路の堤に成育していた河辺林の要素であろう。マツ属の球果だけは非常にすりきれており、遠方から流れてきたであろうことを物語っている。

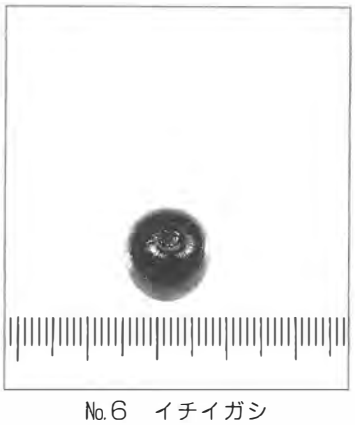
No.１　オニグルミ

No.２　イチイガシ

No.３　マツ属の球果

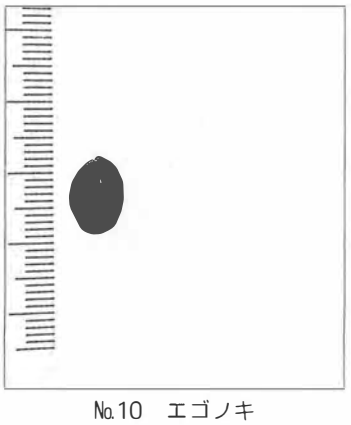
No.４　ムクロジの果実

No.５　ムクロジの種子



No.６　イチイガシ

No.７　イチイガシ



No.10　エゴノキ

No.11　エゴノキ

No.12　エゴノキ

No.13　クスノキ

No.14　クスノキ

No.15　エゴノキ

No.16　イチイガシ

No.18　ムクロジの種子

No.20　モモ

No.21　オニグルミ

No.22　モモ

第４章　考　察

１　遺跡の範囲

本遺跡の周辺部には、第１章にも記したように弥生時代中期から後期にかけてのいくつかの遺跡が確認されている。特に球磨川南岸の平野部には、弥生後期に環濠を巡らし、多量の木製品が出土した有力な集落遺跡である下堀切遺跡が確認されている。一方、球磨川北岸においても立地条件がほぼ同様であることからして、現在は点として確認されている以上に、かなりの規模の集落の存在が予想される。

また古墳時代においては、本遺跡の周辺部にも多数の古墳群が形成されていることから、この古墳を支える集落についてもその存在が予想された。

今回調査した３地区を相互に検討し、弥生時代から古墳時代にかけての旧地形の復原作業を行った。その結果水準等から、想定される集落の中心位置は、調査区南側へ約300m程離れた現況の「八代臨港線付近」に位置していたと考えられる。

その中心箇所の水準は、現況よりかなり高く、また周辺には多くの微高地が形成され、その微高地上に住居等が点在していた姿が想像される。

試掘調査時に「遺跡範囲が東西の２箇所に分かれている」と判断されたのは、微高地上に住居跡等が立地していたためであろう。弥生時代、古墳時代双方ともに、この立地を利用したものと考える。

２　遺跡出土の土器とその時代

調査区からは弥生時代後期中頃、古墳時代前期中頃・中期前半の資料がまとまって出土している。これらは本来の遺構からの出土ではなく、その多くは二次的に堆積した層中からの出土である。資料に対しての遺構や層同士の比較検討はこれらの理由からして行えなかった。

西片町Ⅰ期：弥生時代後期前葉～中頃

甕としては、弥生時代中期以来の伝統的な器形である脚台付甕26･29～31があげられる。

甕は２形式にわけることができる。脚台付甕Ａ(31)は脚台高が低く、脚のくびれの締まりも弱い。また内面の指圧での強い調整が特徴である。26は体部の最大径位置が上位にあり、膨らみが弱い。この資料を他地域類例と対比してみると、形式的には白川水系上流域阿蘇盆地では下山西Ⅰ期、狩尾Ⅲ期に相当し、菊池川中流域では津袋Ⅰ期（西久保）に相当する資料で、さらに後期前葉までさかのぼる資料であろう。脚台付甕Ｂ(29)は脚台高が比較的に高くなり、これは後期中頃までで下山西Ⅱ期に相当する。

脚台状況が確認される資料では、いずれも類例資料としては、下堀切遺跡第４層出土及びＣトレンチ出土土器群の脚台付甕が最も本遺跡と地理的には近い出土となる。

壷では37の口縁部に刻み鋸歯文を有する資料、13･43･44･45･46のいわゆる胴部がくの字形に屈曲する算盤玉形の免田式壷胴部片があげられる。櫛描きの状態から、弥生時代後期中頃でまとまる資料であろう。

なお第１章にも記したように近隣の沖片遺跡（西片町辻田）、長田遺跡（長田町石原）からは、野部田式土器の出土が確認されている。本遺跡の資料とほぼ同時期と捉えることができる。

西片町Ⅱ期：古墳時代前期中頃

甕(8･24)では口縁部の形態が、内側へのつまみ上げ、そして内傾化へと進む。さらには胴部の球形化と器壁の厚さが増してくる。

壷では短頸壷、二重口縁壷、小型壷の各種が見られる。

短頸壷では肩部の張りが強く外来系の特徴を有する壷(9)があげられる。

二重口縁壷では２形式にわかれる。35は大型の器形で、体部は上位に弱い肩を有し、胴部は樽形に膨らむ。頸部より屈曲し立ち上がり、反転部で外傾ぎみに直立し、口縁最端部はさらに外反する二重口縁

壷Ａ。頸部より強く屈曲し外傾し、反転部からは外傾気味に直立し、端部は外反する。反転部内面には深い沈線を有する二重口縁壷Ｂ(36)である。この形式は口縁部のくずれが大きい。

小型壷では口縁部が直に立ち上がり、その高さが短い小型壷Ａ(38)と口縁部が高く、口縁部に屈曲と膨らみを有し、二重口縁壷的な要素を残す小型壷Ｂ(1)にわかれる。

高杯では脚裾部の形態でＡ・Ｂの２形式にわかれる。高杯Ａは裾部の広がりが直線的な14･18･19の資料で、高杯Ｂは器形的に裾部の屈曲が強く形式的には古い要素を持つ。さらに高杯Ｂは、脚部が膨らむ高杯ＢⅠ(15･16)と脚部が直線的なＢⅡ(17)の資料にわかれる。

またＢ形式には裾部付け根位置に3ないし4個の穿孔を有するものも含まれる。

本遺跡ではＡ区カーボン集積箇所から高杯ＡＢの２形式の資料が同時に出土している。

これらの資料は、柳田康雄編年では「土師器Ⅱｃ期」に相当する時期と考える。

西片町Ⅲ期：古墳時代中期前半

甕(21)、壷(22)ともに肩部の張りがなく、胴部の膨らみが弱い。

高杯では杯部上半の形態変遷で、杯部中位で大きく外反し、強く屈曲し外傾する高杯Ｃ(47･48)と屈曲後に内湾する高杯Ｄ(49)の資料が出土する。

古墳時代の須恵器は1点のみ確認される。54は須恵器杯身部で立ち上がりが長くやや内傾し、口唇部内側には緩やかな段を有する。小田富士雄編年では「Ⅱ期」に相当する資料となり、土師器の時期とほぼ合致する。

西片町Ⅳ期：平安時代初頭

須恵器高台付杯(2)は１点のみの出土であるが、この形式は近隣する興善寺馬場、興善寺志水の各遺跡等から多く出土している生活資料である。

また西片町の沖片遺跡からは、須恵器の円面硯も出土しており、『延喜式』『和名抄』には駅家跡の一つ片野駅の存在が記されており、比定地も片町周辺部に想定されている。また洗切遺跡からは奈良三彩片や墨書土器が出土しており、この近隣箇所に平安時代初頭の集落等の存在が予想される。

３　遺跡の各期の様子

西片町Ⅰ期：弥生時代後期前半～中頃

集落縁辺部には集落の境界域として、また実用的な生活施設としての水路が構築されていた。確認されたものは１号杭列の１本のみではあるが、その方向は東西を基軸として、細部に至っては微高地地形に左右されていたと考えられる。

弥生時代後期には南側に集落の存在が予想され、集落全体では地形にあわせ、人工施設である多数の水路が周囲には設けられていたと想定される。

西片町Ⅱ期：洪水期

弥生時代後期以降に、資料上からは一時集落は断絶し、この地に改めて集落が営まれるのは古墳時代前期中頃である。

そしてこの時期に集落を洪水が襲った。当時の球磨川・古麓川等の位置関係からして、河川の洪水域は川の北側方向であり、この地まで及んだと想定される。

本遺跡Ｃ区土層断面にある南から北へ向かっての、強い流れ込んだ状況については、当然のことであるが合致する。流れ込んだ木材には径が50㎝を越え、枝も付いたままの大型木材もＡ区北側、Ｃ区東側から確認されており洪水の勢いを想起させる。

調査区ではＣ区が最も顕著で、このように遺跡の中心部から北側に向かって、洪水の痕跡が見られる。その勢いはかなりの土砂ともに、前時代の遺物類も併せて流れ込み、一気に古墳時代の集落を押し流したことが容易に想定される。

西片町Ⅲ期：洪水後から古墳時代中期前半

Ａ区では洪水の結果、一段下がった微高地の落ち込み状の箇所に、集落の生活用具等とともに多数の大型木材や流木を堆積させた。

この地点では洪水後に、損害を受けた集落の復旧

が時期をあけずに行われたと考えられる。それはA区でカーボン集積箇所が２箇所、層位的に洪水層の上層から確認されたことによる。

２基のカーボン集積箇所は、調査面積が狭小で即断はできないが、竪穴住居に関わるものの可能性が高い。そこでは高坏を転用したふいご羽口や不純物の鉄さいが確認され、当地での小鍛冶の実態が判明した。

また斧柄未製品や多量の両端を加工した用材及び木片の出土は、集落における木製品の生産の様子を伺い知ることができる。隣接地点には集落におけ工房的な存在も想定される。

この集落は古墳時代中期前半頃まで、継続して営まれる。

４　遺物の特性

本遺跡は低湿地に位置する遺跡であるため植物遺体及び木製品等の残存状態は良好であった。

出土した木製品の総量は約100点に及ぶ。県事業としては初の八代地区での低湿地に位置する調査であるため、本来の木製品と将来のサンプル資料として木材及び流木類の一部も採取した。

木製品の樹種同定の結果で、ヤマモモ、ケヤキ、カヤ、ヒノキ、エゴノキ、クリなどの常緑広葉樹を製品の用材として選択していたことが判明した。

製品の使途に関わる材木の選定については、多様な木材が選択された。

当時の環境復原では、現地での積極的な各種分析が諸般の事情で実施できなかったが、サンプル資料を採取しての種子同定が行えた。

種子鑑定では食用にしたと考えられるオニグルミ、モモ、イチイガシが確認され、また当時の植生としてエゴノキ、ムクロジなど流路の堤に生育していた河辺林の復原が行えた。

古墳時代の生活の様子を復原できる良好な資料の提供が自然科学の分野から行えた。

［引用・参考文献］

1　松本健朗　１９７８　『高橋南貝塚』
熊本県文化財調査報告第２８集

2　高木政文　１９７９　「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第６集

3　佐藤伸二・中田好則　１９８２『洗切遺跡調査報告書』八代市洗切遺跡調査団

4　種浦　修　１９８５　『村中角遺跡』
諸富町文化財調査報告書第２集

5　高谷和生　１９８７　『下山西遺跡』
熊本県文化財調査報告第８８集

6　吉永　明　１９８８　『下堀切遺跡Ⅰ』
八代市文化財調査報告書第３集

7　吉永　明　１９８９　『下堀切遺跡Ⅱ』
八代市文化財調査報告書第４集

8　柳田康雄　１９９１　「土師器の研究 九州」
雄山閣『古墳時代の研究　第６巻』

9　蓑田田鶴男　１９９２　『八代市史』
八代市教育委員会

10　西住欽一朗　１９９２　『うてな遺跡』
熊本県文化財調査報告第１２１集

11　大橋隆司　１９９３　『生立ヶ里遺跡Ⅱ』
牛津町文化財調査報告書第２集

12　木崎康弘　１９９３　『狩尾遺跡群』
熊本県文化財調査報告第１３１集

13　高木正文　１９９３　『八代大塚古墳』
熊本県文化財調査報告第１３６集

14　文化庁監修　１９９６
日本の美術　『古代の農具』

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしかたまちいせき
書名	西片町遺跡
副書名	新熊本県八代総合庁舎建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第１５３集
編集者名	高谷　和生（たかたに　かずお）
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒８６２　熊本市水前寺６丁目８番１号
発行年月日	西暦　１９９６年3月３１日

所収遺跡名	所　在　地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市　町　村	遺跡番号			
西片町遺跡	八代市西片町大字小路及び餅田	４３２０２		199506 ～ 199509	1,000㎡	建物建設

主な時代	種　別	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
弥生時代後期	集落	住居跡	弥生土器、木製品	
古墳時代前期 〃　中期	集落	杭列	土師器、斧柄未製品、鋤、杭、板材、鉄滓	球磨川下流域では、２例目の低湿地に位置する遺跡の調査例

図　　版

図版１

Ａ区掘り下げ
（全景）

遺物集中箇所
完掘状況

集中箇所
遺物出土状況

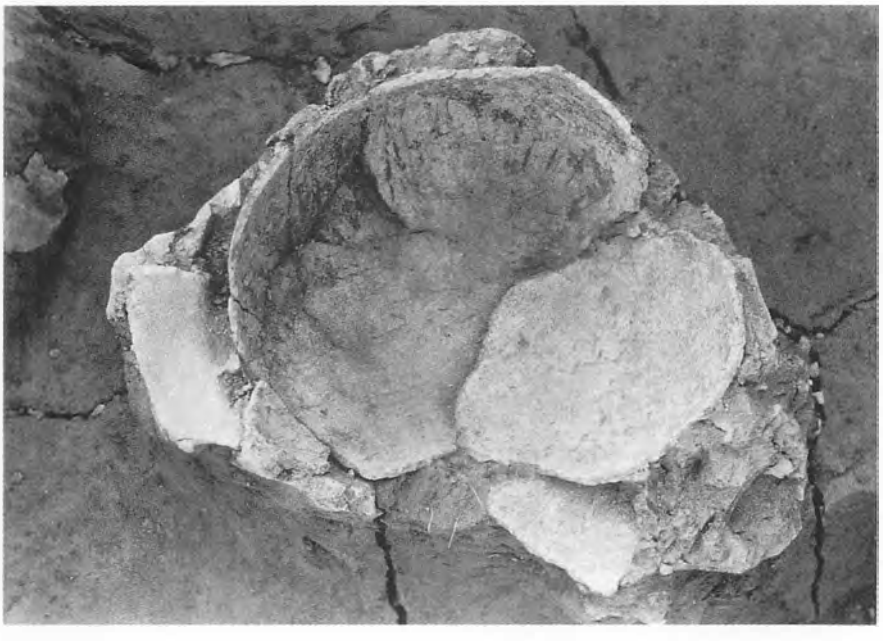
Ａ区南側
遺物出土状況

集中箇所
遺物拡大

集中箇所
遺物拡大

図版３

集中箇所
遺物拡大



集中箇所
遺物検出状況
（甕）

遺物検出状況
（高杯、カーボン、
鉄滓）

A区下層
木製品類出土状況

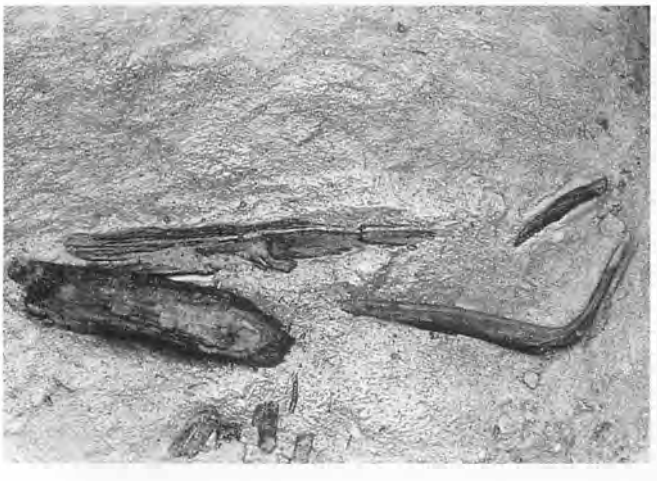
A区下層
木製品類出土状況

A区南側
木製品出土状況

図版５

A区下層
木製品検出状況

A区下層
木製品検出状況



A区下層
木製品検出状況

A区南側
木片出土状況

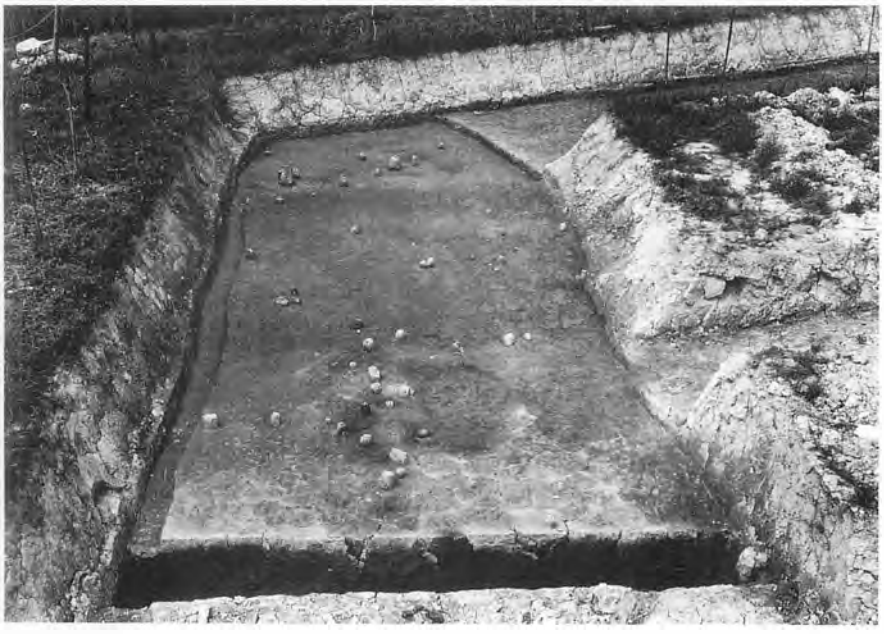
A区遺物状況

B区遺物検出状況

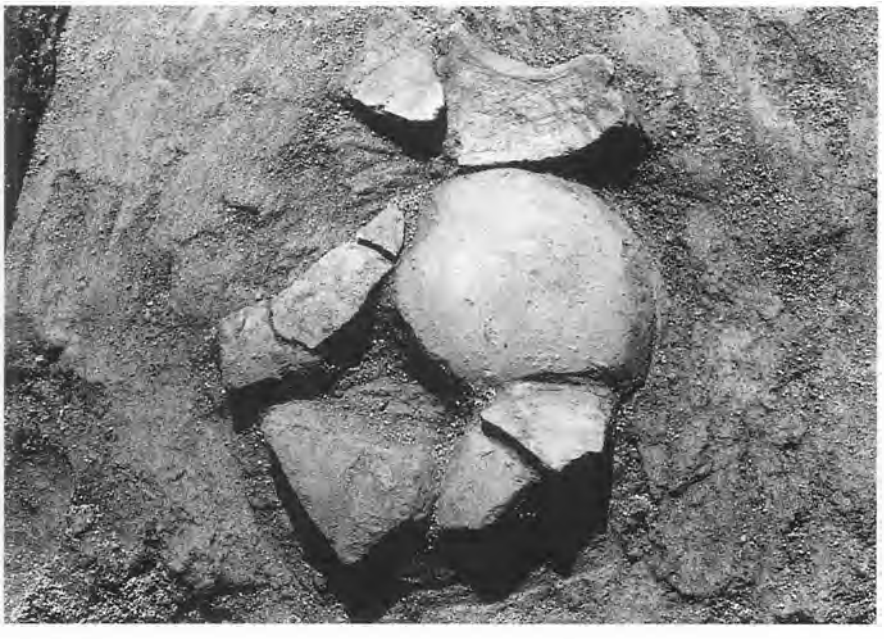
深掘り部
拡大状況

B区木製品
出土状況

図版 7



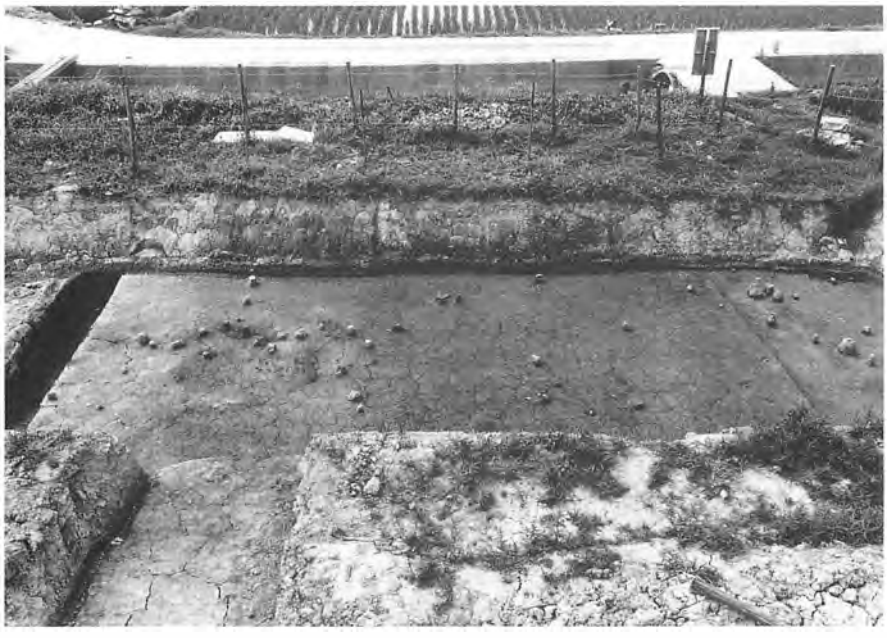
C区(南側)
遺物出土状況



C区遺物出土状況
(壺)

C区遺物出土状況
(甕)

C区遺物出土状況
（東より）



C区東側
遺物出土状況
（西より）

C区遺物出土状況

図版９

C区南側遺物
出土状況

C区南側遺物
出土状況

C区南側遺物
出土状況

1号杭列状況

1号杭列状況
（拡大）

1号杭列状況
（拡大）

図版11

C区内木製品出土状況
（木製柄）

C区内木製品出土状況

C区内木製品出土状況
（木製斧柄）

C区内遺物出土状況
（免田式土器）

C区内遺物出土状況

C区内遺物出土状況

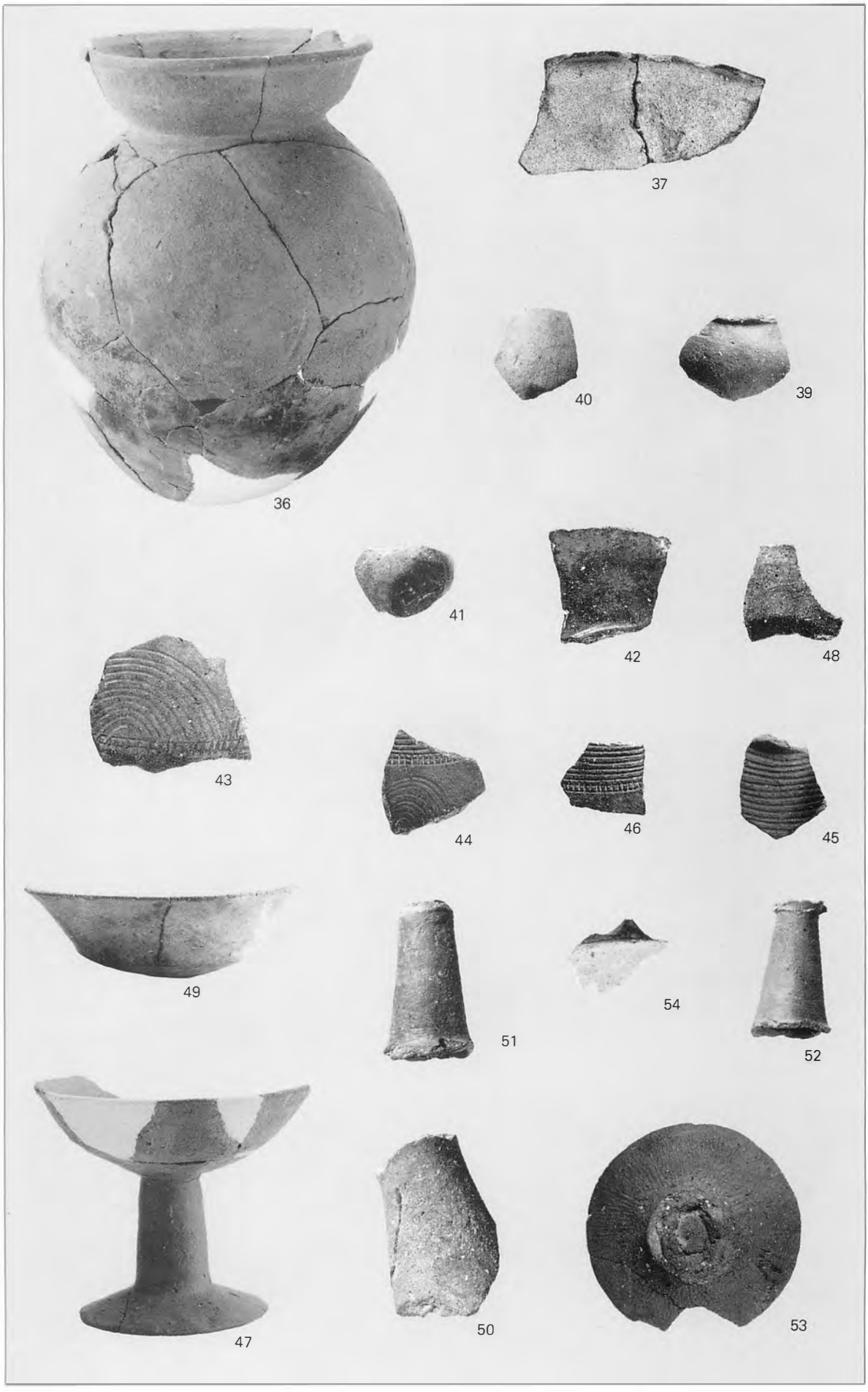
C区内木製品出土状況

C区内遺物出土状況
（免田式土器）

図版13　A区内出土土器

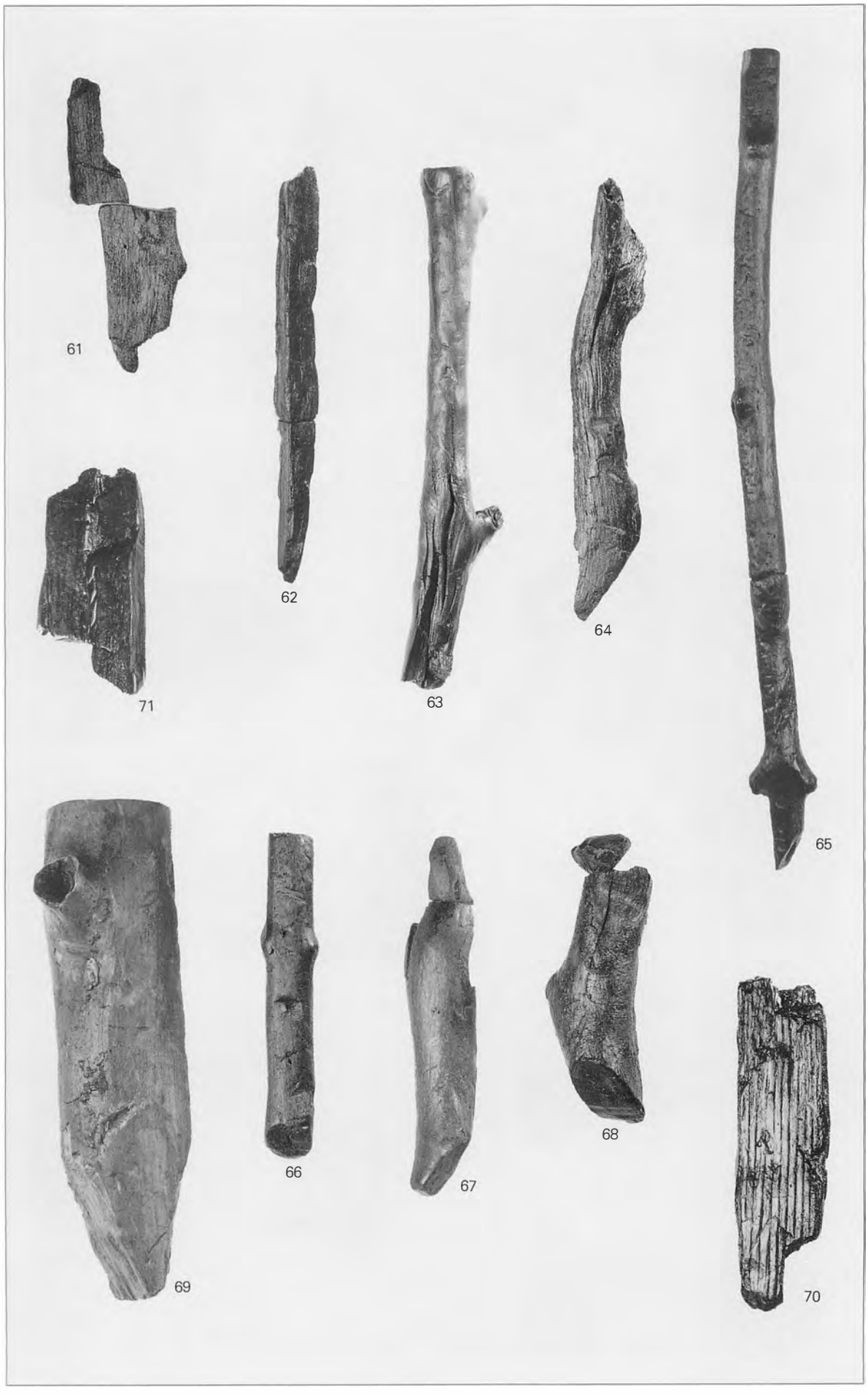
図版14 C区内出土土器（その１）

図版15　C区内出土土器（その2）

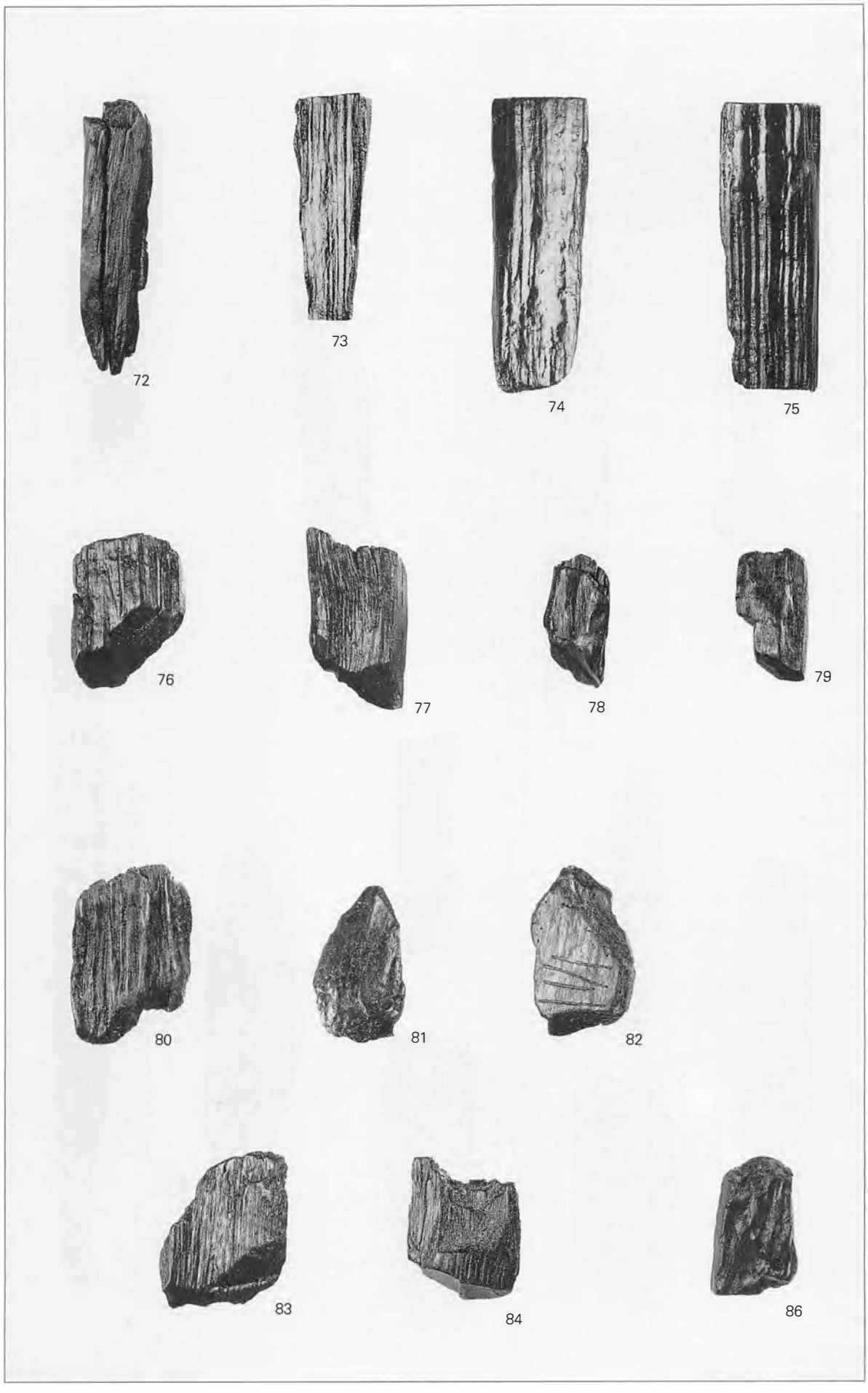


図版16　各区出土土器・石器（上段試掘、中下段B区）

図版17　A区内出土木製品

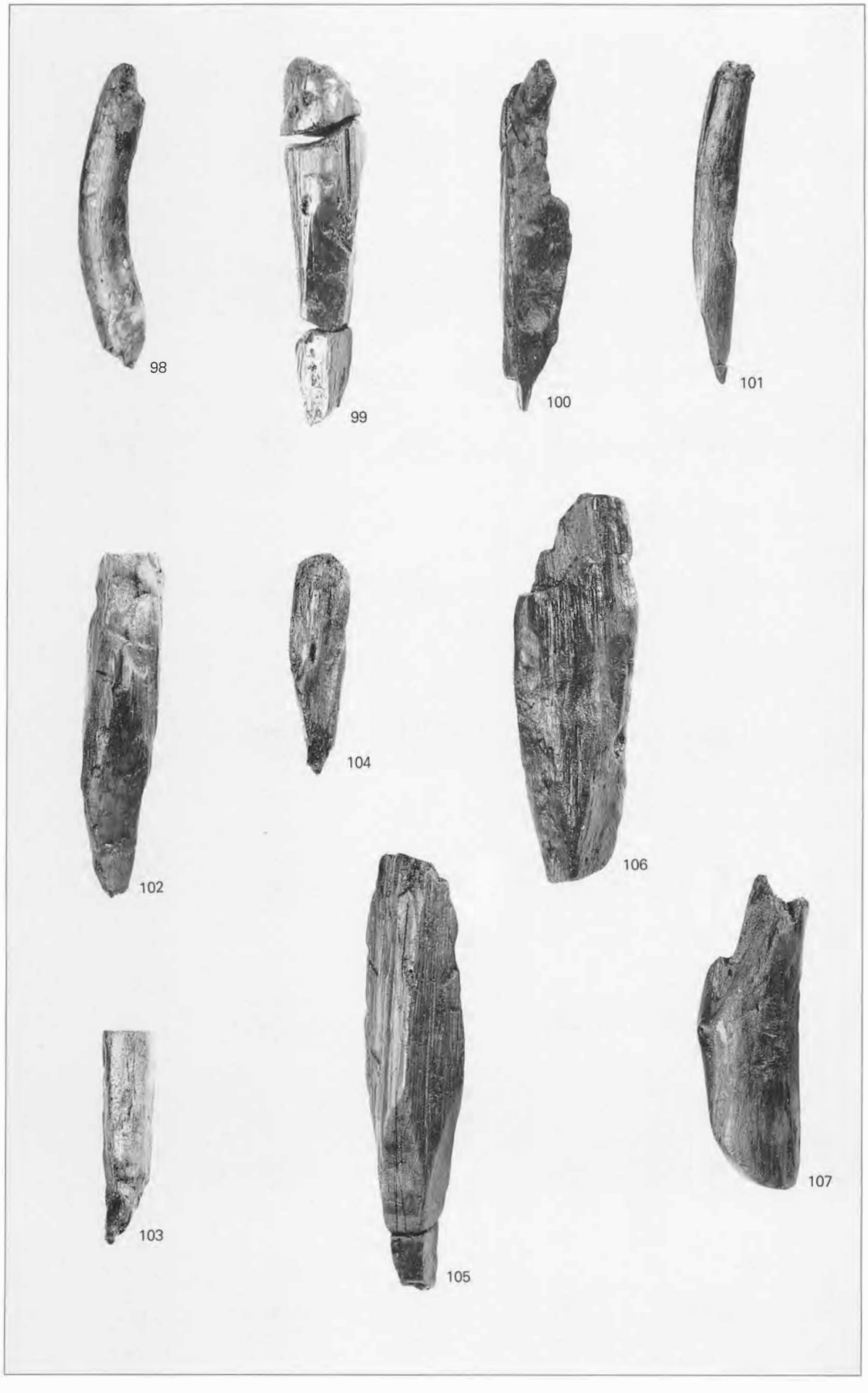


図版18　A区、B区内（86のみ）出土木製品



図版19　C区内　出土木製品（その１）

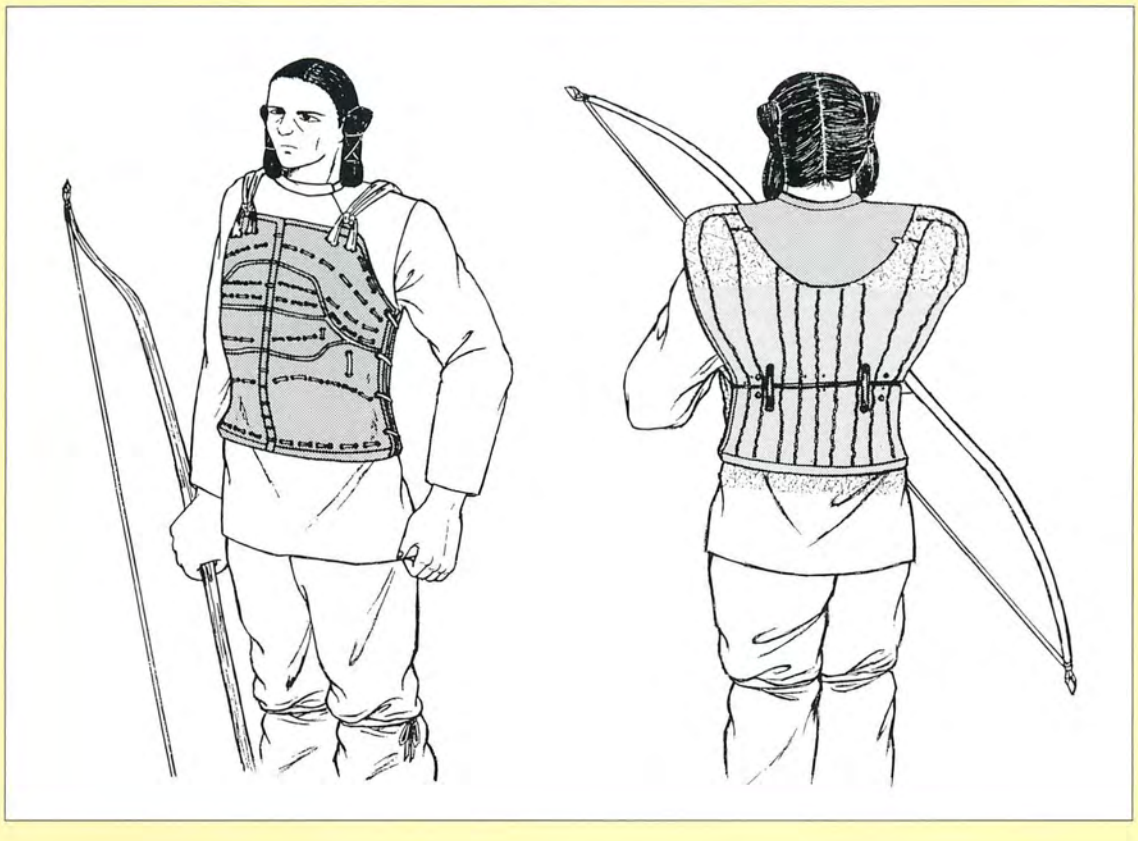
図版20　C区内　出土木製品（その2）



付　編

柳町遺跡出土の木製短甲

－熊本県玉名市河崎字柳町所在の柳町遺跡より
出土の１号・２号木製短甲資料紹介－



１９９６．３

熊本県教育委員会

例　　言

1　本付編は、熊本県教育委員会が建設省九州地方建設局熊本工事事務所の委託を受けて実施した、熊本県玉名市河崎字柳町に所在する柳町遺跡の調査Ⅰ区より出土した１号木製短甲及び調査Ⅲ区より出土した２号木製短甲の資料紹介である。

2　柳町遺跡の調査Ⅰ区は平成６年８月から平成７年３月まで熊本県教育庁文化課が、調査Ⅱ・Ⅲ区は平成７年７月から平成８年３月まで熊本県教育庁文化課と玉名市教育委員会社会教育課が合同で発掘調査を実施した。

3　１号木製短甲の樹種同定については大迫靖雄専門調査員に依頼し玉稿を頂いた。記して感謝の意を表したい。なお２号木製短甲は下記業者へ委託し樹種同定を行った。

柳町遺跡から出土した１号木製短甲の樹種について

熊本大学教育学部教授　　大迫　靖雄

柳町遺跡出土の２号木製短甲の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

4　遺構、土器の実測ならびに現地の写真撮影は、１号木製短甲関連を畠田壮仁・池本利直・高谷和生が、２号木製短甲関連は田中康雄・江原浩司・野口康雄が行った。

5　１号木製短甲の実測は田中・高谷が、２号木製短甲の実測を帆足俊文が行った。
遺構、遺物の製図は戸田紀美子・赤坂　希が行った。また遺物の写真撮影は徳永琢磨・高谷が行った。

6　本書の執筆者は本文目次の各項目ごとに執筆者名を記した。編集は玉名市教育委員会社会教育課の資料提供を得て、熊本県教育庁文化課で行い高谷和生が担当した。

凡　　例

1　調査Ⅰ～Ⅲ区にわたる詳細な遺構配置図が未完成であるため、遺構配置図は省いた。
各井戸の実測図は20分の１で実測し、木器、土器と遺物類を分けて掲載した。

2　井戸内の共伴した遺物については、掲載縮尺を３分の２とした。

3　出土遺物は出土順に号数を先に示し、想定部位に添って部材名称を附記した。その縮尺では１号木製短甲肩部材・後胴部は２分の１、棒状留具は３分の２とし、２号木製短甲は２分の１とした。

本文目次

1　遺跡の位置と環境 …… （高谷和生）… 1

2　調査の経緯 …… （高谷）… 4

3　遺跡の概要 …… （高谷）… 4

4　木製短甲

(1)出土状況 …… （高谷）… 6

①2号井戸

②6号井戸

(2)木製短甲 …… （高谷）… 8

①1号木製短甲 …… （高谷）… 8

肩部部材

後胴部材

棒状留具

②2号木製短甲 …… （高谷）…10

5　資料分析

(1)柳町遺跡から出土した1号木製短甲の樹種について …… （大迫　靖雄）…18

(2)柳町遺跡出土の2号木製短甲の樹種同定 …… （パリノ・サーヴェイ株式会社）…20

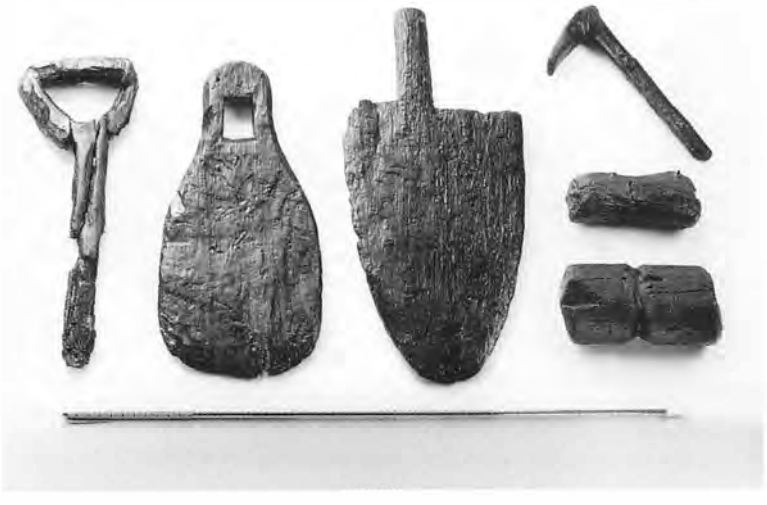
6　まとめ …… （高谷）…22

①古墳時代前期の柳町遺跡の様子

②1号木製短甲

③2号木製短甲

④遺跡のまとめ



挿図目次

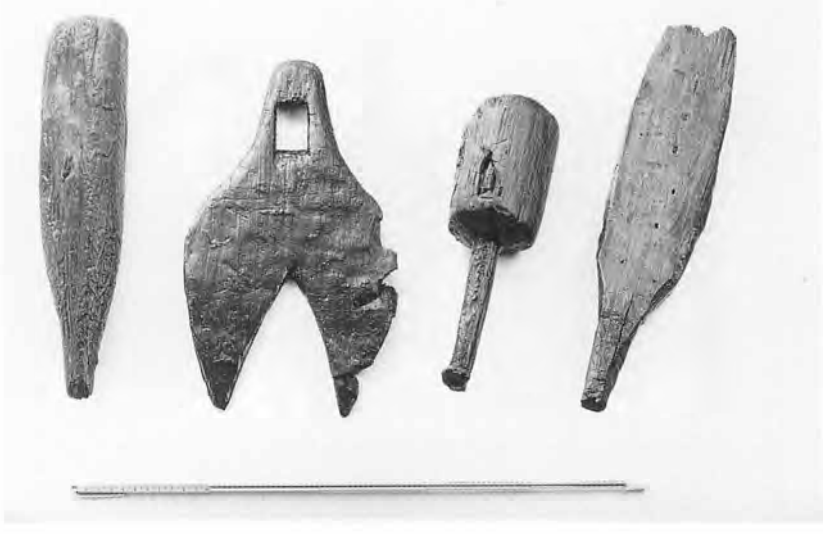
第１図　柳町遺跡の位置図…… 1
第２図　周辺主要遺跡分布図：古墳時代…… 2
第３図　２号井戸内土器類出土状況実測図…… 5
第４図　２号井戸内最下層出土土器実測図…… 6
第５図　２号井戸内木製品出土状況実測図
（上層）…… 6
第６図　２号井戸内木製品出土状況実測図
（中下層）…… 7
第７図　６号井戸内２号木製短甲出土状況実測図
…… 8
第８図　１号木製短甲実測図
（その１　肩部）……11･12
第９図　１号木製短甲実測図
（その２　後胴中央部　棒状留具）
……13･14
第10図　２号木製短甲実測図
……15･16
第11図　柳町遺跡出土木製短甲着用想像図
……23
第12図　柳町遺跡出土木製短甲製作手順図
……24

図版目次

図版１　２号井戸内木製短甲出土状況
１号木製短甲　表側
図版２　２号木製短甲　表側
２号木製短甲　拡大
図版３　２号木製短甲　裏側
２号木製短甲　拡大
図版４　２号井戸内木製品出土状況（上層）
図版５　２号井戸内１号木製短甲出土状況
図版６　２号井戸内１号木製短甲出土状況（拡大）
図版７　１号木製短甲（胴部　棒状留具）
１号木製短甲（肩部）
図版８　６号井戸内２号木製短甲検出状況
図版９　６号井戸内２号木製短甲検出状況（拡大）
図版10　２号木製短甲（表側）
図版11　２号木製短甲（裏側）

表目次

第１表　周辺主要遺跡一覧：古墳時代
…… 3
第２表　日本出土木製短甲出土一覧
……26



1　遺跡の位置と環境

玉名平野は熊本県北部に位置し、菊池川下流域に広がった面積49k㎡を有する沖積平野である。この平野では玉名市の市街地を頂点として典型的な三角州を形成し、前縁は干拓地が有明海に向かって広がる。一方平野の東部は金峰山系山麓に限られ、北側は花崗岩山塊からなる小岱山に続く洪積台地と接している。

市街地は北側の花崗岩風化土壌で形成された丘陵地帯、沖積面よりの比高5m程度の低位洪積段丘、弥生海退による海岸線の後退及び河川の働きによって形成された、広大で肥沃な臨海沖積平野とに大きく分けられる。

熊本県玉名市は県北部の人口５万人弱の菊池川下流域を中心とした都市で、面積は9,129,000㎡を有する。小岱山南麓の玉名平野を取り込み、一部は有明海まで達している。

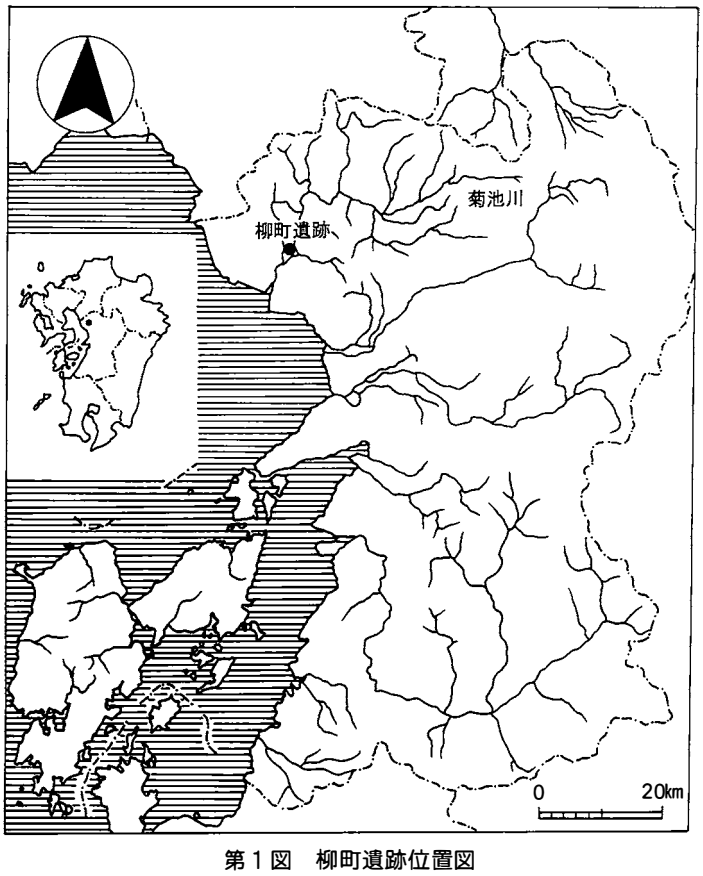
玉名市街中央を貫流して有明海に注ぐ菊池川は、幹線の流路延長61.2km、阿蘇外輪山北西部を源を発し、菊池渓谷をはじめ山間地を流下、中流の菊鹿盆地をへて下流の玉名平野に至り、有明海に注ぐ。

下流域では和仁、内田、江田、木葉、繁根木などの諸支流が合わさり、特に玉名平野中央部の本遺跡近辺の東方で大きく蛇行し、屈曲している。

また26,300haという日本一広大な干潟を持つ有明海は、全国の海岸に分布する干潟の約42%にもおよび、それは東京湾より大きく伊勢湾や陸奥湾に匹敵する大きさの内海である。特に潮の干満の差が日本一大きく、大潮時には近隣港で最大6～7mにも達する。満ちた潮は菊池川に隣接する本遺跡の横を上がり、約12km上流にまで達する。

柳町遺跡は熊本県玉名市大字河崎から大字両迫間字柳町にかけて所在する。確認調査による遺跡の範囲は東西方向が約1,500m、南北方向は未試掘のため不確定であるが約400m、全体では約600,000㎡の範囲に広がる、菊池川右岸の後背低湿地に位置する遺跡である。

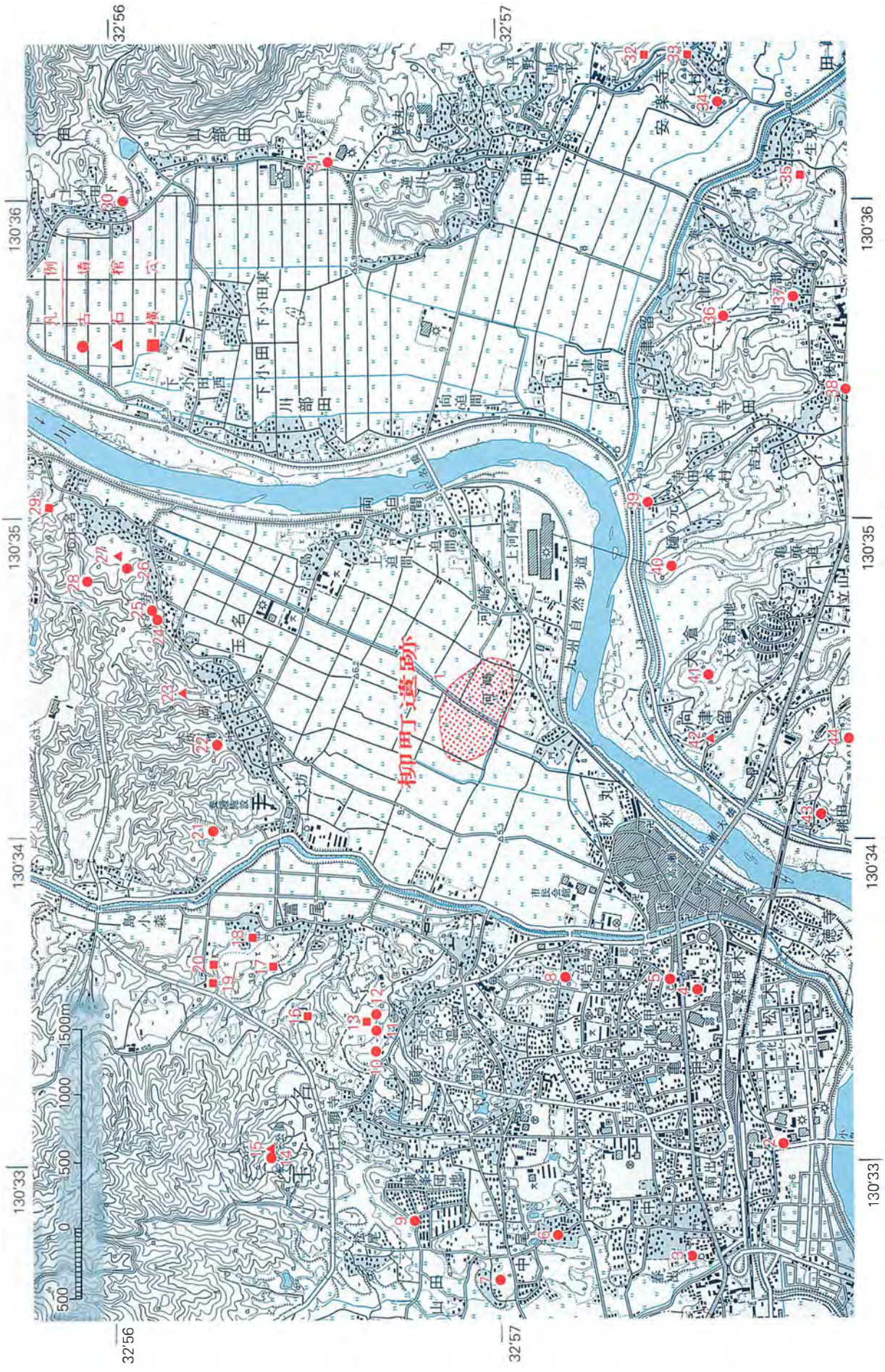
遺跡の北側丘陵部には中期から後期にかけての装飾古墳・横穴が多く分布しており、一部には前期古墳および石棺の出土もみている。本遺跡と時期的に関係する主要な遺跡としては、長大な木棺墓を複数基有する東南大門遺跡からは6km、鉄製横矧板鋲留短甲等が出土した繁根木古墳からは1.5km、菊池川の対岸に位置し柄鏡式前方後円墳である山下古墳からは4.2kmの距離関係である。



第１図　柳町遺跡位置図

これまで確認されていた古墳時代の集落跡は標高5m前後の低位洪積段丘上に多くは位置していた。野部田式土器の標式遺跡である野部田遺跡や同時期の集落跡と考えられる山下遺跡、高岡原遺跡等もこの立地上にある。平野部からの集落遺跡は未確認であった。

従来玉名平野中央部から弥生土器、土師器類が工事に伴ったり、河川の氾濫により数多く出土していたが、詳細な状況は不明であった。これまでは川の後背湿地に位置することから、その多くは洪水等により集落が遺物もろとも流され、川が運んだ堆積土が積み重なり、次の時代には新たな集落を形成したと考えられていた。



第２図　周辺主要遺跡分布図：古墳時代

第１表　周辺主要遺跡一覧：古墳時代

番号	遺跡名	所在地	種別	備考
1	柳町遺跡	河崎・柳町	集落址	玉名駅南、大地南突端、箱式石棺、いま消滅
2	だいの島古墳	玉名(通称だいの島)	古墳	２期並列、出土物なし
3	田島地下式横穴	玉名・田島	地下式横穴	八幡宮裏、前方後円の封土、朝顔形埴輪
4	稲荷山古墳	繁根木・馬場	古墳(方円)	方格規矩文鏡を出す
5	伝左山古墳	〃　〃	古墳(円)	径37mの円墳
6	馬場鉄兜出土地	中尾・馬場	古墳	高台上、封土を失う、墓地内に大石材堆積
7	高岡古墳	山田・高頭	古墳	菅原神社神体とする、箱式石棺か
8	岩崎古墳	岩崎・池田	古墳	独立小山南斜面箱式石棺、祠とする
9	糠峯古墳	山田・糠峯	古墳	大円墳保存良好
10	大塚古墳	立願寺・大塚	古墳	〃
11	小塚古墳	〃　〃	古墳	冷水台頂上船形石棺をもつ、現在なし
12	冷水塚古墳	富尾・冷水	古墳(円)	冷水大地の北17基が不明
13	冷水横穴群	〃　〃	横穴	封土中に船形石棺現在なし、鉄器出土
14	蛇が谷古墳(Ａ)	立願寺・蛇が谷	船形石棺	
15	〃　(Ｂ)	〃	横穴	13基崖下に北面する
16	富尾いたび横穴群	富尾・居柊(いたび)	横穴	富尾天満南西16基、装飾のあるもの６基
17	富尾原横穴群(Ａ)	富尾・原(はる)	横穴	10数基
18	〃　(Ｂ)	〃　〃	横穴	富尾天満宮東裾に10数基、完形が多い
19	富尾浦谷横穴群(Ｂ)	富尾・浦谷	横穴	富尾天満宮北谷２基
20	浦谷横穴群(Ａ)	〃・辻	横穴	玉名山西端部、だ円状の封土
21	西原古墳参考地	玉名・西原	古墳？	横穴２室、三角連続彩色あり
22	大坊古墳	玉名・出口	古墳	妙修寺の墓地内３基、２基保存
23	岡箱式石棺群	玉名・上原	箱式石棺群	横穴単式、円文線刻
24	永安寺西古墳	玉名(通称永安寺)	古墳	横穴複式、円、三角舟、馬を描く
25	永安寺東古墳	〃	古墳	横穴式墳、船形石棺、箱式石棺
26	馬出古墳	玉名・馬出	古墳(円)	27mの山上にあった。現在地へ復元
27	小路古墳	玉名・小路	箱式石棺	玉名大神宮裏山にあり、封土、周溝あり
28	絵下経塚古墳	玉名・絵下	古墳	風化、２基
29	元玉名横穴群	玉名・実極田	横穴	前方後円形３基、並列、舟形石棺
30	徳丸古墳群	上小田・下徳丸　榎町	古墳(方円)	古式前方後円墳、前後各１、船形箱
31	山下古墳	玉名・山下	古墳(方円)	梅林小学校裏手谷合い４基、風化する
32	浦方染山横穴群	安楽寺・(通称浦方)	横穴	稲佐への県道東入り、数基
33	簑田横穴群	〃・蓑田	横穴	
34	随月古墳	〃・随月	古墳	国道208号線沿い、３基と造りかけ１基
35	田崎横穴群	田崎・楢山	横穴	高台北端に位置、径25mの封土遺存
36	上津留古墳	津留・小部田	古墳(円)	「塚さん」という、山伏塚か
37	世間部塚古墳	寺田・世間部(せかべ)	古墳	部落西南畑中、封土あり、内部不明
38	ナカント塚古墳	寺田・吉丸	古墳	舌状台地北端、封土遺存、内部不明
39	寺田古墳群	寺田・宇土	古墳	群中の主墳、完形遺存、内部不明
40	城ヶ辻古墳群	寺田・城ヶ辻	古墳(円)	円墳、保存度よい
41	飯塚古墳	向津留・飯塚	古墳(円)	大型船形石棺露出、棺蓋不明
42	松林寺山古墳	向津留・下	船形石棺	部落南墓地伝箱式石棺出土
43	桃田古墳	大倉・桃田原	古墳	台地頂上、円墳、内部不明、円墳の周辺箱式
44	高田古墳	大倉・高田	古墳	石棺出土

山裾が相迫って形成する三角州は玉杵名湾のあとであり、中央部には市内第一の食料源である玉名平野が広がり、奈良時期の条里遺構が明確に残され本遺跡の上層を覆っている。

当地では古くから菊池川の水運の利用が盛んであり、本遺跡の2㎞南には、中世期に海外交易等に利用された高瀬河港が菊池川に面し造成された。遠くは中国大陸との直接の交易で栄えた。その後の河川改修により藩営の城北米の集散場となり、現在は廃棄されここに至っている。

2　調査の経緯

建設省九州地方建設局熊本工事事務所では、玉名市街地を通行する主要幹線である一般国道２０８号線の交通混雑の解消を図り、交通ネットワークの充実、地域振興等を目的として、本地を迂回する全長8.5㎞におよぶ玉名バイパスの建設構想をとりまとめた。

この基本計画では建設予定地内に、周知及び新発見の埋蔵文化財等が13箇所、踏査の結果確認された。このことから県文化課では昭和52年から最終路線決定のための確認調査を２箇所（城が辻古墳群、大塚古墳）実施した。

さらに平成３年度からは記録保存のため、建設予定地内に位置する大塚遺跡の発掘調査に着手した。

また平成３・４年度からは玉名平野中心部に位置する条理遺構の確認調査を進めた。その結果事前の遺跡分布状況の情報等で把握できたように、玉名市河崎柳町地区に弥生時代から古墳時代、奈良末～平安時代にまたがる大規模な遺跡の所在が確認された。

平成６年度から始まった熊本県教育庁文化課による柳町遺跡の発掘調査はⅠ区3,059㎡を第１次調査とし、平成７年度は約5,562㎡の調査Ⅱ・Ⅲ区を県文化課と玉名市教育委員会社会教育課との合同調査を実施し、第２次調査とした。

バイパス建設路線内での柳町遺跡発掘調査予定面積は28,825㎡で、調査完了予定は平成１１年度である。

3　遺跡の概要

遺跡は標高約４～５ｍの玉名平野中央部に位置しており、景観上は水田のまっただ中である。現標高では調査区の東西は平準であり、北から南に向かっては緩やかに下降している。古墳時代の遺構分布は、調査区Ⅰ区の西部と調査Ⅲ区の東部に集中している。

調査区内の各時代に検出された、主要な遺構及び遺物は次のとおりである。

(1) 第１次調査（調査Ⅰ区：3,059㎡）

◎弥生時代

杭列３本、弥生土器

◎古墳時代前期（４世紀中頃）

○遺構：竪穴式住居跡５軒、掘立柱建物２軒、井戸５基、土壙、溝、柱穴　他

○遺物：土製模造鏡、石錘、軽石製浮き等

土師器

１号木製短甲、素弓、鼠返し、横槌、鋤、鍬、杓子、匙形木製品、櫂状木製品、曲柄又鍬、、組合鍬、平鍬、大小の木杭、柱材や建築部材　等

※サンプル資料を含めて1,110点

第１次調査で出土した主要な木製品の樹種は、次のとおりである。

素弓はｽﾀﾞｼﾞｲ、杓子はﾋｲﾗｷﾞ、ｱｶｶﾞｼ亜属、ｸﾇｷﾞ節、柱材や建築材ではｺﾅﾗ節、ｸｽﾉｷ、ｸﾘ、ﾓﾁﾉｷ属、ｱｶｶﾞｼ亜属、ｽﾀﾞｼﾞｲ、横づちはﾔﾌﾞﾂﾊﾞｷ、鼠返しはｲｽﾉｷ、鋤、鍬はｱｶｶﾞｼ亜属、ｽﾀﾞｼﾞｲ、匙形木製品はｱｶｶﾞｼ亜属、櫂状木製品はｶﾔ、ﾂﾌﾞﾗｼﾞｲ、大小の木杭では、ｼﾛﾀﾞﾓ、ｱｶｶﾞｼ亜属、ﾋｻｶｻ属、ﾋｲﾗｷﾞ、ｸﾛﾏﾂ、ﾔﾅｷﾞ属、ﾊﾞﾗ属、ｼｬｼｬﾝﾎﾞ、ｸﾘ等である。

なお１号木製短甲の樹種は、後述するようにモクセイ科トネリコ属シオジであるが、５号井戸から出土した大型杭は同属のシロダモであると確認されている。

(2) 第２次調査（調査Ⅱ・Ⅲ区：5,562㎡）

◎古墳時代前期（４世紀中頃）

○遺構：竪穴式住居跡１軒、井戸２基、土壙２９基、陸橋１基、杭列８本、溝１７本、柱穴　他

○遺物：内行花文鏡（破鏡で鈕部分）１面、ミニチュア土器３８個、土製模造鏡１４面、弥生土器、土師器　等

２号木製短甲、脚付盤、竪杵、二又鍬、横槌、屋根槌、鋤柄、鍬、鋤、手斧、編錘、さす、杷、長柄四本又鋤、にない棒、梯子、長弓、鳥形木製品、田下駄、大足、鍬、田舟、盤、槽、住居跡扉材　等

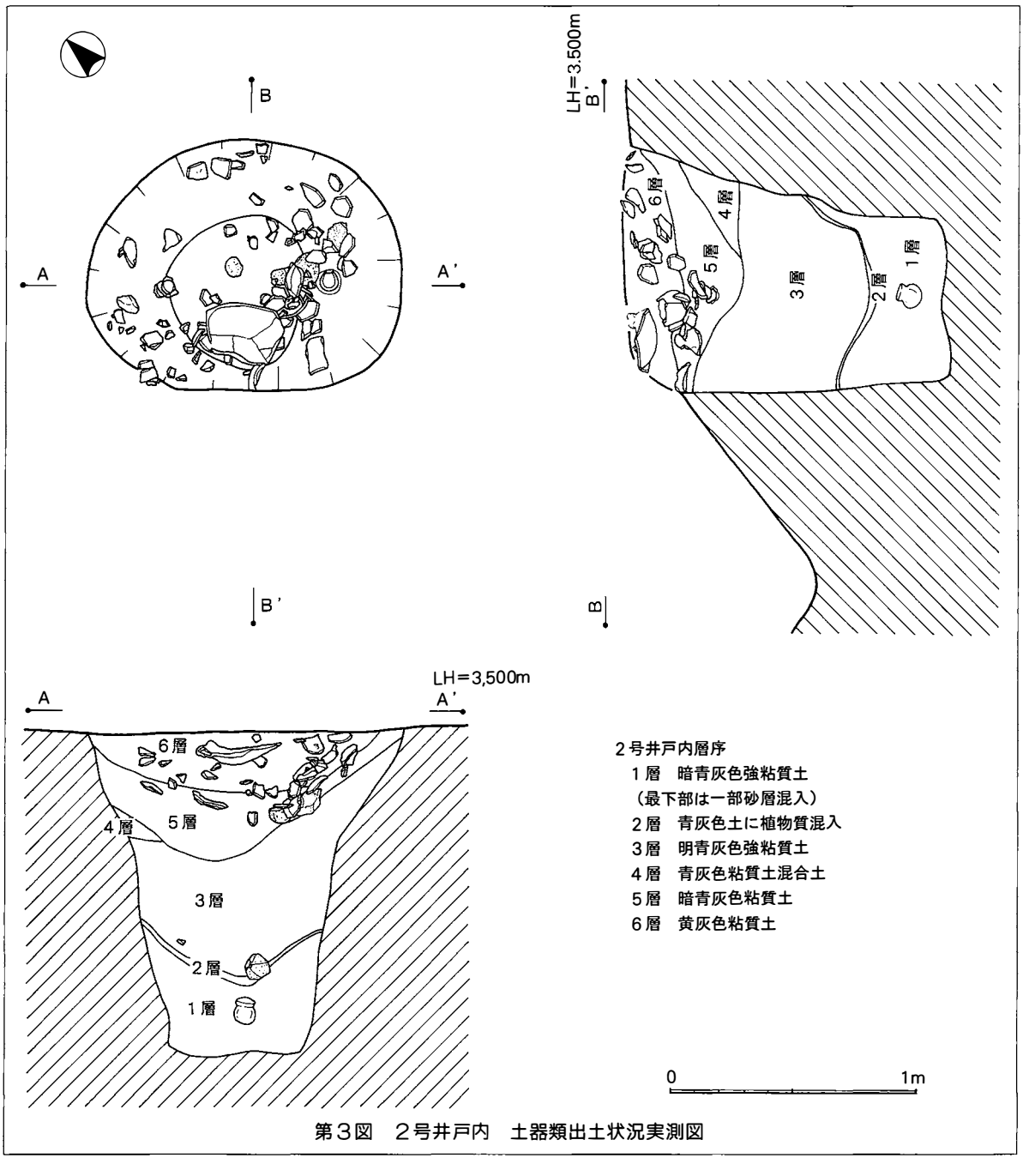
※形状用途が判明する木製品約300点

◎奈良時代（８世紀中頃）

○遺構：土塁遺構１基、杭列多数、柱穴　他

○遺物：銅銙帯（丸鞆）、耳環、刀子、有茎鏃、墨書土器、転用硯、須恵器、木札（木簡片）５点、櫛３点、箸・箸状木製品４点、挽物大型盤６点、挽物盤、杁、馬鍬　他

第２次調査で出土した木製品についての樹種は、今後調査予定である。



第３図　２号井戸内　土器類出土状況実測図

4　木製短甲

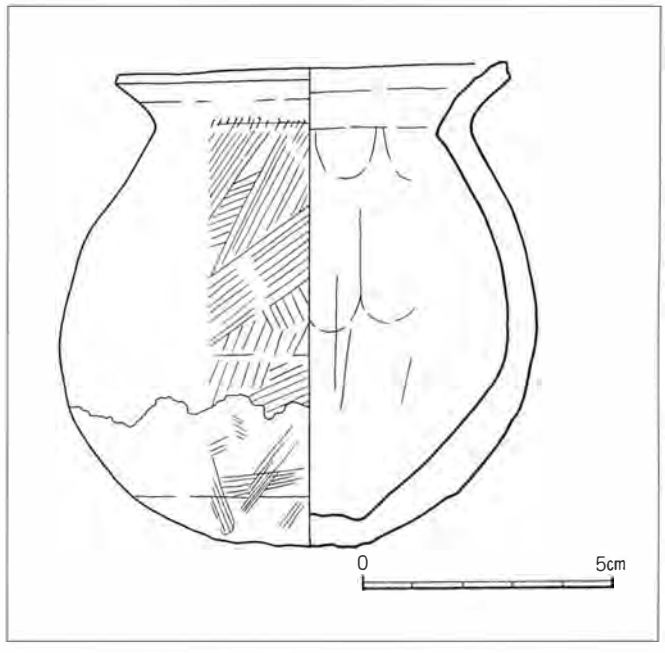
（1）出土状況

①　2号井戸

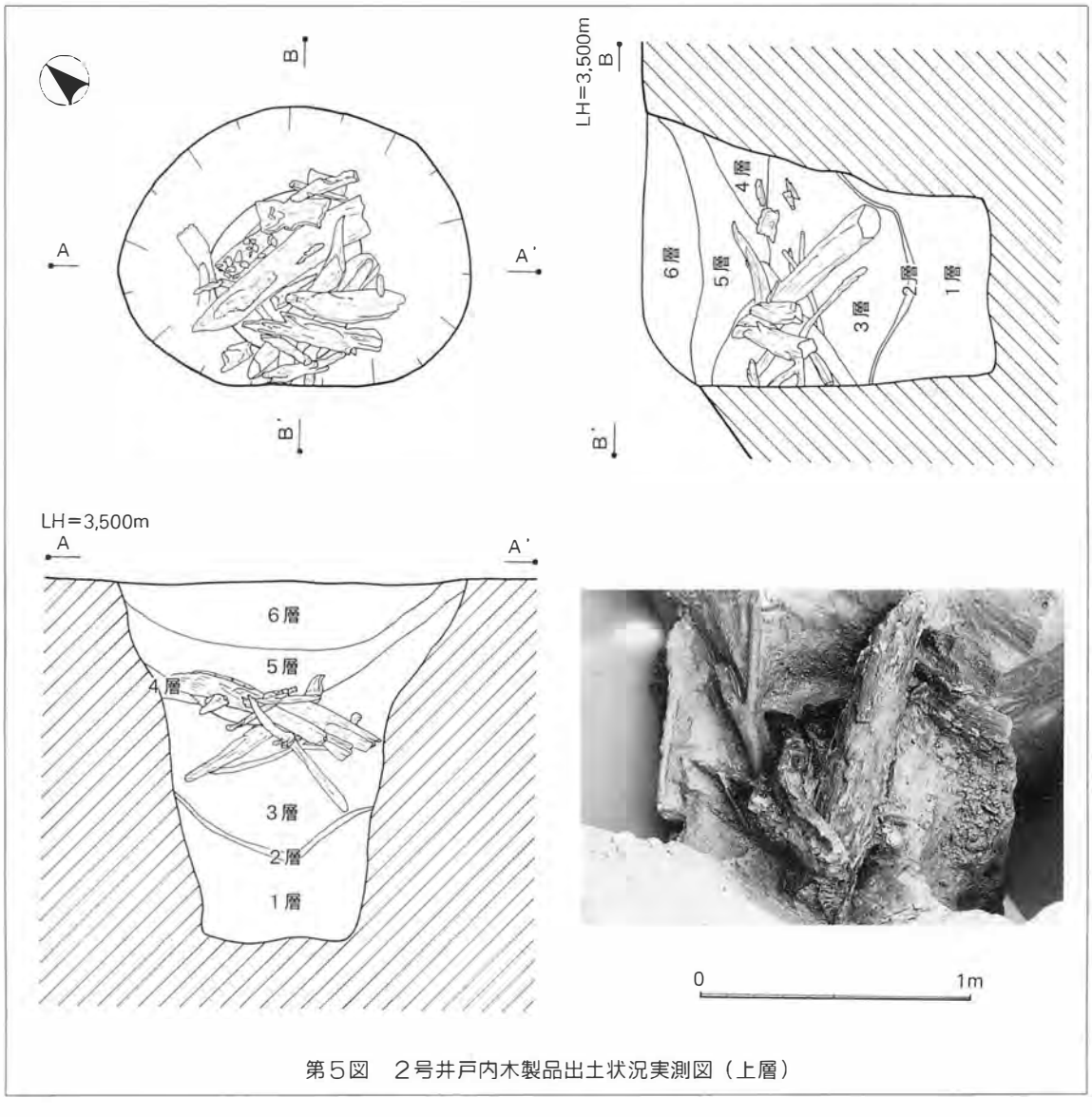
1号木製短甲が出土した2号井戸は調査Ⅰ区西側の排水用側溝に、遺構の上部端を一部分カットされる状態で確認された。

2号井戸の確認時の平面形状は、南北方向がやや長い楕円形で南北1.21m、東西1.02m、遺構確認面からの深さは129.3cmを測る。断面形態は最下面が平坦で、ほぼU字形を有した素堀で、砂層まで達している。

井戸の上層（6層・5層上位面まで）からは土師器の甕、壺片等が出土するが、大型の破片ではなく、



第4図　2号井戸内最下層出土土器実測図



第5図　2号井戸内木製品出土状況実測図（上層）

いずれも小破片である。上層からの木製品の出土はない。

中層（５層下面～３層）からは、１号木製短甲の部材３点の他、ほぞ・ほぞ穴を有する建築材2、転用材2、大型杭1、杭13、木片等9が出土する。

下層からは木片3点および第４図の小型丸底壷１点が最下砂層より12cm上面より出土している。

この小型丸底壷は、口縁部径7.8cm、全長9.4cm、胴部最大径9.5cmを計る。口径は胴部径より小さく、胴部最大径はほぼ中位に位置する。頸部から口縁部にかけては屈曲が強く、外湾し立ち上がる。胴部厚は最大7mmと器壁が厚いのが特徴である。外面上位は刷毛目調整で下位はへらでの調整、内面はなで調整を行う。４世紀中頃の資料と考える。

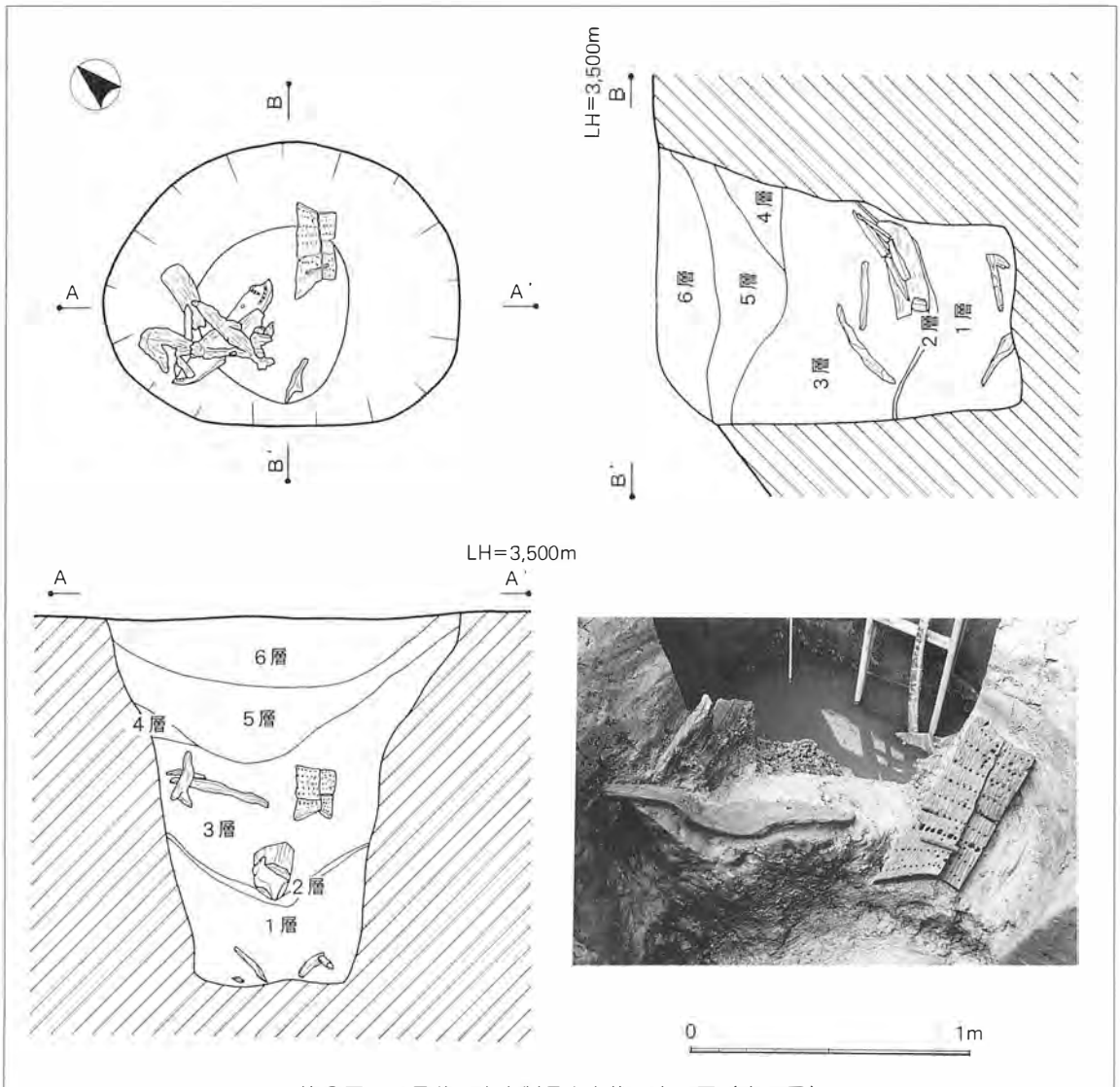
②　６号井戸

２号木製短甲は調査Ⅲ区の東側微高地上の６号井戸内より出土した。

井戸上部には２基の土壙が重複しており、６号井戸の上面は削平を受けているが、中位から下側は良好な状態で残存している。確認された平面形はほぼ円形で長軸78cm、短軸72cm、深さは54cmを測る。形状は素堀であり、形態は長軸方向に弱いステップを一段有し、中央部がさらに下がる。

この遺構では最下面が砂層まで達していることや類似する周辺の遺構状況等から、調査Ⅰ区内から確認された井戸とは形態はやや異なるが、井戸遺構と認定した。

２号短甲はこの最深部の肩に一部かかるようにして、裏面を上にして単独で出土した。



第６図　２号井戸内木製品出土状況実測図（中下層）

井戸内からは２号木製短甲以外の主要な出土遺物はなく、土師器の小片のみである。このため時期判定を行うための積極的材料は認められないが、井戸上層の遺構の重複状況とその資料年代、他時期の遺構がこの箇所に認められないこと等から、井戸を古墳時代前期（４世紀中頃）のものと判断した。

このことから２号木製短甲は、調査Ｉ区２号井戸内から出土した１号木製短甲とほぼ同時期と考えられる。

なおこの６号井戸は、昨年度１号木製短甲が出土した２号井戸からは、直線距離にして約130m程離れている。

（２）木製短甲

①１号木製短甲

肩部部材

後胴の肩部の部材は全幅48.7cm、残存する高さ9.8cm、厚さは0.5から1.4cmを測り、襟首部は最も厚く、襟首は半円筒形で最大17mm立ち上がる。この部材は後述の「後胴の上半から中央部の部材」との直接の接点はない。

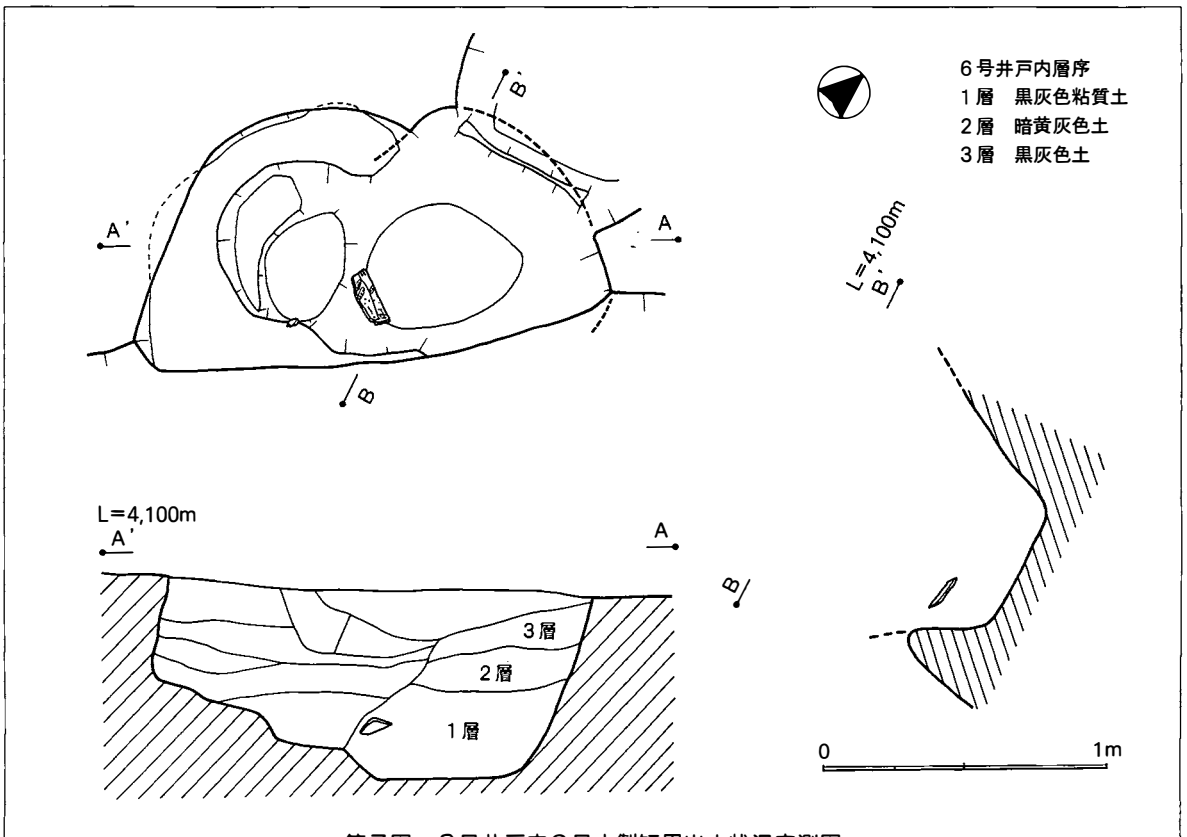
肩部部材の形状はあたかも「ハンガー」様である。第８図実測図の右側部は左側に相対して長く、右側部が精巧大胆に造作されているのに対して、左側部は規格内に押し込め、寸が詰まった印象を受ける。この左右部の全長の違いは、製作途中の左側端の欠損による造作によるものか、もしくは背部への武具類の装着等で、右側に意図的に機能性を持たせた結果とも考えられる。

表面は平滑で工具痕などはなく、丁寧な仕上げで、特に襟首から肩口へは首の曲線に合わせ調整を施している。襟首右側の一部及び全体部の下側は欠損しており、部材全体に一部腐食の痕跡が残る。

表側（背中外側）には肩口から内傾して一段彫り下げられ（6mm）ており、境界には一条の条線を彫り込む。また左右対象に小孔列が肩口線にそって１列と、その彫り下げ線にそって１列が裏面まで貫通している。小孔は径が3～5mmの規格で、その間隔は0.9～1.4cmとほぼ間隔を揃えている。

さらには裏面には表面小孔列と合致しての曲線小溝（幅6～12mm、彫り深さ2mm）が２条と直線小溝２条が彫られている。

なおこの小孔列及び小溝は復原位置からして後述



第７図　６号井戸内２号木製短甲出土状況実測図

の「後胴中央部部材」に配されている同様の小孔列及び小溝の１・２・８・９列目の流れに合致すると判断した。

この部位の右肩端部には革材が表面焼け焦げた状態で、その厚が2㎜、20㎜四方の範囲で残存している。このことから肩口から内傾し一段彫り下げられた部位全体には、革材を貼り付けていたと考えられる。

他に特徴的な穿孔としては、径9㎜の穿孔が彫り下げ部の下側、右側部のみ１個見られる。対の穿孔ではなく、その用途は判明しない。

材の所々には斑点状の黒漆が断片的に残存している。赤色顔料の塗布痕跡は肉眼では観察できない。また右襟頸部に狭い範囲ではるが、材の焼け焦げた痕跡が見られる

材の樹種は後胴中央部材と同様であると、肉眼では判断される。

後胴中央部材

後胴の上半から中央部の部材は上・下部が欠損しているが、残存幅38.2㎝、残存高さ16.6㎝、厚さ0.6から1.5㎝を測る。

出土時はこの部材の上下２枚の用材が、一部分つながった状態で確認された。さらに土圧の為か用材片側がずれて、離れた状態で確認され、ずれた一方には後述の棒状留具が、後ろ胴上半部材に密着して出土した。綴じの紐は確認できなかった。

この出土状況から後胴部材は２枚の材を、中央で接合して組み合わせていたと判断される。

この部材は上下側が欠損している。左右側の縁辺は面取りを行い、丁寧に仕上げている。

下側用材の断面斜の片面には、漆質特有のちぢれ形状が特徴的に見られることから、漆を接着剤として利用したと考えられる。しかし接合していたと考えられる反対面には、漆が全く残存していない事から、補修時片面のみに漆塗布を行ったとも考えられるが、詳細は不明である。

台形状の部材の上下方向に添って、表面９列の小孔が配列されている。穿たれた孔は径が3～7㎜の規格で、その間隔は0.8～1.8㎝と多少間隔が揃わない箇所もある。肩部部材の小孔よりは緩やかに配列されている印象を受ける。

小孔列は向かって右側の３から７列目までは直線的に、１・２・８・９列は左右側の造作線に合わせて規則的に配されている。

裏面にはその孔列に添って、幅4～8㎜、最大彫り深さ2㎜のＶ字形の小溝を上下方向に彫っている。

部材図中の右から２から３列目及び７から８列目にかけては、中央部に上下で計４個を基本とした棒状留具固定のための小穿孔が認められる。特に右側には表面には棒材の擦れ痕跡が明瞭に確認され、裏面には上下２条で、左右１対にして、組紐を確実に固定するためのものか、小溝を彫りこんでいる。

小孔列の１から２列目、８から９列目の間には、径7～11㎜とやや大型の穿孔を４個施す。ここでは左右で対象位置となることから、何らかの部品の取り付け用、もしくは上下部材の固定用の穿孔とも考えられる。

このように基本となり用途が推測できる９つの穿孔列、棒状留具利用の為の穿孔、中型穿孔の他に、使途や利用状況が解らない穿孔も接合部付近に多く見られる。

また穿孔した穴を、木質材で埋め込んだ「目釘」跡も不間隔で材の中央に６個見られる。その内２個（左端、中央上）については、目釘結合として利用しており、斜断面箇所で用材２枚を通して結合したと判断される。

しかし他の４個については、欠損したり、抜けたりという痕跡はない。一般的な目釘結合法として、具体的には新たな上下材の結合に関わるもの、もしくは一側からのみの固定に用いたのか、さらには漆塗り前に、穿孔の失敗を目釘で埋めたものか現況では判明しない。

さらに上下材の斜断面接合部には、１枚のみの穿孔で、２枚通しでは穿孔されていないものが４個確認される。

なお表面には赤色顔料の塗布痕跡が肉眼で、側面の小口部等に部分的に観察できる。全体塗布か部分塗布であるか、範囲の特定はできない。

後胴中央部材の樹種は同定の結果、モクセイ科ト

ネリコ属のシオジ（*Fraxinus　commemoralis* Koizumi）と特定された。

棒状留具

出土した棒状留具は、出土の状況等からして木製短甲の背中中央用材の向かって左側位置に取り付けられていた１点である。後胴中央部材表面の取り付け位置には、材の擦れ痕跡が認められる。

棒状留具は長さ7.8㎝、幅1.1㎝、最大厚0.9㎝を測り、断面は半円状である。

留具は丁寧に全周面取りを行い、かまぼこ形に仕上げ、両端から内側11㎜入った位置には紐綴用と思われる刻みを丁寧に作り付けている。

背中中央用材裏側の取り付け位置の小溝は、この棒状留具の刻み部とぴったりと一致する。小溝の間隔は4.2㎝である。ただし右側は小溝の間隔が5.2㎝と長いため、これより大型の留具を利用していた可能性が高い。

なお表面には漆および赤色顔料等の塗布痕跡は肉眼では観察できない。

材の樹種は肉眼では肩部材や後胴中央部材と異なる思われるが、樹種同定は未実施である。

②２号木製短甲

出土した短甲は残存高38.2㎝、残存幅13.8㎝、最大厚は2.0㎝を測る。古墳時代木製短甲の出土例では大型の類に入る。部材は脇部から中央部側にかけての残存で、前胴側であれば引合板までには至っていない。

柳町遺跡２号木製短甲は、前胴・後胴の部位の特定はできないが、胸板と地板の重なりの部を模倣したような線刻が象徴的に見られることから、前胴左側部分の可能性が高い。

脇部は緩やかな曲線を描いて造作され、その端部は他部材との引き合わせの為に先端を鋭利とし、合わせを容易にしている。開閉装置である蝶番金具の表現は無い。

横断面形では‘く’の字形とし、身体の曲面に合わせ屈曲させて材を加工した。そして正面側は平坦とし、材の厚さを最大20㎜に保たせた。

縦断面形では胸部位置をやや膨らませる一方で、腰部をくびれさせて、短甲がより身体に密着させる工夫を施している。また身体の屈時に短甲が腰から膝部にかけての圧迫を避けるために、裾部を大きく返して造作している。

この裾板部の造作は特に丁寧で、大きく返した端部は平坦に調整しており、覆輪部造作を表現したものとも思われる。

部材中央部には胸板（押付板）と地板の重なりの部を模倣したような線刻が１条、地板と帯金の重なりを模倣したような条線が２条、幅は1～2㎜、深さも1㎜と浅く彫られ、鉄板の厚さを表現している。

竪上位置の胸板（押付板）と地板の重なり部を模倣した線刻からは、約2㎜と一段掘り下げ、さらには地板と帯金の重なり部を模倣したような線刻から、さらに2㎜と長側全面を掘り窪めて調整している。

表面には２個１対を基本とする、規格が径3～6㎜の小孔が列をなして配されている。１対の双孔の長軸の基本は、施術方向に添っているが、まれに斜方向となる例も見られる。穿孔は曲線部分でも材にほぼ直角に穿っている。

上位の胸板（押付板）部分では脇曲線に合わせて左斜上方向に２列、中位では胸板と地板の境界域部に左斜上方向に２列、さらに下側の帯板部分には１列を左斜下方向に切り替えて配する。

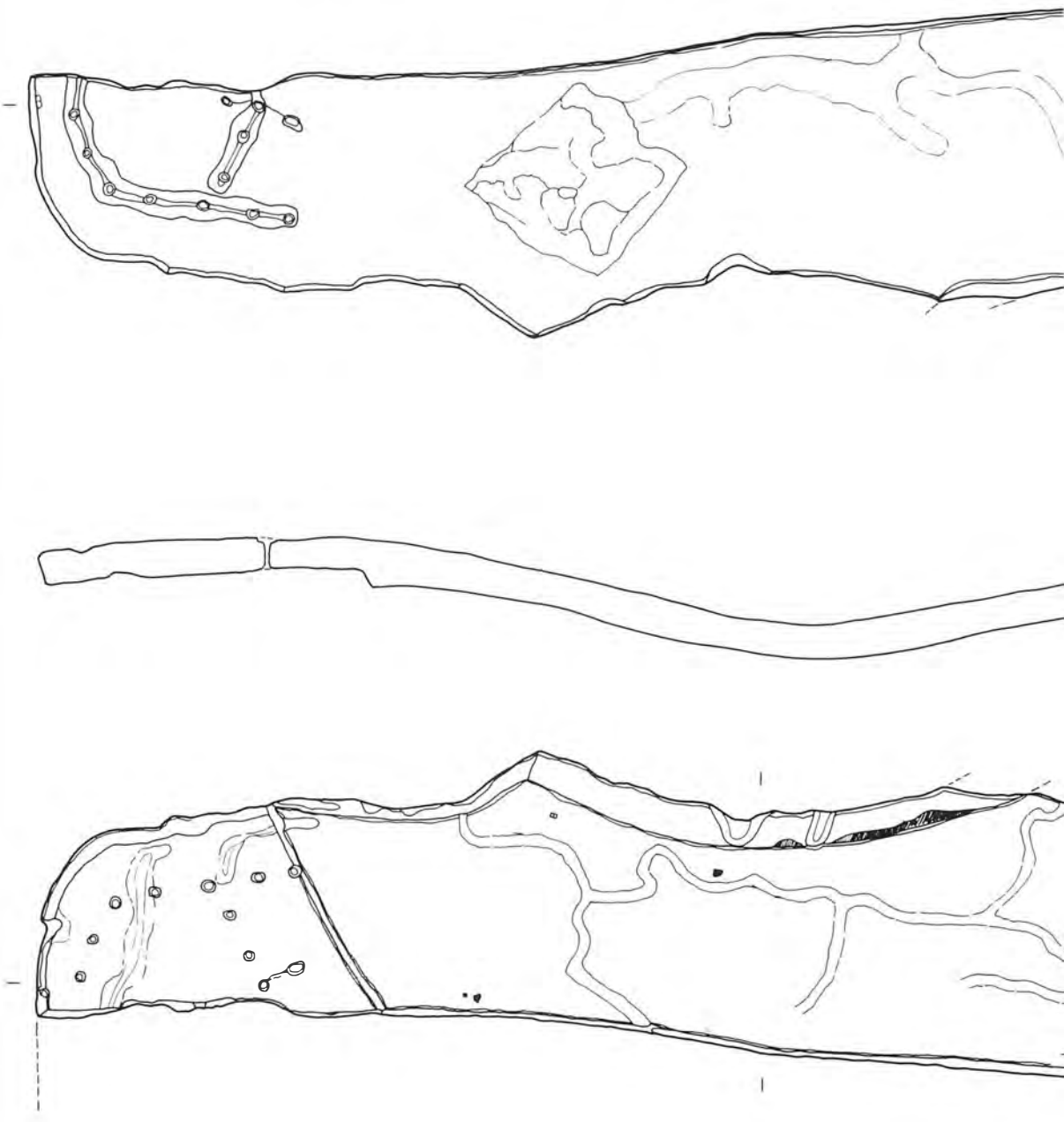
下位では横矧方向で最もくびれた箇所に１列、裾板部では裾の押さえの為であろうか、径が5～7㎜とやや中型の穿孔を施し１列を配している。

側面の脇側部には表もしくは裏胴本体との合わせの為の穿孔が、５個単体で縦方向に配置される。

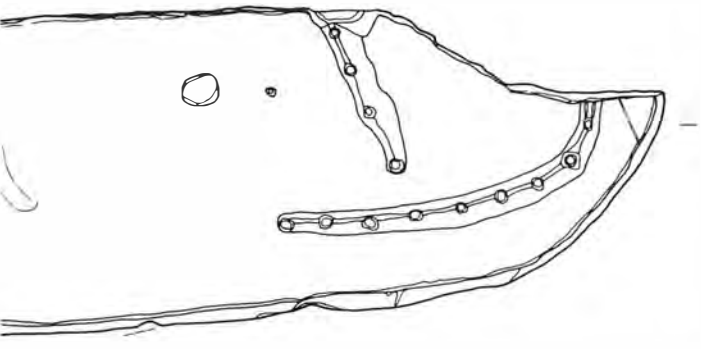
なお竪上には径7㎜の綿噛の受緒（懸緒）孔が１個確認され、そこには明瞭な擦れ痕跡が上方向に残されている。なお対となる１個が破損面に見られることから、この箇所への負荷により破損したことが伺える。

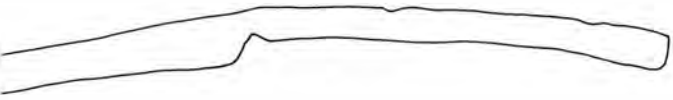
長側中央には縦方向に、径5㎜の小孔が２個、間隔が2.3㎜で穿孔されている。用途的には腰緒孔とも想定されるが、断定はできない。

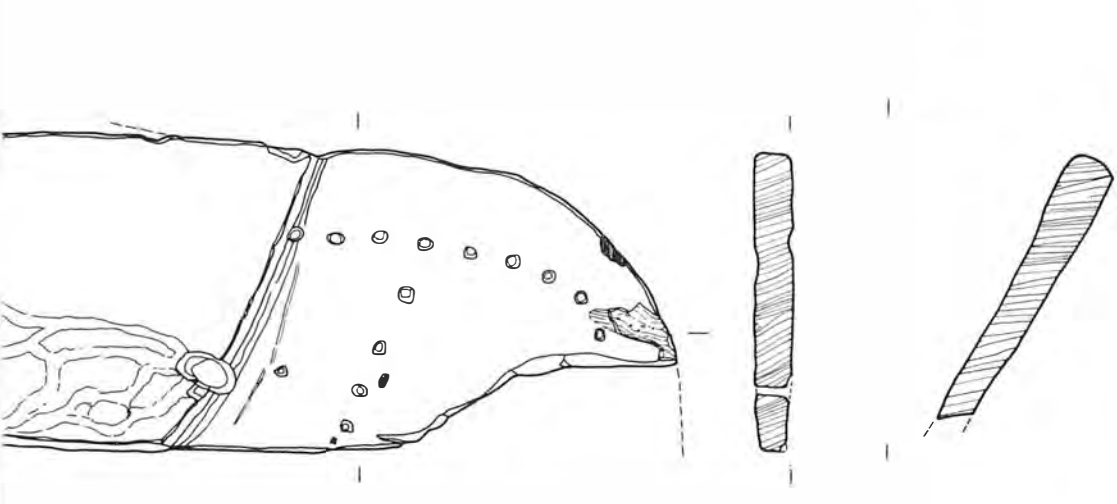
その他用途が特定できない、小孔が数箇所に見られる。



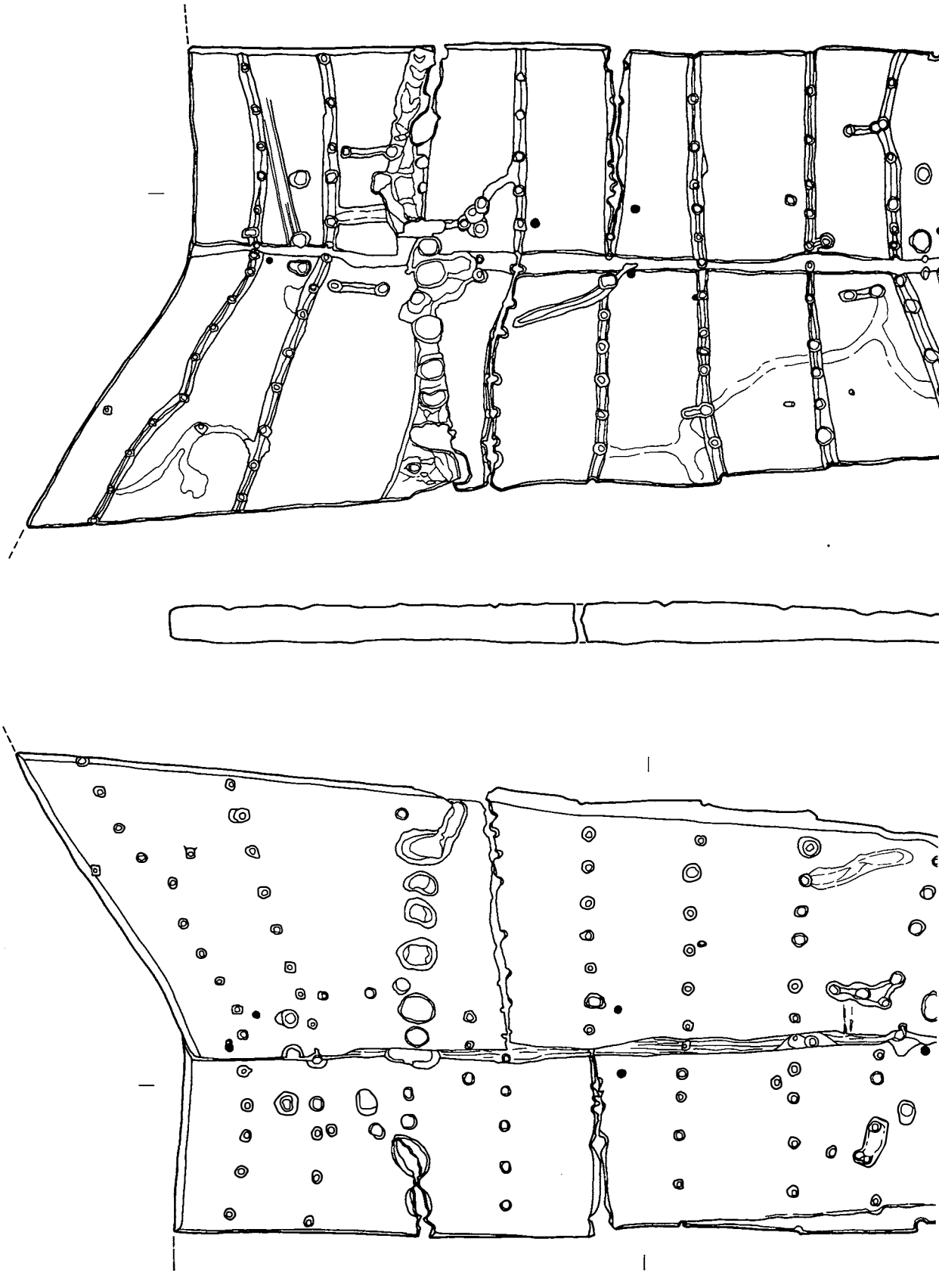
第８図　柳町遺跡１号木製短甲実測図（その１



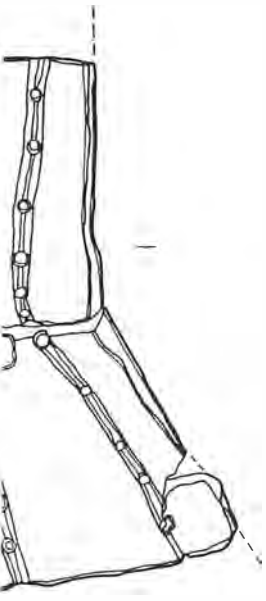




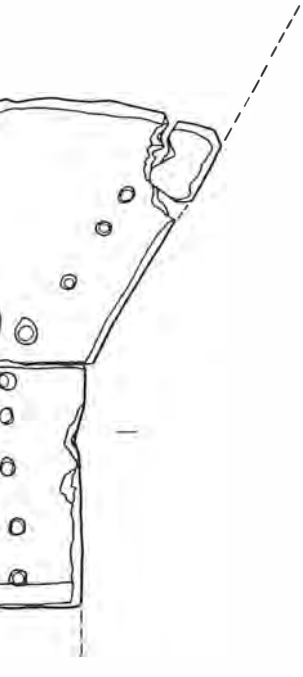
肩部）

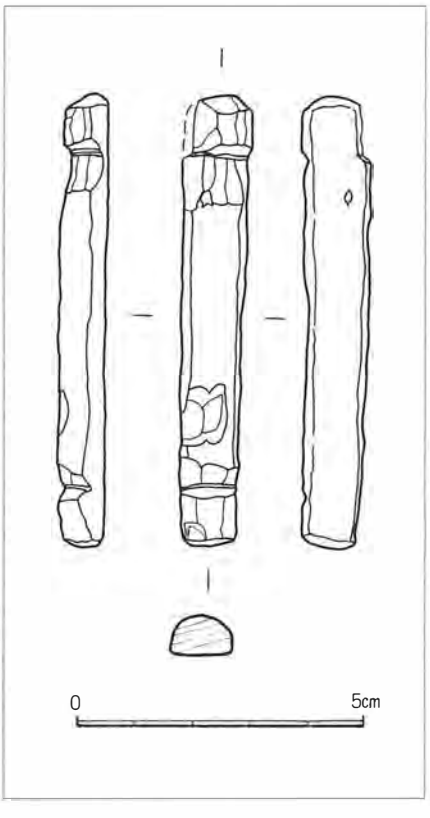


第９図　柳町遺跡１号木製短甲実測図（その１　後胴中央部　棒状留



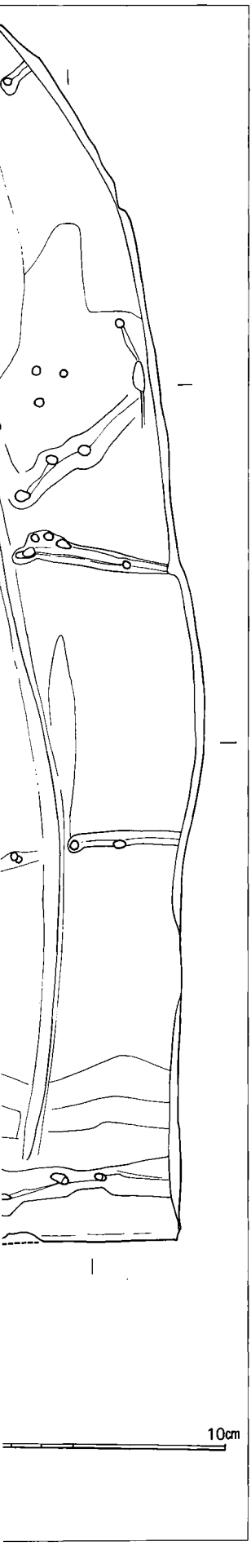
0 10cm





具)

第10図　２号木製短甲実測図


10cm

表面の上位部、中位には全面に焼け焦げた痕跡があり、特に胸板部下側には９㎝の長さで帯状に、裾板部でも返り部に特に強く焦げている。ただし焦げについては、製作時のものか、使用後の作用であるか、もしくは廃棄時の祭祀等に伴うものかは判明しない。

なお同様の焦げ痕跡は柳町１号木製短甲にも見られる。

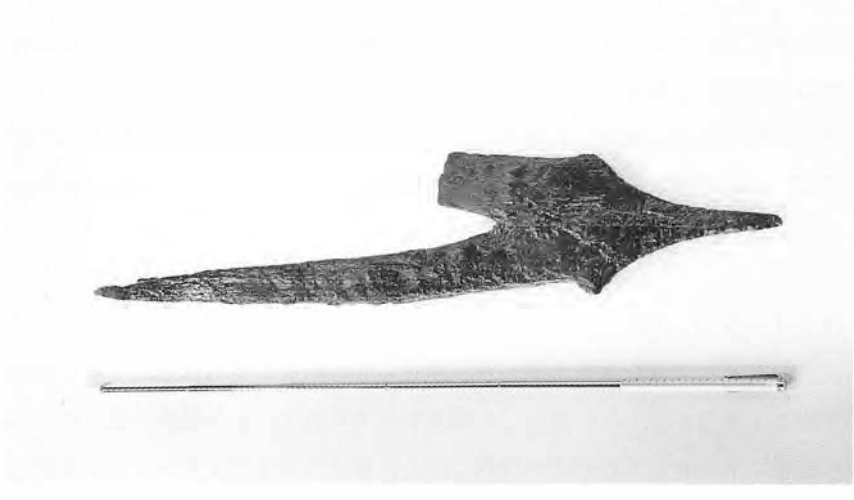
裏面には柳町１号木製短甲例と同様に、表面の小孔列に添って小溝を彫る。明瞭なものは４条確認され、帯金、地板の横方向を基本としている。

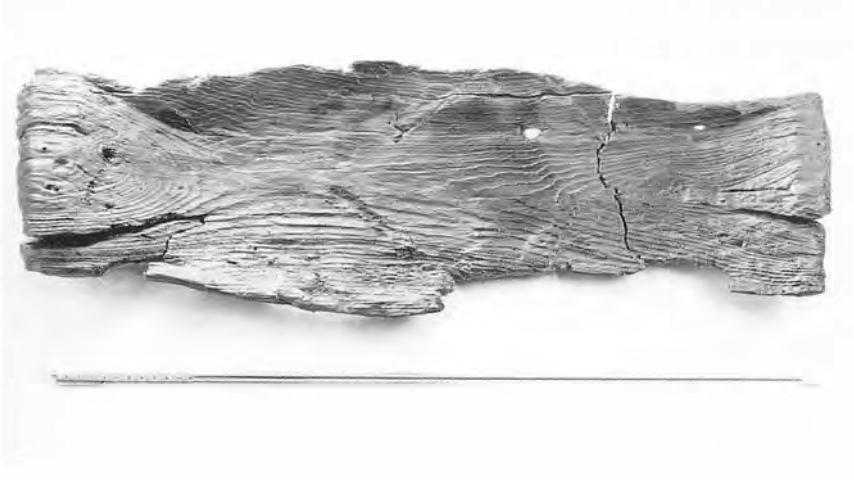
ただし胸板（押付板）部では、浅い小溝を四方や上方に巡らすなどして、複雑に綴じ合わせていたことが伺える。

表には全面に漆が塗られたと考えられるが、残存状態が悪く塗布範囲は不明である。

なお小溝底や全面には漆塗布痕跡が、肉眼で判断できる事から、内側の革着の装着前に塗りを済ませていたと考えられる。

柳町遺跡２号木製短甲の材質はかなり硬質で、樹種鑑定の結果、クスノキ科（Lauraceae sp.）木材と同定された。





5　資料分析

柳町遺跡から出土した１号木製短甲の樹種について

熊本大学教育学部教授　　大迫　靖雄

出土した木製短甲の外観は木製の色彩を止めていたが、やや劣化しており、本来の色調とはいえない状態であった。しかしながら、表面の年輪界は明瞭に示されていた。ただ、表面はかなり劣化しているため、外観から組織状態を観察することは不可能であった。そのため、顕微鏡による検眼を行うこととしたが、貴重な資料のため、検眼用の資料は短甲の形態を損なわない範囲で採取せざるを得なかった。したがって、検眼用資料はごく僅かとなり、完全な検眼を行うには不十分であったが、得られた結果から可能な鑑定を行うこととする。以下に、木口面、まさ目面、板目面の３方向の顕微鏡レベルでの特徴を示す。

木口面（写真番号 １）

資料が微小であることと年輪界部が劣化していたため、完全な年輪を有する切片が得られなかった。写真下方に僅かに径の大きな、真円に近い管口を示す道管が並んでいるのが観察される。このことから、本資料は、年輪界が径の大きな道管からなる孔圏によって形成されている環孔材といえる。また、孔圏外の孔管径は急激に小さくなっており、厚い壁面が見られる。また、孔圏外の道管は孤立もしくは複数個が放射方向に複合した状態で散布していることが観察される。放射組織は単列もしく２、３列のものからなることが示されている。

まさ目面（写真 ２，３）

写真２の右側に大きな道管が見られ、単せん孔の断面が見られる。写真２の大きな道管の左側に小道管が見られ、また、孔圏外を示す写真３にも小道管が見られるが、いずれの小道管にも単せん孔の断面が現れている。大道管の周囲にターミナル柔細胞が見られる。孔圏外には柔細胞ストランドが点在しているが、大部分の細胞は木繊維であることが示されている。ただ、木繊維の半径壁に小さな有縁壁孔が多数観察されることから、繊維状仮道管の性質を示しているといえる。放射組織はすべて平状細胞からなり、同性放射組織であることを示している。

板目面（写真 ４，５，６）

いずれも孔圏外の板目切片である。写真４，５の中央部に小道管が見られるが、単せん孔のせん孔縁がよく見られている。また、壁に交互壁孔が見られる。写真６の中央部に小道管の外側に軸方向柔細胞のストランドが鞘状に並んでいるのが見られる。その他は大部分が木繊維であることが示されている。放射組織は１～３列でその寸法に著しい差は見られず、板目面に均等に分布していることを示している。

以上の結果は、モクセイ科のシオジもしくはアオダモの特性を表しているが、孔圏内の道管の形状、孔圏外の道管の壁面の厚さなどから本樹種はシオジ（*Fraxinus commemoralis* Koizumi）と鑑定される。

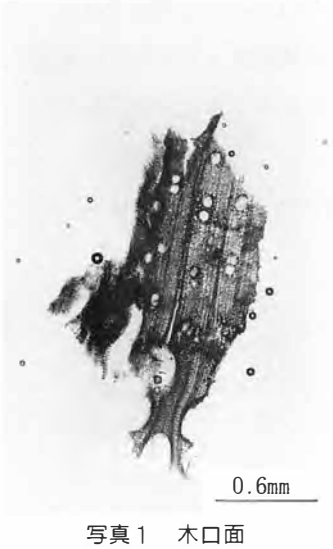


写真１　木口面

写真２　まさ目面

写真３　まさ目面

写真４　板目面

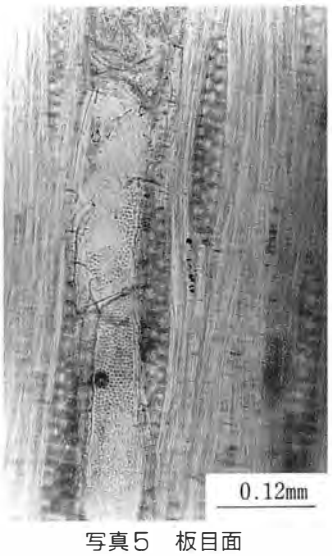


写真５　板目面

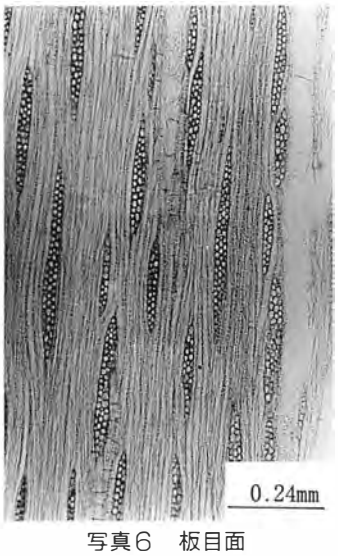


写真６　板目面

柳町遺跡出土の２号木製短甲の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

熊本県では、これまでに高橋南貝塚、国分僧寺跡などで出土した木製品などの樹種同定が行われ、その用材選択に関する資料が得られている（大迫、1978、1982）。玉名市では、玉名郡衙関連の倉院、庁院、講堂等において、出土した構築材と考えられる炭化材の樹種同定から用材選択に関する検討が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1994a、1994c）。その結果では、構築材にはマツ属複維管束亜属やコナラ属亜属コナラ節等が使用されている。これらの木材は、花粉分析結果などから当時の遺跡周辺で入手可能であったと考えられている。

本報告では、柳町遺跡から出土した２号木製短甲の樹種を明らかにし、その用材選択に関する資料を得る。

１．試料

試料は、２号木製短甲１点である。

２．方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で透過光による木材組織の観察を行い、その特徴から種類を同定する。

３．結果

２号木製短甲はクスノキ科に同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

・クスノキ科（Lauraceae sp.）

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独まれに２～３個が放射方向に複合する。導管は単穿孔または階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、１～３細胞幅、１～20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

現在日本に生息するクスノキ科は、８層28種に分類される。このうち、クスノキとタブノキ属は、木材組織が特徴的であり、今回の試料からは除外できる。また、クロモジ属のうち、カナクギノキを除く８種は、低木や外来種のために除外できる。分布が限られるニッケイ、シバニッケイ、シナクスモドキ、アカハダクスノキ、オガサワラシ、ゲッケイジュ、アオモジも除外できる。

残る樹種は、ヤブニッケイ、シロダモ、イヌガシ、カナクギノキ、ハマビワ、カゴノキ、バリバリノキであり、試料もこのいずれかと考えられる。これらの種類は、いずれも木材組織が類似しており、古材で見分けることは困難である。

4．考察

木製短甲は、これまでにも各地で出土している。その使用樹種については、奈良県平城宮跡下層から出土した4世紀後半～5世紀前半の短甲がヤナギ属？に同定されている（奈良国立文化財研究所、1993）。また当社未公表資料では、北部九州と中国地方でヤマグワを確認しているが、クスノキ科は確認していない。

木製短甲については、樹種同定を行った例が少ないために、現時点では用材選択の傾向や地域差などは不明である。今後さらに類例の蓄積を行い明らかにしていく必要がある。

〈引用文献〉

奈良国立文化財研究所（1993）木器集成図録　近畿原始編．410p．

大迫靖雄（1978）高橋南貝塚出土木製品の樹種鑑定．熊本県文化財調査報告第28集「高橋南貝塚本文」，p.77-84，熊本県教育委員会．

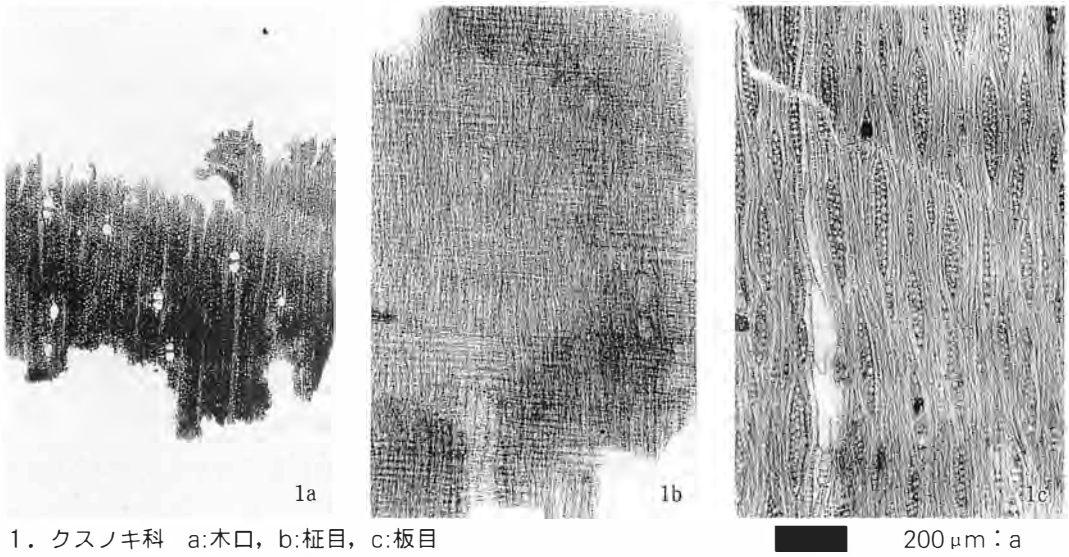
大迫靖雄（1982）国分僧寺出土木材．熊本県文化財調査報告第56集「肥後国分僧寺Ⅰ　昭和56年度熊本都市計画事業水前寺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」，p.110-114，熊本県教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1994a）講堂の建築材．玉名市歴史資料集成第十二集「―市政四〇周年記念―玉名郡衙」，p.36-41，玉名市・秘書企画課．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1994b）炭化材の樹種．玉名市歴史資料集成第十二集「―市政四〇周年記念―玉名群衙」，p.336-338，玉名市・秘書企画課．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1994c）倉院の自然科学分析．玉名市歴史資料集成第十二集「―市政四〇周年記念―玉名郡衙」，p.418-427，玉名市・秘書企画課．

柳町遺跡出土　2号木製短甲の木材組織図



1．クスノキ科　a:木口，b:柾目，c:板目

200μm：a
200μm：b,c

6　まとめ

①古墳時代前期の柳町遺跡の様子

ここでは調査区ごとの様子を検出された遺構や出土した遺物等から見て、全体像を探っていきたい。

調査Ⅰ区では西南方向からのびる平場に、約20×30mの範囲の中に竪穴住居跡５軒、掘立柱建物２軒、井戸５基等が、時期を経ながら営まれていた。各遺構の並存関係は出土資料未整理のため詳細は不明であるが、少なくとも竪穴住居跡の切り合い関係から２～３期が想定される。

各井戸内には木製短甲や素弓、農具、建築材が投棄され、中には多量の草類が確認された井戸もある。また井戸の最下層には、壷、甕等が井戸下層に単独及び複数個が確認された。奈良県唐古遺跡等から頸部に縄の断片が巻き付けられたままの土器が出土している事から、釣瓶としての用途も当然考えられる。しかし中には甕胴部の一部を打ち欠き小型壷を入れたものも見られ、井戸に関わる祭祀行為として鎮めたとも想定される。

東側の急激な段落ちには多くの土師器や木製品が廃棄され、なかには漁に用いる網の円筒状土錘が連続して確認された。

調査Ⅲ区の東側には、調査Ⅰ区の住居跡が営まれた平場と対峙するかのように、平場が位置し、その縁辺部に井戸及び無数の土壙が築かれる。その平場は南東側にさらに延び、県道を越え調査Ⅳ区以東まで広がり、そこには住居跡群の存在が予想される。

調査ⅡⅢ区の中央部には北から幅が3.8～5.6mの規格の流路３本が流れ、それが１本に合流し、さらに南に向けて流れる。流路間及び周辺には比高差30～50cmの小微高地が点在する。微高地から流路への水辺にかけては、ミニチュア土器、土製模造鏡、土製勾玉等が点在し、水に関わる祭祀行為の痕跡も伺える。なお青銅製破鏡も単独で廃棄された。

流路最下層には土師器と供に、多量の破損木製農具や建築部材に混じり長弓、鳥形木製品も廃棄されている。なお流路には通路としての陸橋と思われる施設が調査Ⅱ区西側に１基確認される。

このように古墳時代前期には、多様な木製農具が確認されている。そこからは起耕具の鍬・鋤・平鍬・二又鍬、整地具の柄振り、収穫脱穀具の竪杵・横槌・藁槌・鉄鎌柄・手斧柄、補助具の田下駄・田船・編錘、農耕儀礼用具の鳥形木製品、食器具の脚付盤・盤・曽等である。

木製品全体の出土量の中では起耕具の割合が少なく、水田管理的農具が主体の出土であることから、水田を中心としての安定した生活域を確保していた事が伺い知れる。

②１号木製短甲

柳町短甲の小孔列は、鉄製皮綴短甲を模したものにしては密度が濃く、しかも縦列を基準として定間隔で全体形状にあわせて配列を行っている。
胴部の小孔列の穿ち方は濃密であり、視覚的にも特異である。

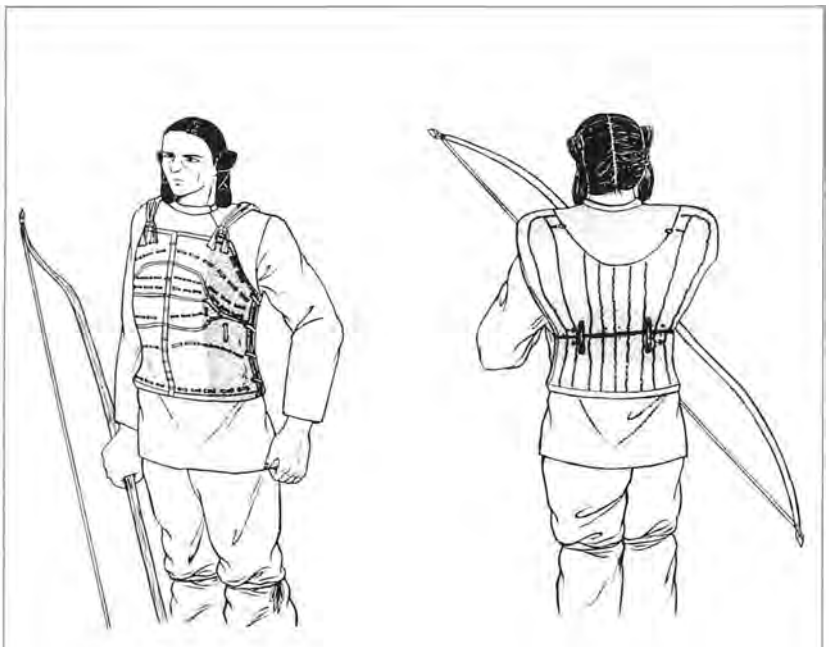
この密な配列状況は大阪府瓜生堂遺跡出土置盾、原の辻遺跡出土赤漆盾等の手法と類似する。さらには小孔の間隔は最大で1.8cmと間隔が狭いため、実用的には矢が命中したときの木製短甲の割れを防ぐための、縦列を基準とする直線化された紐綴じの用途等と想定される。

またあわせて平城京下層木製短甲例に見られるように、裏地の縫い付けの小孔列との併用も考えられる。

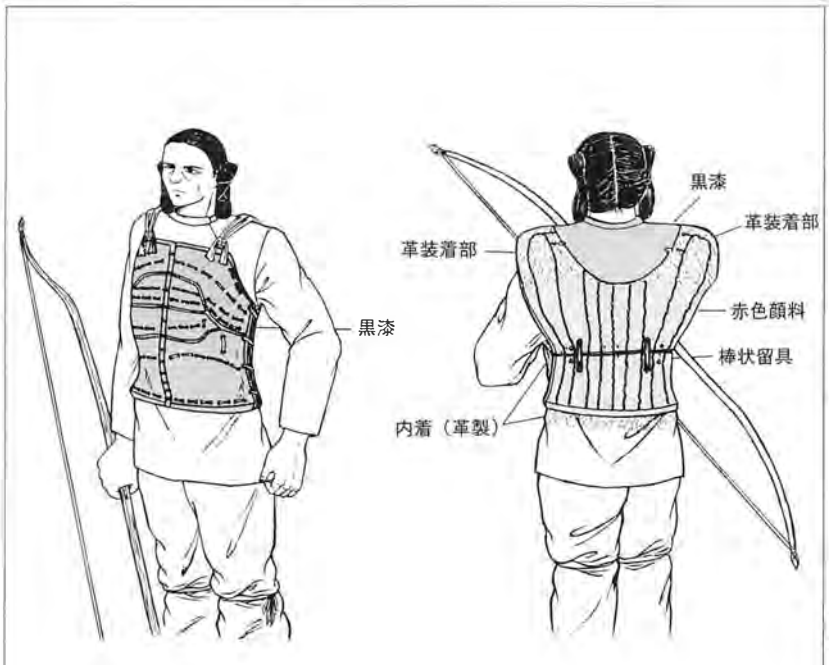
表装的には大阪府豊中市狐塚古墳出土の革製漆塗盾に見られるように、文様を構成する線の上に等間隔に「刺し縫い」で糸を通し表す技法も知られており、この技法との関連も考えられる。

裏面小溝を多用する類例資料としては、滋賀県彦根市松原内湖出土木製短甲例の内外面に小溝を彫る例が知られ、それは従来から言われるように皮紐が短甲内部に突き出るのを防ぐための小溝と考えられている。

後胴の中央部部材は上・下側が欠損しているが、出土時は後胴部材２枚の材を中央で接合して組み合わせた状態で確認された。しかも下側用材の片面には漆質特有の「ちぢれ形状」が特徴的に見られることから、漆を用いて接着していたと考える。



柳町遺跡木製短甲（図スクリーントーン部が出土部材）
左：２号木製短甲　右：１号木製短甲



柳町遺跡２号木製短甲
着用想像図（正面から）

柳町遺跡１号木製短甲
着用想像図（後面から）

第11図　柳町遺跡出土　木製短甲着用想像図

このように背中中央部にかけての組み合せ式の木製短甲の出土類例がない事から、当初からの意図しての組合せ資料となるのか不明である。

しかしながら、技法的には次のことから本短甲は補修を行っての作成であると判断した。

まず第１点として、上下用材の接合面が年輪に添って、やや右斜の用材であること。第２点として、上下材の斜断面接合部には１枚のみの貫通で、２枚通しで穿孔されていない穴が４個あること。第３点として、一度穿孔した穴を材で埋め込んだ目釘跡が不規則に見られ、その中には斜断面接合部に片方のみに目釘が隠されているものもあること。第４点として、用材の中央接合部に付近に集中して、使途や利用状況が解らない穿孔が多く見られること。以上の４点による。

このことは製作途上の初期の穿孔時の段階で、材の破損等による再作成工程が組まれ、漆による接着と一部の目釘による結合、さらには棒状留具を利用しての用材の強固な組み合せを行うに至ったと考える。

また製作技法については、第12図に示すように、これまで大木を50～60cmの長さに輪切りして、後胴一枚と前胴左右二枚に３分割する。そして人体上半身の形に合わせて内面を削り、彫刻を施したり漆を塗布したりする、技法が知られている。

柳町１号木製短甲の技法は大木を輪切りとするが、部材の選定では径最大部付近で２枚の用材を「横方向で木取り」を行うところに特徴を有する。いわゆる従来の「縦木取り」の成形とは異なる木取り技法ではなかろうか。

ここで襟部の造作について類例を見てみたい。日本出土の鉄製襟付短甲の例として、２例とりあげる。

大阪府黒姫山古墳出土の５号短甲は三角板鋲留式で24領出土した短甲の１領である。前胴は竪上３段、長側４段、高さ35cmの普通の形式であるが、後胴は竪上５段、長側４段の式になり高さも48cmを測る。さらに押付板左右の幅は51.3cmを測り、後胴上部には頸部をおおう突出した半円

の襟をつけた特殊な形式の襟付短甲がある。時代は５世紀後葉である。

大阪府豊中市大塚古墳からは２領の三角板革綴式襟付短甲が出土している。このうち２号短甲は前胴復原高33.6cm、後胴高47.3cm、押付板左右幅は51.0cmを測る。後胴竪上７段、長側４段の胴一連の形式であるが、頸部をおおう襟から、左右にのび脇に至る大形の押付板の存在は、襟と後胴地板と連接するU字形の帯金の配置とともに本形式に見られる特徴である。

さらに韓半島出土の資料としては、慶州九政洞古墳の竪矧板革綴式襟付短甲ならび福泉洞10号墳の竪矧板鋲留式襟付短甲の例が知られる。これらはいずれも幅広の竪矧板を用い、福泉洞10号墳例では頂部半円形に打ち出された襟を、鉄板を組み合わせて鋲留して接合する。これは５世紀中葉の資料である。慶州九政洞古墳例では、「襟甲もしくは固定式頸甲」といってよいほどの大形で上方がラッパ状に開く襟を持っている。これは４世紀代の資料である。

このように日本出土の鉄製襟付鋲留短甲の襟部は半円筒形を基本としており、一方の韓半島資料とは形態や製作技法等が大きく異なる。

今回出土した１号木製短甲は、襟首の造作を意図的に行った、全国初の後胴頸肩部が一体となった「襟付木製短甲」である。

あえて類例をさがせば先述した、大阪府大塚古墳の「襟と後胴地板と連接するU字形帯金」の曲線部が、肩部の「肩口から内傾して一段彫り下げ」状況にやや近似する。

これらのことから柳町１号木製短甲は、襟付短甲の祖型と捉えることができる資料であるか、今後も十分な検討協議が必要である。

このように柳町遺跡１号木製短甲の類似資料が全く見られないことから、古墳前期における多様な木製甲の存在が証明されるとともに、従来出土の木製短甲との系譜の違いを示すなど、その出土の意義は大きい。また「この形状の祖形がどこにあるのか」「製作技法の違いは何をしめすのか」等、その指し示す課題も大きい。

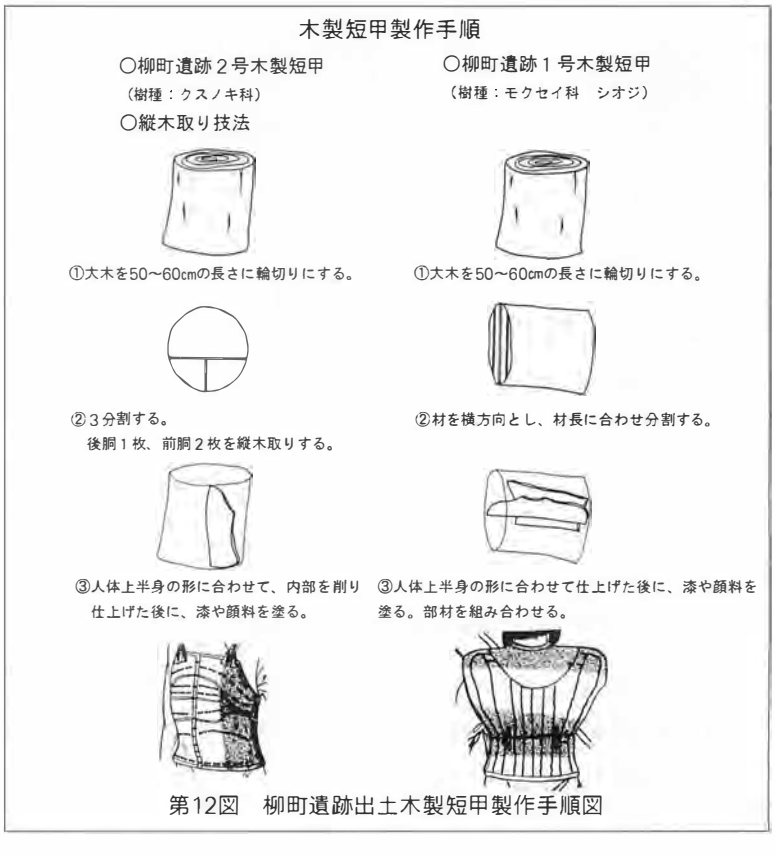
③２号木製短甲

柳町遺跡出土２号木製短甲の全体フォルムや裾部の返りは、坪井遺跡出土木製短甲例等に類似する。

古墳時代出土の在来型資料で、胴部表面に線刻し装飾を施す例は、全国では２例目である。橿原市坪井遺跡木製短甲例は「刃物で文様帯を７段に線引きした後、帯状、三角形、長方形、五角形の文様を彫り」「製作工程後に黒漆を塗り、文様帯に赤色顔料を塗っている」手法が知られている。

観察される小孔列は、１号木製短甲に比べれば密度は薄く、しかもその基本は２個一対の双孔である。木製短甲では単体での穿孔例は多く見られるが、このように全面に一対の双孔例では、板付遺跡木製短甲例があげられる。

この２個一対の双孔は表装的には鉄製革綴短甲の革綴部を模したものと考えられる。また実用面では



第12図　柳町遺跡出土木製短甲製作手順図

矢が命中したときの割れを防ぐための紐綴や一部は裏に着用する革着への装着の用途とも考えられる。

２号木製短甲では柳町１号木製短甲例や松原内湖木製短甲例と同様に、裏面に小溝が彫られている。ただし小溝は正面側に殆ど限られており、また脇部には特に丁寧に四方に廻すところに特徴を有している。

鉄製短甲の革綴の場合には、１対の双孔に通した紐を、次の１対の双孔まで、裏面ではつながったまま使用するものが多い。

このことからこの小溝は、革綴の際の革端を処理するためだけではなく、革綴でつながる直線部を効果的に彫り込み、一方ではその様子を表現したものと判断される。

脇側部の５個単体の小孔列は、表もしくは裏胴本体との合わせの為の穿孔と考えられ、鉄製短甲での蝶番金具を用いない「革帯式」の開閉技法の表現と考える。

このことから当初の想定通り左前胴であれば、左脇開か両脇開の形態であると推測される。

このように柳町遺跡２号木製短甲は、全体のフォルムや造作の曲線では従来までの鉄製短甲に類似し、細部では視覚的に線刻や綴孔列の重なり等から「鉄製長方板革綴短甲」を忠実に模倣したものと考えられる。

④遺跡のまとめ

これまでに日本出土の木製短甲は、第２表にあるように弥生時代８遺跡、古墳時代９遺跡、時期不明１遺跡の計１８遺跡が確認されている。

特に九州では弥生時代を中心に、福岡県夜須町惣利遺跡（後胴片肩部）、長崎県壱岐郡原の辻遺跡（前胴未製品・前胴押付板部）、佐賀県牛津町生立ヶ里遺跡（短冊形部材）、福岡市雀居遺跡（後胴）、福岡市板付遺跡（前胴）の５箇所から出土を見ている。

また古墳時代に入ってからも、本柳町遺跡（襟付後胴・前もしくは後胴）、佐賀県諸富町三重櫟ノ木遺跡（方形板片）、時期不明であるが佐賀県神埼郡一本杉遺跡（時期不明、小破片）と、九州地方での出土事例が多い。

本遺跡例のように、古墳時代に限っては木製短甲が４～５世紀前半代に集中することが従来より指摘されていた。

また出土箇所では、弥生時代は集落をめぐる環溝からの出土が、古墳時代では、集落遺跡とその周辺より多く出土している。このことから「古墳時代においては有事に備え、兵士が常駐したり、もしくは召集される集落等で、備えて保管されていた」との推測も成り立つのではなかろうか。

出土状況では、岡山市鹿田遺跡短甲は本遺跡と同様に井戸内からの出土である。これは木製短甲が破損したり、もしくは本来の役目を何等かの型で終えたとき破砕するなどして、その短甲廃棄のあり方に特殊な意味を有することが改めて推測される。

これまでに古墳の副葬品として出土した有機質製短甲も次の例が知られている。

奈良県天理市東大寺山古墳（古墳時代前期）からは、革製漆塗短甲及び草摺が盾、三葉形環頭に金錯銘を持つ鉄刀とともに出土している。また兵庫県赤穂群上群町西野山第３号墳（中期）から漆塗繊維製(ツヅラフジ)短甲が出土している。

現在までに出土例はないが、今後一般兵士が着用した彫刻・漆塗り・彩色のない、粗製木製短甲や粗製有機質製短甲の出土の可能性も高い。

多様な武具の存在が想定される。

柳町遺跡からほぼ同時期に、系譜の異なる２種類の木製短甲が並存し、使用され、廃棄されたことが判明したことは、古墳前期における多様な木製短甲の在り方という課題に重要な一石を投じるものであった。

このように遺跡の立地等から、本遺跡は軍事色が強く、短甲や弓等の武器類を常備し武装した集団勢力の拠点集落で、菊池川の「津」を意識した集落との想定もできる。

出土遺物の特異性等から柳町遺跡が古墳時代前期の玉名平野の中核となる集落であることが窺える。

今後遺跡の広がりを細部にわたり調査し、玉名平野における古墳成立前後の集団関係の把握を進めていきたい。

［引用・参考文献］

1　小林行雄　１９６２　塙書房
『古代の技術』

2　小林行雄　１９６４　塙書房
『続古代の技術』

3　小野山節他編　１９８７「武器・武具と馬具」
『世界考古学大系　日本編』

4　山田安彦編著　１９８８　古今書院
『地域の科学　人と地域のかかわり合い』

5　神谷正弘　１９９０「日本出土の木製短甲」
考古学を学ぶ会　『考古学論集　第３号』

6　種浦　修　１９９０　『三重樂ノ木遺跡』
諸富町文化財調査報告書第８集

7　石野博信他編　１９９１　雄山閣
『第６巻　土師器と須恵器　古墳時代の研究』

8　滝沢　誠「鋲留短甲の編年」
『考古学雑誌第７６巻　第３号』１９９１
日本考古學會

9　大橋隆司　１９９３　『生立ヶ里遺跡Ⅱ』
牛津町文化財調査報告書第２集

10　野上丈助編　１９９３　学生社
『論集　武具』

11　大橋隆司　１９９５
『生立ヶ里遺跡　出土木製品図録編』
牛津町文化財調査報告書第７集

12　扇崎　由　１９９５
「岡山県岡山市南方（済生会）遺跡」
月刊文化財通巻１５３号

13　岩波書店　１９９５
『日本の自然　地域７　九州』

14　佐賀県高等学校教育研究会編　地学部会
１９９５　築地書館
『佐賀の自然をたずねて』

15　岡山市教育委員会　１９９５　南方（済生会）
遺跡発掘調査現地説明会資料

16　高橋　工　１９９５
「東アジアにおける甲冑の系統と日本」
『日本考古学第２号』　日本考古学協会

17　原の辻遺跡発掘調査現地説明会資料　１９９５
長崎県・芦辺町・石田町教育委員会

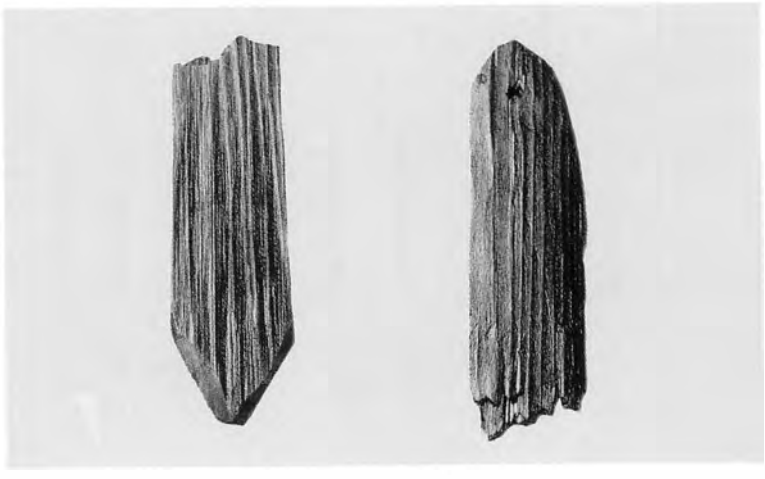
18　下村　智　１９９５　『雀居遺跡２』
福岡市埋蔵文化財調査報告第４０６集

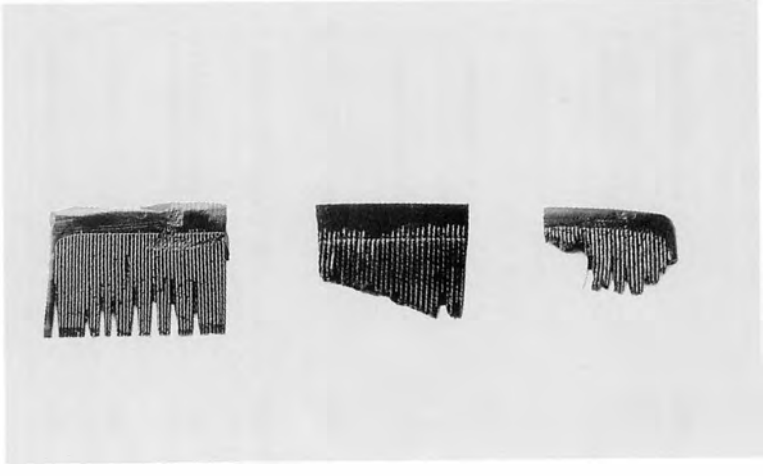
19　松村道博　１９９５　『雀居遺跡３』
福岡市埋蔵文化財調査報告第４０７集

20　石井扶美子　１９９６
「惣利遺跡」『古代の木製食器』
第３９回埋蔵文化財研究集会　　実行委員会

第２表　日本出土木製短甲出土一覧表

番号	時代	遺跡名	所在地	時期	出土箇所等	出土部材等(数値cm)	樹種	木製短甲の特徴等	木製短甲の型式
1	弥生時代	惣利遺跡 ソウリ	福岡県朝倉郡夜須町 惣利	前期末	溜池	後胴片肩部片(25×14) １点	スダジイ	渦巻文、黒漆赤色顔料一部塗布。４枚板材を繋いでの利用。	
2		原の辻２号 １号 ハルノツジ	長崎県壱岐郡芦辺町	中期 後期末	旧河道 環濠	前胴押し付け板部(長辺15) 前胴片か(13×18　厚さ３) ２個体分	不明	縁に規則的に穿孔。表裏とも黒漆。 肉眼状では無文様。未製品で細部経常不明	２号：綴じ合わせ型 １号：未製品
3		生立ヶ里 ウリュウガリ	佐賀県小城郡牛津町 生立ヶ里	中期前半	方形土壙下層	短冊形(15～16×４　厚さ0.4) 10点	不明	両端部に４個の穿孔を有するものが多い。 非常に薄い。	綴じ合わせ型
4		南方(済生会) ミナミカタ	岡山県岡山市南方	中期	用水路、河道他	短冊形(18～14×８　厚さ1.0) 30点	不明	表面は黒漆を塗布。短甲の全体形状が判明	綴じ合わせ型
5		百間革兼基 ヒャクケンガワカネモト	岡山県岡山市兼基	中期	旧河道	短冊形(８×５　厚さ1.2) １点	不明	表面には黒漆。両端の穿孔部には皮鞣の痕跡が残る。	綴じ合わせ型
6		伊場 イバ	静岡県浜松市伊場	後期前半 ２C末 ３C頭	環濠に廃棄	右前胴部(ほぼ完形：34×21) 後胴左半分(羽根状の外観：49×38) 計２点	柳 柳	同心円、三角、羽状、渦巻文等を複雑緻密に彫刻。 黒漆、丹を区分し塗布。大木利用	
7		雀居 ササイ	福岡県福岡市南区 雀居	後期	環濠	後胴右側部片(33×15)他 １点	柿	連続三角、連続造形文、沈線等を刻む。 表面全体に黒漆を塗布。吉備地方の文様	
8		鹿田 シカタ	岡山県岡山市鹿田	終末期 ３C後半	井戸内出土 土器と共伴	後胴右肩部片(18×10)裾部 片(７×９)他　３点	楓属	沈線と凹状の窪みを部分的に配し、表面端部に黒漆のみ。体面で0.8CMとかなり薄い	
9	弥生 古墳	板付 イタズケ	福岡県福岡市南区 板付	終末期 古墳初頭	水田跡 木製農具と共	右前胴片(24×９　厚さ0.7) １点	アカカシ 亜　属	薄い作りで前胴引合せの紐孔。漆顔料なし	
10	古墳時代	釈迦山 シャカヤマ	愛知県安城郡釈迦山	初頭 ４C前半	包含層中農耕具と出土	前胴懸緒部(13×９) １点	広葉樹系	表面に沈線と裏地を着けるための円孔配置赤色顔料の痕跡	在来型か？
11		三重楲ノ木 ミエウノキ	佐賀県佐賀郡諸富町 三重楲ノ木	４C	井戸	方形板片(12×9.4　厚さ0.7) １点	不明	上部１段、中部２段、下部１段に木皮で帯を入れる。 表面黒漆に赤色の装飾。	綴じ合わせ型
12		柳町　　１号 ヤナギマチ２号	熊本県玉名市河崎字 柳町	４C中頃	井戸 井戸	後胴肩部から中央部　３点 前胴から脇部(38×15)　１点	シオジ 楠科	襟首から肩部へを造作。９列の小孔列配置表面には地板等を表現した線刻３条	※新型式 鉄製短甲模倣
13		松原内湖 マツバラナイコ	滋賀県彦根市松原内 湖	前期	包含層中 大量の木製品	後胴左半部片(49×20) １点	楓属	襟首は凹状に襟えぐりを施すが、肩先の張出なし。 円孔列と小溝の配置。全面黒漆	在来型 (鉄製短甲模倣)
14		下田 シモダ	大阪府堺市下田町	前期	溝	胴部前面で左側縁のみ欠損(42×25) １点	不明	全面黒漆。頚のえぐり紐掛け孔２個。肩部保護の為に側縁が上方に延びる。	在来型 (鉄製短甲模倣)
15		赤野井湾 アカノイワン	滋賀県守山市赤野井 地先	５C代か	大溝 丹塗り板共伴	後胴右脇部分か(13×８) １点	不明	円孔列と紐痕跡。膝や顔料はない。	在来型 (鉄製短甲模倣)
16		坪井 ツボイ	奈良県橿原市常盤 ツボイ	中期初め	溝 木材と出土	左前胴か(42×12) 三角板鉄製短甲模倣　１点	不明	文様帯を設け、三角形、五角形、長方形の文様を彫窪め、赤色顔料を塗る。	在来型 (鉄製短甲模倣)
17		平城宮下層 ヘイジョウキュー	奈良県奈良市西大寺	中期初め	河川跡 武・工・厨房具	後胴右脇部片(33×９) １点	柳属	濃密な円孔は、裏地を縫付ける綴孔か。 白木のままで無彩色。	在来型 (鉄製短甲模倣)
18	時期不明	野田一本杉 (利田柳)	佐賀県神崎郡神崎町	不明	不明	未製品 ２点	不明	１本の木から二個体製作。前胴部と懸緒部か。	不明





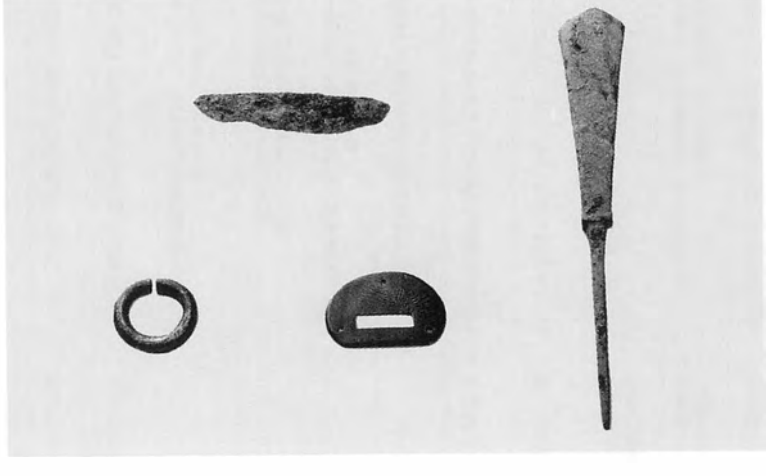


図　　版

図版１　２号井戸内　木製短甲　出土状況

１号木製短甲　表側

図版２　２号木製短甲　表側

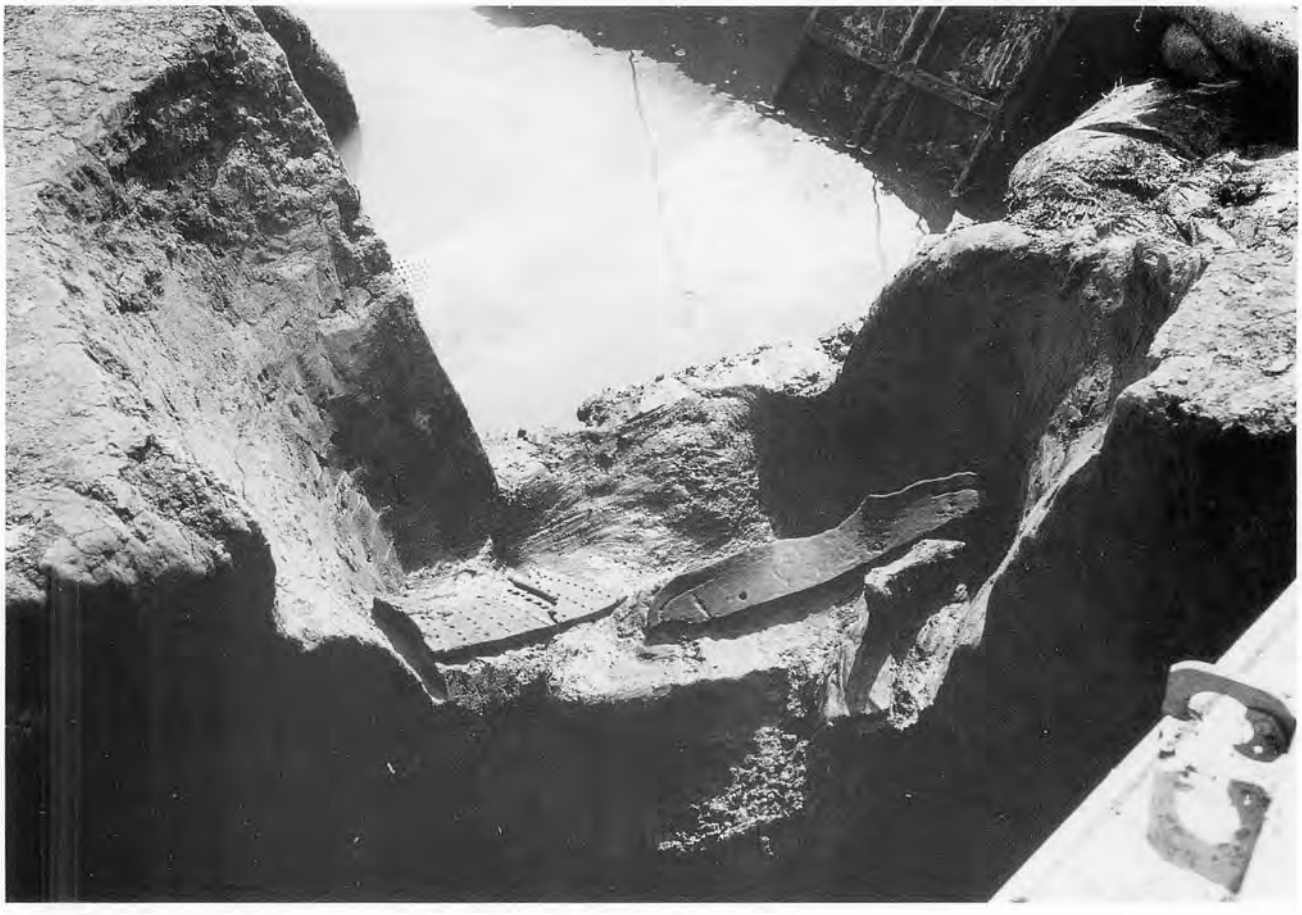
２号木製短甲　拡大

図版３　２号木製短甲　裏側

２号木製短甲　拡大

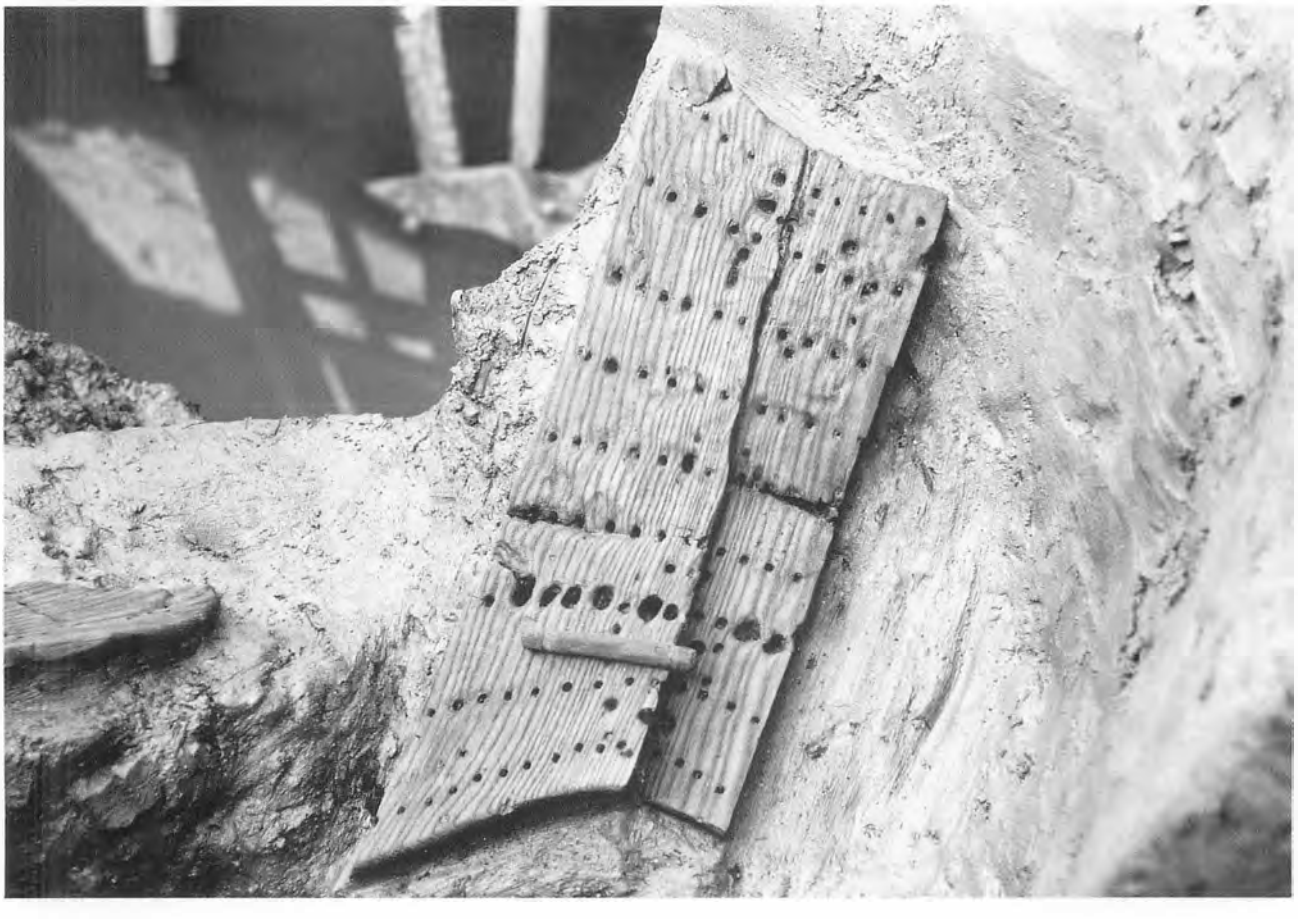
図版４　２号井戸内　木製品出土状況（上層）

図版５　２号井戸内　１号木製短甲出土状況（その１）



図版６　２号井戸内　１号木製短甲出土状況（その２）

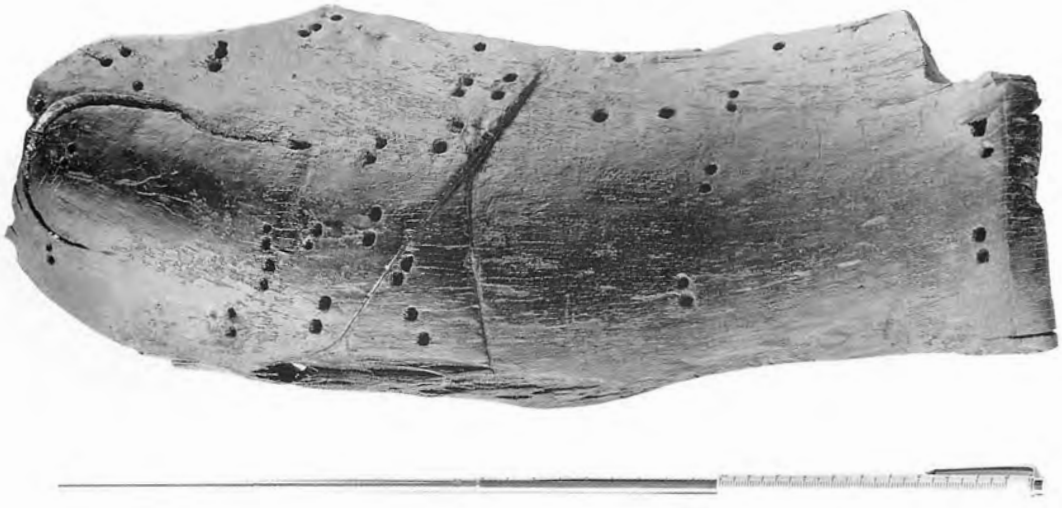
図版７　１号木製短甲（後胴部棒状留具）　１号木製短甲（肩部）

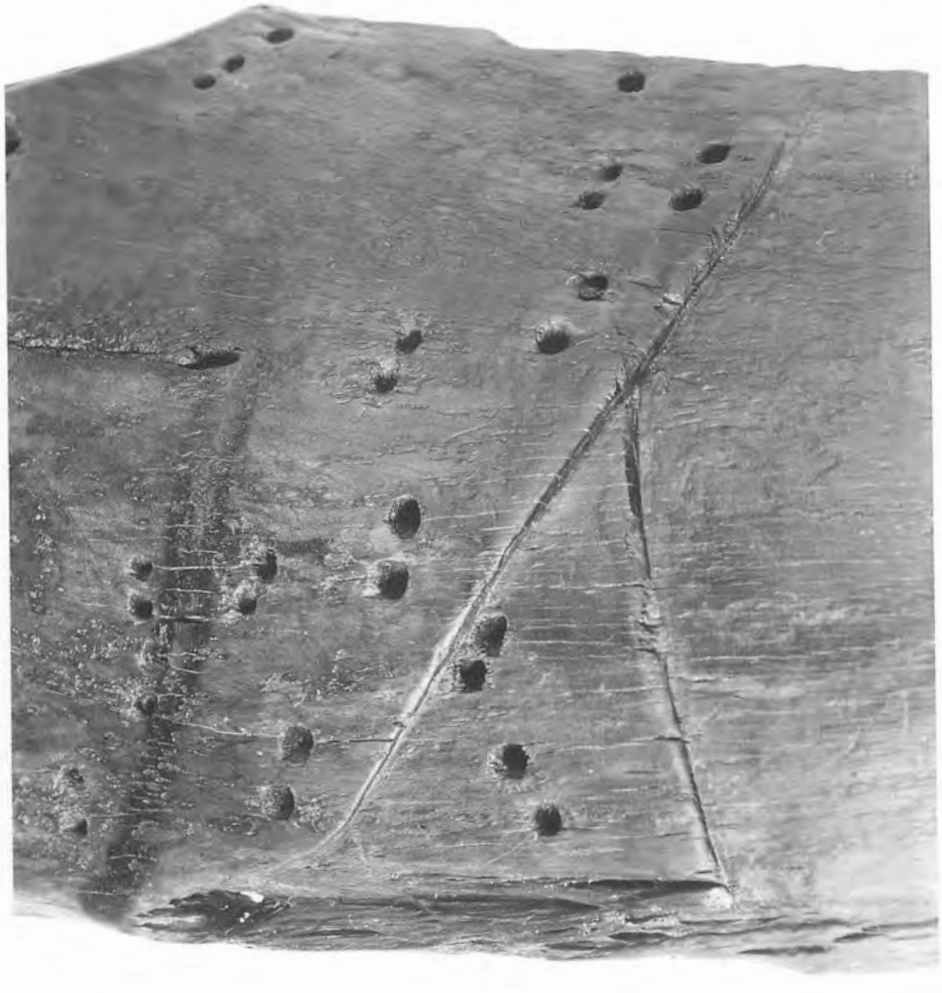


図版８　６号井戸内　２号木製短甲出土状況（その１）

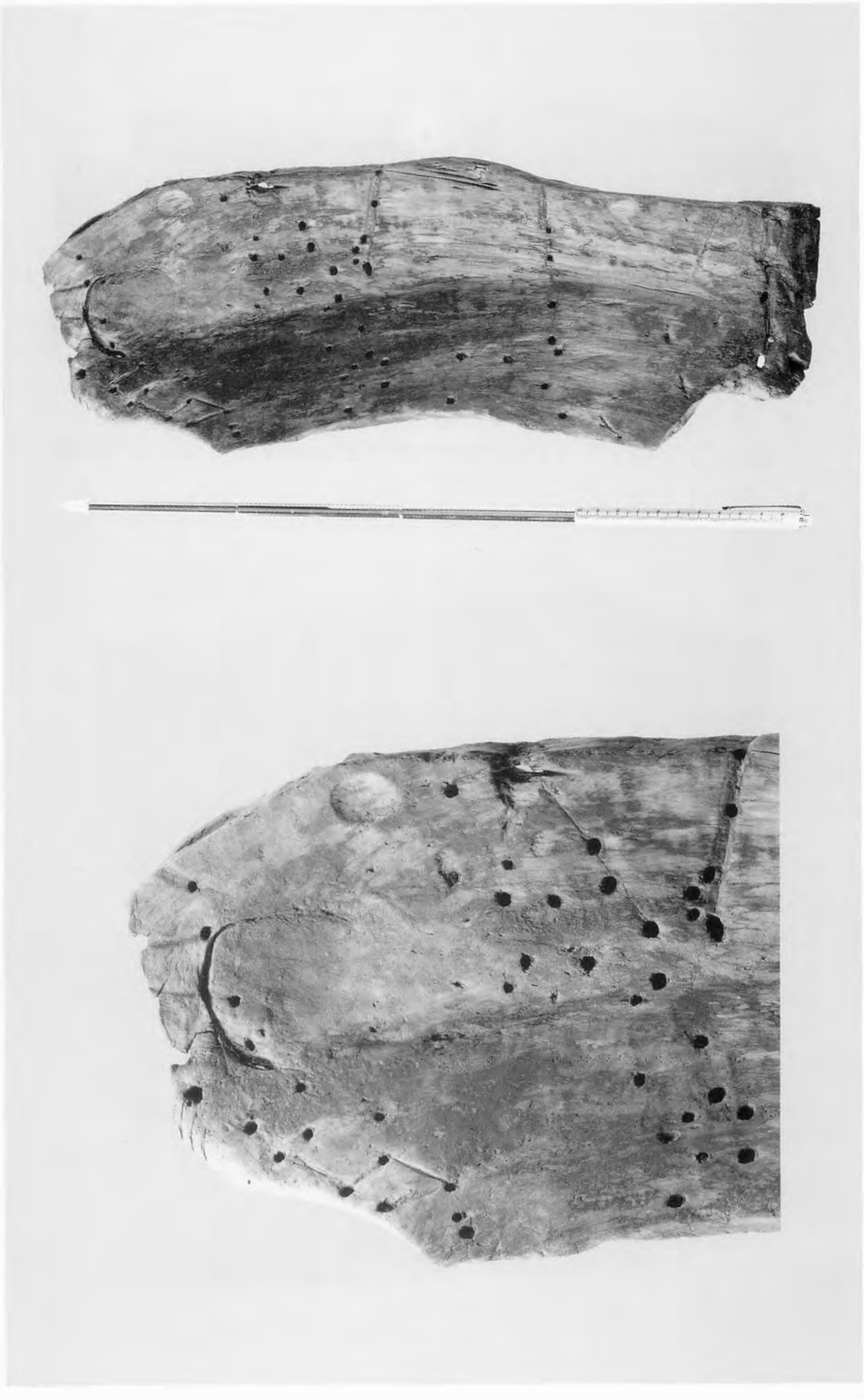
図版９　６号井内　１号木製短甲出土状況（その２）

図版10　２号木製短甲（表側）





図版11　２号木製短甲（裏側）



熊本県文化財調査報告　第153集

西　片　町　遺　跡

―新熊本県八代総合庁舎建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告―

付編
柳町遺跡出土の木製短甲資料紹介

平成８年３月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　株式会社 城野印刷所
〒861-22　熊本県上益城郡益城町広崎1630-1
☎（096）286-3366

07 教委 教文
② 009

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 153 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：西片町遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/